

四二二
ブカ！ アントロブカ……』彼は終りのシラブルを長く、引張りながら、かたくな、涙聲で自暴に叫び立てた。

彼はしばらく聲を潜めてゐたが、やがて再び叫び出した。彼の聲は静かな軽く眠つてゐる空気の中にはつきりと響き渡つた。尠くとも三十回位彼はアントロブカといふ名を呼び立てた。その時不意に平野のすつと遠くの果から、宛も別の世界からの様に、やつと聴きとれる様な答が漂うて來た——

『なんだあい？』

子供の聲は直ちに悦ばしげに勢づいて叫び返した——

『おいでよ、おい！』

『何しによろ？』とも一つの聲が大分間を措いてから答へた。

『何でつて、父つあんに打たれるんだよ！』と初めの聲が急がはしく叫び返した。

第二の聲はもうそれに答へなかつた。そして子供は又もやアントロブカの名を呼び出した。彼の聲は漸々と微かになり、漸々と間遠になりつゝもなほ私の耳底に漂うてゐた。其うちにつつかり日が暮れて、私は私の村を劃る、そしてコルトフカから三哩許りある、森の角を廻つた……『アントロブカ！』といふ聲は夜の蔭に充された空気の中に矢張り聞えてゐた。

十八

ピヨトル・ペトロツギチ・カラタエフ

五年前の秋にモスクワからツウラへ行く途中で、馬のない爲め殆ど全一日を驛場に暮らしたことがある。私は遊獵からの歸途に、ついつかりして私の三匹の馬を先へ歸してゐたのである。驛場を預る人物は意地悪さうな大分年の行つた男で、髪の毛を額から鼻の上まで垂らし、眠さうな小さな眼をしてゐて、私が色々に訴へたり頼んだりするのを面倒くさうにあしらつて、宛ら自分の商賣柄を呪つてゐたかの様に、ぶり／＼し乍ら戸を締めた。そして、戸を締めて出したに踏段のところ、馭者共を怒鳴りつけた。馭者共は腕に重い木のくびきをつ附けながら泥濘の中を呑氣さうにぶらついてゐた。或は欠伸をしたり、ぼり／＼搔いたりしながらベンチに掛けてゐた。そして、その親方の怒鳴り聲などに對しては何等の特別な注意をも拂はなかつた。私は已に三遍も茶を入れさせて、幾度か無益に眠らうとした。そして壁や窓にあるあらゆる掲示を讀み了つた。私は恐ろしき退屈に苦しめられた。寒さと頼りなき絶望の中に私は私の馬車の仰向けにされた轆をぢつと見てゐた。其時突然鈴の音が聞えて、三頭の疲れた馬に牽かせた小さな馬車が踏段のところへやつて來た。新來の客は馬車か

ら飛び出して『馬を！ 大急ぎでね！』と叫び乍ら部屋の中へ這入つて来た。こんな場合よくあることだが、馬が一匹も無いといふ見廻役の言葉を不思議さうにしながら聴入つてゐた。私は死ぬ程退屈になつた人間の貪るやうな好奇心でもつて、私の新しい仲間を頭の頂上から足の爪先迄仔細に調べた。彼は大凡三十位で、もあらうと思はれた。あばたが彼の顔に消し難き痕を残したが黄ろくひからびて、不愉快な赤銅色を見せてゐる。彼の長い青黒い髪の毛は後ろに縮れて垂れかゝり、前の方には派手な形に捲かれてゐる。彼の小さな腫れぼつた眼は全く何の表情も有しなかつた。少しばかりの薄い毛が上唇にのぞいてゐる。彼は馬市場なんぞでよく見る放埒な田舎紳士といふ風體で、大分油染みた縞のコーカサスジャケットを著、色の褪めたライラク色のネクタイをしめ、銅のボタンの着いたチッキに大きな漏斗とでもいつた様な恰好をした鼠色のズボンをはいた。そして、其下からはブラシをかけない靴の爪先がやつと見えてゐる。彼は酒と煙草の匂ひをぶん／＼と匂はしてゐる。殆ど袖のうちに隠れたる彼の肥つた赤い手には銀の指輪や、ツウラ出來の指輪が見えてゐる。かうした人物は露西亞には只に何十人といふ許りでなく何百人といふ程もゐる。彼等と知り合ふのは實際の話が何も格別面白い事でない。然し乍ら、この新來の客を見た時の先入見にも關らず私は彼の顔のうちに無頓著な人の好い、そして熱情に富んだ表情を認めずにはゐられなかつた。

『この旦那もかうして一時間以上もお待ちになつて居ります。』と監督は私を指しながら云つた。

一時間以上だと！ こいつ私をからかつてゐるんだなと私は思つた。

『だが、その方は私程お急ぎでもないだらう。』と新來の客は答へた。

『それはどうか解りませんが。』と監督は不機嫌さうに云つた。

『ぢやあ眞實に出來ないんだね？ 一匹も馬がないんだね？』

『仕様がございません。只の一匹も居ませんからな。』

『よし、それぢや湯沸サモウルを持つて來さして呉れ。暫らく待つとしよう。どうにも仕様がな。』

新來の客はベンチに腰を下ろしてテーブルの上に帽子を投出して、頭の髪に手をやつた。

『もうお茶をお上りになりましたか？』と彼は私に尋ねた。

『はあ。』

『でもおつきあひに最少しいかゞです。』

私は首肯うなづいた。大きな赤い湯沸サモウルは四度テーブルの上に現れた。私はラム酒の瓶を取出した。

私が新しき知合を餘り豊かでない田舎紳士と見立てたのは間違つてゐなかつた。彼の名は、ピョートル・ペトロギッチ・カラタエフといふのであつた。

我々は種々の話をしだした。夜はやつて来てから半時間と経たない内に、何の隠しだでもなく身の上話を残らずして聞かした。

『私は今モスクワへ行く所なんですがね。』と彼は四杯目の盃を啜りながら私に云つた。『もう田舎には懲り／＼しました。』

『それはまたどうして？』

『どうしてといふこともないですが、財産は滅茶々々になる、百姓は酷い目に逢はせますしね、全く。年々よくないことばかり、凶作だの何だのと引續きましてね……やもうかうなつちや到底』と彼は力なく眼を反らし乍ら、『どうにも土地の始末がつかなくなつたんですよ！』

『どうしてまあそんなことに？』

『どうしてと云つて』と彼は私を遮つた。『私なんぞの人間に旨く行く筈がありませんよ！』

『ねえ』と彼は片つ方の頭を掻きながらせつせと煙草を喫ひながらつゞけた。『私を御覧になつたら私があんまりその……や實際のところ私は大した教育を受けて居りません。何しろあんまり樂にもやつてみませんでしたからな。や、御免なさい、どうも何でもべら／＼やる方ですからな。それに何です……』

彼はその言葉を終ひまで言はないで手を振つて言葉を打切つた。私は彼が思ひ違ひをして

ゐるといふことを、私が彼に逢つたのを大層喜んでゐるといふことなどを彼に云ひ確めた。それから十分な教育が必ずしも財産をよく整理する上に必要なものであると思はないといふことを話した。

『さう思ひます』と彼は答へた。『私もさう思ひます。しかし矢張り特別の性質が必要です。よ！世の中には好きなことが何でもやれて、そしてうまく行くといふやうな人もあります！が私は……時に失禮ですが貴方はペテルブルグからお出でになりましたか、それともモスクワからですか？』

『私はペテルブルグから來たのです。』

彼は鼻孔から長い煙の輪を吹いた。

『私は役人にならうと思つてモスクワへ行くとおつたところですよ。』

『どの役所へお入りになりますか？』

『わかりませんな。まあ行き當りばつたりですな。實の所私は役人生活が怖ろしいんです。直ぐに責任問題と來るんですからな。私は何時も田舎にばかりゐて御承知の通り田舎には慣れて居りますが……然し今ぢや全く仕様がないうんです……貧乏といふ奴にかゝつては……や貧乏程有難くないものはありませんからな！』

『然しこれからは彼方へお出でになつて、うまく行きませう。』

『あちらへ行つて……左様、あちらへ行つて面白くやれるかどうかは解りませんが、兎に角やつて見るつもりです、面白く行くものかも知れません……尤も田舎より好いことがあらうとも思ひませんけれども。』

『ぢやあ、貴方の田舎の方でお暮らしになることは全く出来ないんですか？』
彼は太息を吐いた。

『全く出来ないんです。行つて見れば今では私のものではないんです。』

『へえ、どうしてまたそんなことに？』

『なあに人の好い奴なんですがね——隣の奴——の爲になつて……賣渡しの證文も……』

氣の毒なビョトル・ペトロギッチは手でもつて顔を撫でてしばらく考へてゐたが、臆て頭を振つた。

『なあに……それももとはと云へば』と彼は短い沈黙の後で付け加へた。『誰を責めることも出来ません。皆な自分の過ちなんですから。私は見榮を張ることが好きでして、見榮を張るのが、やどうも馬鹿な話で！』

『田舎で派手な暮らしをなすつたんですか？』と私は彼に訊ねた。

『派手にやつたのです』と彼は私の顔を眞正面に見ながら力を入れて答へた。『十二匹の獵犬をそれがまた滅多にない様な奴を有つてゐたのです』（かういふ言葉を餘程の大事件らしく勿體をつけて云つた。）『どんな時だつて兎を見附けたら決して遁がしませんでした。赤つた狐を追はせると——至で魔物見たやうだ、眞實に蛇の様でした。それから私は灰色の獵犬も自慢にしてゐました。しかし今となつちやあ皆な昔のことです、いや隠したつて仕様がありません。私はまた鳥撃ちにも出かけたものです。『伯爵夫人』といふセッター種の素晴らしい犬がありました、恐ろしく鼻の利く奴で——それは何でも彼でも追つかけました。折々沼地の様な處へ行つて、『捜せ』と云ひ附けることがあるんです。その時あいつが厭だといひ出したものなら十匹の犬を連れて來たところで何も見附かるものぢやありません。その代りあいつが何かを追つかけるとなると、それは全く見物でしたな。それでうちでは却々行儀が宜いんです。左の手にパンをのつけて、『ユダヤ人が嘗めたぞ』といへばあいつは見向きもいたしません。ところが右の手へせて、『若い夫人が召し上つた』といへば直ぐに平げてしまひます。あいつの生んだ仔犬が一匹おりましたが——素晴らしい仔犬で、實はモスクワへ連れて行かうと思つたのですが、或友人から鐵砲と一緒に所望されてね。その友人が、『モスクワでは獵のことなんぞ考へちやゐられまい』つて云ふんです。私は鐵砲も仔犬も呉れて來まし

た。で今は友人のところに居る譯です。』

『然しモスクワでだつて獵は出来ませう。』

『いや、獵なんぞして何の役にたつものですか。自分一身をどうして宜いか持て餘したんですからな。これからは何でも我慢をして行かなくちやなりません。それはさうとモスクワ邊の暮らし向に就てちと伺ひ度いものですな——物價は高いんですかな？』

『いやそんなでもありません。』

『そんなでもありませんか……それから何ですかモスクワにはジヴプシイがゐませうか？』

『ジヴシイつてどんな？』

『あのそれ、市なんぞにやつて来る奴ですよ。』

『え、それならモスクワには……』

『さうですか、宜いことを教はりました。私はジヴシイが好きで、やどうもジヴシイばかりは好きで好きで……』

ピョトル・ペトロギッチの眼には前後を忘れた悦びの輝きがあつた。然し乍ら不意に彼はベンチの上に體を側へ向けて何か深く考へ込む様に眼を落した。そして空の盃を私の前に差し出した。

『そのラム酒を少し戴きませうか。』と彼は云つた。

『しかし茶はもうみんなになりましたよ。』

『なあに茶なんぞ無かつたつて……あ——あ！』

カラタエフは両手に頭を抱へてテーブルの上に肘を突いた。私は何も云はずにちつと彼を見た。恐らく何かセンチメンタルなことでも云ひ出すであらうと、また酔拂ひのよぐやる様に涙でも流すことであらうと思つてはゐたのだが、彼が頭を上げた時、彼の顔に表れた深い悲しみの色にはさすがに驚かされた。

『どうかしましたか？』

『いゝえ別に……たゞちよつと昔のことを想ひ出してゐたんです。なあにちよつとしたことで……お話しませうか。けれども御迷惑になつちや濟みませんからな……』

『なあにそんなことは！』

『いや、何です』と彼は溜息を吐いて話を始める——『随分いろんな事があるもので……まあ私なんぞのもそれですが。御迷惑でなければお話しませう。併しどうでせうかね……』

『ピョトル・ペトロギッチさん、是非伺ひませう。』

『それぢやまあ、全くつまらない……ですが、まあかうなんです』と彼は始めた。『しかし全

くのところ御迷惑に……」

四三二

『やもう、それは構ひませんから。』

『承知しました。ところでこれがまあ所謂私の身の上に降りかゝつたことなんです。私は田舎に住んで居りました……甚だ突然な話ですが、私は一人の娘に迷つたのです。いや、あの娘がどんな娘でありましたか……美しく、惻巧で、そして、まことに氣立が好く可愛らしくて！ 名はマトロナと申しました。しかしお嬢様といふ様なのでなく——つまりその、女中奉公をしてゐた、たゞのサーフなんです。それも私の處に居たのでなく、他家のうちに居ましたので——事が面倒でした。さて、そんな譯で私はその娘を愛して居ました——まことに何でもな様な機會からですが……それで娘の方もまた私を愛しました。さうしてゐるうちマトロナは、どうか自分の體を女主人の手から受け出して呉れと云ひ出したものです。實を云へば私の方にもそんな考へがないでもなかつたですが……ところがその女主人といふのは、金持の却々の業突張でして、私のところから十二哩ばかり離れて住んで居りました。それで所謂或日のことです、私は三頭立の馬車を用意させました——真中には一番上等の亞細亞産の飛切りといふところをかけた——私はまた一張羅を著込んでマトロナの女主人の家へ出向きました。行つて見ると側翼や庭のある大きな家です……マトロナは道の曲角

まで出て私を待つて居ました。私に何か云はうとしましたが、云へなかつたのでたゞ自分の手にキッスをしただけで行つてしまひました。さて私は玄關へ行つて主人が在宅かどうかを尋ねました……すると脊の高い下僕が出て来て、「どなた様でいらつしやいます？」と私に申します。私は「地主のカタエフと申す者、一寸用事があつてお伺ひいたしました」と答へた。下僕があちらへ参りました後、私は一人待ちながら考へました、「はて、どうなることであらう？ 屹度あの慾つ張りの婆奴が無闇な金を絞らうとするに相違ない、あれ文け金を持つてゐる癖に。五百ルーブリ位と吹つかけるだらう。なあに驚くものか」と。ところへ下僕が引歸して来て、「どうぞお通り下さい」と申します。私はその後を跟いて客室へ通りまゐります。客間には小つぼけな黄色つぼい様な年寄の女が、眼を瞬き乍ら腕椅子に掛けてゐます。「どんな御用で？」まあ切出しには、お目に掛りまして誠に嬉しく思ひます、とか何んとか云はなければなるまいと思つて居りますと……「お人違ひでございませう。妾はこの家の主人ぢやありません。親類のものです……どんな御用で？」かう云はれたものですから私も「直接御主人に申し上げ度いことがあります」と云ひました。「マリヤ・イリニシナは、今日お目にかゝれません。少し加減が悪いものですから……どんな御用で？」これでは仕様がなと思ひましたので、私は事情を打明けました。年寄の女は仕舞まで聞いて呉れました。「マト

四三三

ロナ？ マトロナとおつしやるのはどの？」

「クリクの娘のマトロナ・ペトロヴナのことです。」

「フヨドル・クリクの娘……ですけどもどうして彼女とお知合になりました？」

「一寸したことです。」

「それで彼女は貴方の心を知ってるんですか？」

「さうです。」

老女は暫く黙つておりましたが、聴て「まあ、よくもく／＼何といふ酷い奴だらう！」と申します。私は全くのところ驚きました。「どうしてそんなことを？……私は相應のことを致して引取らうと思ふんです——若しこの相談にのつて頂けますならば。」

すると、あの鬼婆め眞向から私をけなしつけました。「まあ呆れたことをお考へになりませう——私がお金を貰ひ度いとも云つた様に……彼奴眞實に思ひ知らしてやります、酷い目にあはしてやります！……目の醒める程ぶつ叩いてやらなくちや！」老女は息塞るほどのきり立つてゐます。「此處にゐて何が不足だらう？……ほんとにあんな畜生つたらない！これ位のことを云つたつて神様もお咎めにはならないだらう！」私は全くのところ、かつとなりました。「何だつて貴女はあんな小さな娘をいぢめやうとなさるんです。あれにどんな咎があ

るんです？」老女は十字を切つて、「あゝ、神様が妾をお恵み下さる様に——貴方は妾の思ひ通りにあの娘を……」ですが彼女は貴女のものぢやないでせう。「いかにも、マリヤ・イリニシナが萬事を心得て居ります。そして貴方がたの係り合つたことぢやありません。ですが、あのちびが一體誰に使はれてゐる身分だか思ひ知らしてやるんです」正直に云ふと私は最少しのことでの死損ひの糞婆に飛び蒐つて行くところでした。けれどもマトロナのことを思ふと上げた手が自づと下りました。私はその時どんなに胸がむかついたか、とても今お話をすることは出来ません。私はその老女に嘆願をいたしました。「それはもう貴女のお言葉通りにするんですが」と私は云ひました。「しかし、彼女は貴方にどんなお役に立つんです？」
「奥さん、私は彼女が好きなんです。まあ一つ私の身にもなつて見て下さい……どうか貴女のお手にキスをさして下さい。」で私は眞實にあの鬼婆の手にキスをしたのです。「それぢや」と鬼婆はもぐ／＼と含み聲で云ひました。「マリヤ・イリニシナへ話して置ませう——あの人がとり極めるんですから。二日程してからまた来て下さい。」私は大いなる不安を抱いて歸つて來ました。私は打壊しをしたのではなからうか、私の心をあの婆に打明けたのは悪かつたではないかと氣になり出しました。けれどもさう思つたのはもう遅過ぎました。二日経つて私は女主人の所へ會ひに行きました。私は女主人の居間へ通されました。花やら、立

派な家具やらが澤山あります。主人は素晴らしい安樂椅子に倚りかゝつて、後のクッションに頭をもたせてゐます。そして、あの親類の婆もゐますし、それから緑の寛衣を著た眉毛の白い、口のすつかり瘻癩つた様な一人の若い女が居ました——多分お相手の女とでも云ふのでありませう。老婦人は鼻にかゝつた聲で、「どうぞお掛け下さい。」と申します。私は腰を掛けました。主婦は私が幾歳になるかとか、何處に勤めてゐたかとか、どうしようと思つてゐるかとか、懇懇に又嚴かに聴き出しました、私は一々それに答へました。主婦は手巾をテーブルから取つて、バタ／＼振つて煽ぎ乍ら……「カタリナ・カルボヅナから貴方のお考へはききました」と申します。「お考へはすつかり聞きましたが、雇人に暇をやらないといふのが私の方の家法になつてゐますので」と申します。「さういふことはし、やんとした家には有るまじき不都合なことなのです。で妾は最うち、やんと云ひ渡して置きました。この上貴方にもお手敷をかけないで済むでせう」と申します。

「いや一向に手数でも何でもありませんが……然し、マトロナ・ペトロヅナはそんなに御入用な女でせうか？」

「いえ、格別入用といふのでもありません。」

「それなら何故私に下さる譯に行かないでせうか？」

「どうも氣が進まないものですからね。妾の氣が進まないんです——唯それ丈けなんです。それにもう妾から云ひ附けて置きましたから、大野の方の村方へやられて居る筈です」

私は全く仰天しました。老婦人は緑の寛衣を著た若い婦人に佛蘭西語で二言三言申しますと、若い婦人は出て行きました。

「妾は可成り嚴格な主義の女で、それにまた體も弱いものですから、煩さいことは我慢が出来ません」と老主婦は云ふんです。「貴方はまだ／＼お若くていらつしやるし、妾はこんなお婆さんですから、御忠告をする資格があるといつた様なものです。どうでせう、好いお嫁さんでも貰つて身をお固めになりましたは。持參金の澤山あるやうなのは餘りないかも知れません、貧乏でも品性の立派なので宜しければ随分にありますよ」

私は只老主婦の顔を睨と見詰めた限り、向うは何を喋つてゐるのかちつとも解りません。纔かに結婚の話をしてゐるんだとは思ひましたけれど、大野の方の村方といふ言葉が絶えず耳に鳴り響いてゐました。「お嫁を貰へ……何を云ひやがるんだ……」

こゝまで話して来て彼は不意に言葉を切つて私の顔を見た。

「貴方は御結婚は未だでせうね？」

「ええ」

「さうでせう、さうだと思ひました。私はその言葉に我慢がしてゐられませんでした。それで」ところで奥さん貴女は一體何を云つていらつしやるんです？ 結婚がどうしたと云ふんです？ 私は只お宅のサーフのマトロナを戴けるかいたゞけないかを伺へばいゝんです！」と申しました。老婦人は吐息をついたり、うん／＼と唸つたりしました。「あゝうるさい！ もう歸つて貰つてお呉れ！ あゝ／＼！」例の親類の女といふのが飛んで来て、私をやりこめる、そして主婦はうん／＼と唸りつゞけます。「何だつて妾はこんな目に逢ふんだらう？……妾はこの家の主人ぢやないかね？ あゝ／＼ あゝ／＼！」私は帽子を引つかんで狂人の様にその家から駆け出しました。

貴方は屹度こんな賤しい身分の娘なんぞに、さうまで夢中になるなんて馬鹿な奴だとお考へでせうな。私とても自身を正しいとばかりは思つて居りません……けれどもさうなつたものですから……嘘の様な話ですが私は晝も夜も休みなく……私は苦しみ通しました！ その上「私はあの娘の身をあやまらした！」と思ひましたので。時には彼女が仕事著を著て家鴨を飼つてるところや、女主人の云ひ附けで酷い目に逢はされてゐるところや、タールを塗つた長靴を穿いた見廻りの百姓なんぞが、いやらしいことを云つてゐる所などを想像しました。私は全く全身に冷たい汗を流しました。さて私はどうにも我慢が出来ないので、彼女が

送られて行つた村といふのを穿鑿して馬に乗つて出かけて参りました。私はやつと翌日の晩にそこに着きました。まさか私の方でかうまでに出やうとは思ひ設けなかつたものでせう。別に私の事を何とも注意してゐなかつたのです。私は近所のものでゝもあるやうな風をして差配役の家へ真直ぐに行きました。中庭へ入つて四邊を見廻すと、丁度上り段の所にマトロナが腰を掛けて頬杖をついて居ります。あいつは危く聲を立てるところでしたが、私は指をあげて外の方の廣々とした空地を指し示してやりました。私は小屋へ入つて差配役と少し許り無駄口を利き、嘘八百を並べ立て、好い折を見計つてマトロナの所へ出て行きました。娘は、あの可愛さうな奴は、私の頸にもたれかかりました、色も蒼ざめて、大層瘦せて、あの可愛さうな奴が！ 私は「よし／＼マトロナ、大丈夫だよ。泣くことはない」と云ひ續けたのですが、その癖自分は止め度もなくぼろ／＼と涙を流したものです……でしまひには流石に極り悪くなつて、娘に云ひました。「マトロナ、かういふ場合泣いてばかりゐたつて仕方がない。よく人の云ふ奴だが、決然たる行動をとらなくちや駄目だ。ねえお前俺と一緒に逃げるんだよ。外に仕様がなないんだ」マトロナは始んど氣を取り失はうとした……「どうして貴郎！ それぢや身の破滅です。それこそ妾は殺されてしまひます」

「馬鹿な！ 誰がお前を見附けるものか？」見附かります。屹度見附かつてしまひます。ね

え、ピョトル・ペトロギッチさん——貴郎の御親切は決して忘れやしませんわ。けども今となつちや妾のことを諦めて下さい。かうなるのも妾の廻り合はせなんでせうから」あゝ、マトロナ——！ 俺はお前を最少し確かりした奴だと思つてゐたのに！「いや全くのところは中々しつかりした奴でした……あいつは心を金のやうな立派な心を有つてゐました！」「どうしてお前をこゝに残して置けるか？ どつちしたつて同じことだ。これより悪くなる氣づかひはない。さあ、お言ひ——こゝの差配役に拳骨を食はされたんだらうね、え？」マトロナはさつと顔を赤くして唇を震はした。「だけど妾の爲めに家内中皆が路頭に迷ふ様なことになりますもの」「お前の家内中といつて——兵隊にとられるといふのかい？」「えゝ。兄さんは兵隊にとられます」「そしてお父つあんは？」「お父つあんはとられやしませんわ。たつた一人限りの仕立屋なんですから」「それ御覧よ。兄さんだつてまさか殺されるんぢやなしよ。」私が娘を納得させるのにどんなに骨を折つたと思ひます。何しろ私が背負はなければならぬ責任のことまで持出して來るんですからね。「だがそんな事はお前が心配しなくつたつていゝんだ」と私は申しました……然し私は到頭この女を連れ出しました……その時ではなく別の時ですが。或晩馬車を持つて來て連れ出して行つたのです。

『連れ出して行つたんですか？』

「えゝ……そして私の家に置いたのです。私の家は小さな家で使つてゐた者も大勢はゐませんでした。それに遠慮なく申上げれば皆私を尊敬してゐますから、どんな事があつても私に裏切りする様なことはないと思います。ですから私は王様のやうな幸福な日を送ることになりました。マトロナも落著いて元氣づいて参ります。私はすつかり彼女おんこのことに夢中になつて参りました……そしてまあ何といふいゝ娘でしたらう！ まつたく天性とでも云ふのでせうな！ 歌もうたへる、踊もできる、そしてギターも弾ける！……私は近所の人にも見せない様にしてゐました。餘計なお喋りをされても困りますからな！ しかしたつた一人極々の親友でパンテレエ・ゴルノスタエフといふのがありました——御存知ありませんか？ あの男はあの娘のことゝなると氣狂ひの様になりましたね、まるで貴夫人か何ぞの様に手にキスをする、いや全くするんです。そして實のところゴルノスタエフは、私なんぞと違つて教育のある男で、ブーシキンなんぞもすつかり讀んでゐました。時々マトロナや私共が耳を澄まして聞くやうな話もして聞かせました。それからあの娘に書くことも教へてくれました。ま、かういつた妙な男でしたな！ それから私がどんなものを著せたかといふと、縣知事の奥様なんぞも及ばない位で、毛皮で縁どつた眞紅の天鵝絨で上衣を拵へてやつたものです……いやそのまた上衣がよく似合つたことゝいつたら！ モスクワの女の裁縫師が胸の所を締めて新

式に仕立たものですからね。そしてあのマトロナが不思議な女といつたら！時とすると、ちつと考へ込んで地上を見詰めた儘筋肉一つ動かさずに幾時間もく坐り込んでゐるんです。私も坐り込んであいつの顔を見ます。けれども、どうも初めて會つた様な鹽梅で、何だかかう本當に見ることが出来ません……すると、あいつは、につこりします。と私の胸は、誰かにくすぐられてもしたかの様に飛び上つて參ります。さうかと思ふとあいつは不意に笑つたり、巫山戯たり、踊つたりします。眼が廻る程熱く激しく私を抱き締めることもありませす。朝から晩まで私はどうしたらあれを喜ばすことが出来るかと、そんなことばつかり考へてゐました。貴方はこんな話を本當になさいますか？私は只彼女がどんなに悦ぶかとそれを見たいばかりに、いろんなものをやりました！あの喜んでほつと紅くした顔は！何時でも私が物をやるとそれを身に著けて見ます。新しいものを身に著けていそくとやつて来て、私にキスをするんです！そのうち親爺のクリックがどうしてか噂を聞き込んで、會ひに來ました。そしてどんなに泣いたでせう……こんな具合で私等は五ヶ月ばかり暮らしてゐましたが、あの忌ま／＼しい事さへ起らなかつたら、何時までもくあいつと一緒にゐられたでせうに！」

ピョートル・ペトロフチは話を止めた。

『どんな事が起つたんです？』と私は同情しながら彼に尋ねた。

彼はその手を振つた。

『何も彼もいけなくなつたんです。私はあの娘をも身をあやまらせました。あのマトロナは橋を乗り廻すのが非常に好きで、よく自分で手綱をとつて乗り廻したものです。何時も上衣を羽織つて、縫ひをしたトルゾク出來の手袋を穿めて、嬉しさうにきやつ／＼といひながら乗りまはすのが常でした。で私共は何時も夕方になつてから乗りに出かけたものです——まあ誰にも會はない様にといふ心算で。ところが或日大變に好い天氣で、一面に霜の降りた晴れやかな、ちつとも風のない日でした……私共は乗り出しました。マトロナは手綱をもつてゐました。私は行手を見るとどうです、あの女の主人の村のククエフカへ向つてるぢやありませんか。さうですククエフカの方に向つてゐるんです。私は「おい／＼お前は何處へ行くんだ？」と申しました。女は肩越に私を振返つて笑つてゐます。「面白いですもの」と申します。「いや構ふものか……」と私も思ひました。あの女主人の前を駈け抜けるのも一寸面白いだらうと——ねえ貴方さうぢやありませんか？かういふ譯で私共は駆けさせました。軸馬は空に浮いてる様に、側馬も宛ら旋風の様な勢で、もう私共はククエフカの見える處まで來てゐました。すると突然古い緑色の馬車が一臺目に入ります。後ろの踏臺のところに馬丁

が乗つて、のろくとやつてゐるのは……女主人です——あの女主人が此方へやつて来るんです！ 私は身體が疎んでしまつた。けどもマトロナは——手綱でもつて馬を鞭ちながら馬車の方へまつしぐらに飛ばせたのは！ 先方の馭者は此方がぶつかりさうにして来るのを見て取り、一方へ避けようとしたのですがね。餘り急に曲げ過ぎたので雪の中にその馬車を引つ繰り覆したものです。窓は壊れる、女主人は悲鳴を上げる。附添の女も、「助けて！ 助けて！」と泣聲を出す。その間に私共は全速力を出して飛ぶ様に駈け抜ける。しかし、かうして駈け出しながらも私は思つた、「こりや屹度厄介なことになる。ククエフカへ乗り込ましたのは全く悪かつた」と。それからどうなつたと思ひます？ 云ふまでもなく女主人はマトロナを認めたのです、そして私をも——あの鬼婆が私を訴へたものです。「うちを逃げ出した女中がカラタエフ氏の處にゐます」とかう云つて、幾許かのお金を握らしたのです。さあ事です！ 巡査部長がやつて参ります。これは私の知つてゐるステパン・セルギエフ・クゾフキンといつて誠に人のいゝ男でした。が、兎に角貧乏籤を引いたものです。さてその男はやつて来て、あれやこれやと話した後、「ピョトル・ペトロギッチさん、貴方はどうしてそんなことをしたんです？……この責任は却々軽い。そして、これに對しては法律上にちやんとした明文があるんだから」と申します。私は「あゝそれに就いちや勿論話があるんだがま

あ。駈けつけて来た後だから君も何か一口やつては」と申します。彼はそれには首肯しながら、「法律といふ奴は曲げられないんですからね、ピョトル・ペトロギッチさん。よく考へて見て下さい」といふんです。

「——勿論さうだ……しかし、それはそれとして君は小さい黒馬を持つてるといふ話ぢやないか。僕のランバルドスと取り換へるのは嫌かい？……ところで家にはマトロナ・ペトロヴナなんて娘は居ないよ。」

「戲談を云つちやいけない、ピョトル・ペトロギッチさん。娘は貴方と一緒に居るんだ。こは瑞西とは違ひますからね……そりや私の馬をランバルドスに取り換へるのもいゝけれど。何なら今貰つて行つてもいゝんですがね。」

兎もあれ私はその時丈けは巡査部長を歸らせました。然し例の老主婦は愈々躍氣になつてこの事件には一萬ルーブリ掛つても惜まないといふ様な意氣込なんです。實はその私に會つた時不圖あの緑の著物を著てゐた若いお相手の婦人を私に妻さうと思ひ附いたんですな、それは後になつて解つたことですが、それからあんなに意地悪くしたんです。いや、かういふ豪い婆さん達はどんなことでも思ひ附くんですからな！……そしてそれが退屈紛れのことですからね。で事々に私は不利に向つて行きました。が、金も惜まずマトロナをかくまつて

置きました。けれども形勢は愈々宜しくない。私はあゝもやつて見たり、かうもやつて見たり、とうとう負債の山を拵へて、體をも悪くしました……そして或晩寢床の中に横になりながら考へてゐました、「あゝ、どうしてこんなにまで苦しまねばならないのか？ この先どうしたらいゝものであらう——あいつのことは忘れる譯に行かないし？ ……やこればかりはどうにもならん！」と。そこへマトロナが入つて來ました。その頃私はあの女をうちから一哩半許り離れた或百姓家に隠して置いたのです。それが出し抜けにやつて來たのですから驚きました。

「どうした？ 彼處でも見附かつたのかえ？」

「いゝえ、貴郎。ゴブノヴァンは一向邪魔をするものなどありやしません。けど何時までさうして居られるんでせう？ ビヨトル・ペトロギッチさん、私の胸ははり裂ける様です。ねえ貴郎私は貴郎がお氣の毒でなりません。ビヨトル・ペトロギッチさん、私は決して貴郎の御親切を忘れはしません。けども、もう今日といふ今日は愈々のお別れに參りました。」

「何をいふんだ？ 何を馬鹿なことを！ ……お別れつてどうして別れるんだ？」

「はい……私は自分の身を捨てしまふつもりです。」

「しかし、俺はお前を屋根部屋へ鏡前を掛けてゝもお前を止めて置くんだ！ ……お前はこ

の俺がどうなつてもいゝといふのか？ 俺を殺さうと云ふのか？」

娘は黙つてゐました。床の上をぢつと見てゐます。

「おい、何とか云はんか！」

「ビヨトル・ペトロギッチさん、私はこの上貴郎に御心配をかけるに忍びません」

もう何といつて聞かしても仕様がな……

「だがこれ程云つて聞かすのに馬鹿な、どうしてお前は……」

こゝまで話して來てビヨトル・ペトロギッチは激しく啜り泣きをした。

『それからどうでせう！』と彼は拳でもつてテーブルを叩きながら、眉を擧めるやうにしながら話をすゝめる。それでも矢張り涙は紅くなつた頬を流れ落ちてゐる。『娘は自分を捨てました……自分から出かけて行つて自分の體を渡して了ひました……』

『馬の用意が出來ました。』と監督の男は勇み立つてその部屋へ入り乍ら叫んだ。

我々は二人とも立上つた。

『マトロナはどうなつたのです？』と私は尋ねた。

カラタエフはその手を振つた。

カラタエフに逢つてから一年許りして、私はモスクワへ行くことになつた。或日食事の前に、何かの都合で私はオートニイ通の或るカフェーへ行つた——モスクワ一流の妙なカフェーである。球突場には煙草の煙の渦を巻いてゐる中に、眞赤になつた顔や、頬髯や、舊式の半刈や、上衣や、新式のスラヴ服などがちらつて居るのを見た。

地味な外套を著た瘦せた小柄な老人達が、露西亞の新聞を讀んでゐた。給仕人等は緑の絨毯を柔かく踏み乍ら盆をもつて活潑に駈廻つてゐる。商人共は抜目のなさうな顔をして茶を飲んでゐる。ところへ突然一人の男が球突部屋から出て來た。頭の髪も随分亂して、足許も可成り覺束ない。彼は両手をポケットに突込んで首を傾げて的もなくそこらを見廻した。

『これは——ビヨトル・ペトロフさん！……暫らくですな！』

ビヨトル・ペトロフは殆んど私の頸に倒れかゝつた。そして稍々ふらくとやり乍ら、小さな別室へ私を引張つて行つた。

『まあ此方へ』と彼は丁寧に私を安樂椅子に掛けさせ乍ら云つた。『此方の方が少しゆつくりしてゐます。給仕！ビールだよ！いやシャンペンがいゝ！全く思ひ掛けのないことでした。……貴方は久しく此方に？まだずつとおいでになるんですか？何にしてもかうしてお目にかゝるのは所謂神様のお引合といふやつですな。』

『さうです。矢張り忘れないで……』

『忘れませんとも、忘れるものですか！』と彼は忙がはしく私を遮つた。『あれも昔の話になりました……』

『して此方では何をやつてますか、貴方は？』

『まあ御覽の通りの生活で。こゝが一等ですよ。こゝでは皆な愉快な連中許りです。私はここに平和を見附けた譯です。』

かういつて彼は太息を吐き、天井の方へ眼を上げた。

『役所へお這入りになりましたか？』

『いゝえ、まだ這入りません。が入ることになるだらうとは思つてゐます。しかし役所なんぞ仕様がありませんね……人民の方が大切ですよ。私もこゝでどんな人達と知合になりましたか！……』

一人の少年が黒い盆にシャンペンの壘をのせて持つて來た。

『よし／＼。こりや中々好い子ですよ……なあワシヤ、お前本當に好い子ぢやないか？』

お前の健康を祝さう！』

少年は一寸立つて頭を振つて、行儀よく微笑して出て行つた。

『さうです、こゝには随分面白い人間がゐますよ』とピョートル・ペトロギッチは話し續けた。
『魂のある感情のある人間が……何なら一つ御紹介しませうか？——そりや愉快的な奴等です
よ……奴等も皆な貴方とお知合になるのを喜ぶでせう。時に……ポプロフは亡くなりました、
可哀さうなことです。』

『ポプロフつてどの？』

『セルゲエ・ポプロフです。立派な男でした。田舎から出て来たこの何も解らない私を、いろ
いろと世話して呉れました。それからパンテレエ・ゴルノスタエフも亡くなりました。いや
どいつもこいつも皆な死んでしまつて！』

『貴方はずつとモスクワの方にいらつしやいましたか？ 國の方へはいらつしやいませんで
したか？』

『國の方へ！……國の地所は賣つちまひました。』

『賣つておしまひになつたとは？』

『競賣で……何しろそれより外に賣り方がなかつたんですからな。』

『ではピョートル・ペトロギッチさん、貴方はどうして暮らしてゐらつしやる？』

『萬更ら干ばしにもなりはしませんよ。文なしになると神様がどうにかして下さいます。そ

れに友達もあります。金なんぞ貴方……塵か灰かの様な！ 黄金は塵ですよ！』

彼は眼を閉ぢて、ポケットを探つて二三枚の銀貨を掴み出し、それを掌にのせて私の前へ
差出した。

『是が何です？ 塵ぢやありませんか、灰ぢやありませんか。』(其銀貨は床の上に轉がつた。)

『ところで貴方はボレザエフをお読みになりましたか？』

『え、讀みました。』

『モッチャロフのハムレットを御覽になりましたか？』

『いや、覽たことはありません。』

『御覽にならない、あれを御覽にならない！……』(カラタエフの顔は眞蒼になり、彼の眼は
不安さうにうる／＼としてゐた。彼は側へ向いたが、その脣の上には微かな痙攣が見える。)

『あゝ、モッチャロフ／＼！「死ぞ——眠りなる」と彼は濁つた聲で言つた——』

『その上はなし。眠りによりて心の痛みを、』

肉の受け續ぐさまさまの悩みを去らむ。

願はしき終りなるかな。死ぞ——眠りなる！』

『眠りなる——眠りなる。』と彼は幾度か口の中で繰返した。

『その様子をひとつ聞きたいものですな。』と私は云ひ出した。しかし彼は熱烈に續けて行つた——

四五二

『誰か浮世の嘲罵鞭撻、王者の壓制、驕者の侮辱、官吏の傲慢、さては温順なれば優者も劣者より受くる排斥などを忍びくへてあるべきか。

只一本の留針にて

永劫の寂滅を得るならば

なうく姫神、

我が罪業の消滅をも祈り添へて給はれよ。

それから彼はテーブルの上に頭を垂れた。彼は吃りく譯の解らないことを云ひ出した。

『一月経つや経たずに！』と彼は新しい熱情を以て述べた——

『お、一月経つや経たずに、

ニオベの姿もかくやとばかり、

涙流して父君が柩に侍したりし、

其時の履の土も乾かぬ間に、

あはれ母君には、かの母君には——

お、非理非情の獸類だも、

さばかり早く夫は忘れじを。』

彼はシャンペンの盃を唇まで持つて行つたが、その酒を飲まないで續けた——

『ヘクバ故に！

かくも泣き立つるとは。

そもくヘクバが彼に何、

彼がヘクバに何の縁故？……

さるに我は痴愚魯鈍、

人若し我を懦夫と呼び、

我を詐欺師と罵るとも、

我は只だ黙してこれに従ふばかり、

我は鳥類の鳩と同様、

いかなる壓制侮辱をも、

辛らし口惜しと憤るべき
性根と云ふものなきならむ。』

カラタエフは盃を下へ置いて頭を押へた。私は彼の心持が解つたやうに思つた。

『いや、いや』と彼は遂に言つた。『過去の埋火をかき熾したつて仕様がな。ねえ、さうでせう？』(彼は笑つた。『貴方の健康を祝して！』)

『貴方はずつとモスクワにいらつしやるお積りですか？』

『モスクワの土になるつもりです！』

『カラタエフ！』と誰かの聲が次ぎの間から呼ばはつた。『カラタエフ、何處にゐるんだい？』

おい、來ないか！』

『呼んでるな』と重々しげに椅子から立ち上りながら彼は言つた。『左様なら！もし何でしたら私のところへいらしつて下さい。私のゐますところは……』

併しあくる日は、思ひ掛けなき事情から、私はモスクワを去らなければならなくなつた。そしてそれつきりビョトル・ペトロピッチ・カラタエフに會はないでしまつた。

十九

密會

ニ多クを著し片恋し中におり
春陽を空に射す

秋は九月の半ば頃、私は樺林の中に坐つてゐた。早朝から細やかな雨が降つて、その合間合間には折々暖かな影が射してゐた。まことにはつきりしない天気であつた。空は軟かな白い雲に掩はれたかと思へば、忽ちにまた雲切れがする。それから雲の逃げた跡には美しい眼の様な朗かな優しい碧空が見られる。私は四邊を見廻し乍ら耳を澄し乍ら坐つてゐた。木の葉が頭の上で微かにそよいだ。その音を聞いた許りでも何んな季節であるかゞ知れる。それは春の面白さうに笑ひさゞめく震へ聲でもなく、夏の聲を潛めた囁きや、だらけた無駄話でもなく、晩秋の薄寒さうなおどくした吃り聲でもなく、寧ろやつと聴きとれるか聴きとれぬ程の夢現の様な囁り聲である。軽い微風が梢を鳴らして吹き過ぎる。雨に濡れた森の奥は日が照つたり、雲の後ろに隠れたりするにつれて始終變つてゐた。或時は凡てのものが一時に微笑でもしたかの様に煌々と輝いた。疎らに立つた樺の木細い幹は忽ち白い絹の様な軟かな光澤を帯び、地面に落散つてゐた葉は急にまだらになり、紫がかつた金色に光つた。そして捲髪を有つた脊の高い羊齒の床しげな莖は、最早熟れ過ぎた葡萄のやうな秋の色に蔽は

れて、果^はしもなく纏れからんで目の前に透^すいて見えた。かと思ふと、また四邊のもの凡てが微かに青味を帯びて来る。きら／＼とした色は忽ちに消え失せる。樺の木もすつかり白つぼく光澤^{つや}が失せて、新しく降り積つた雪を冬の冷い日光が撫^{いた}で勞^{いた}はる前の様に白い。聴^きて音のせぬ様にこつそりと森の中へ細やかな雨が囁く様にしよぼ／＼と降り始める。樺の木は目に立つて色褪^しせ乍ら、まだ／＼緑の色を残してゐた。たゞそこゝにすつかり赤くなつた、或は金色になつた若葉がある。そして日光がふと雨に現はれたばかりの小枝の編細工を、ちらちらと洩れて来る時、その若葉が何んなに眩^{くら}ゆく燃え立つて見えたらう。只一羽の鳥も聞かれない。皆何處へか隠れて静まりかへつてゐたが、只折々人を調弄^{から}ふ様な四十雀^{から}の聲だけが金屬的な鈴を鳴らす様な音を立てる。この樺の林へ来る前に、私は犬をつれて高い白楊^{やま}の木を森を通り抜けた。實を云ふと私はあの木が餘り好きでない。薄いライラク色の幹をした頭を出来る丈け高く振上げ、扇を擴げた様に震へる鼠がかつた緑色の金屬性の様な葉をした白楊が餘り好きでない。私は長い莖に不器用にくつ附けた様な、圓いだらしのなげな葉を、のべつに振立てる所はなほ更面白くない。それが良く見える時と云つては、低い下生^{したばえ}の上一本高く聳えて落日の赤い光を眞正面^{まとも}にうけて、根元から梢迄黄の一色に染まり乍ら、きらきらと輝き震へてゐる夏の夕方かなんぞである。でなければ、風のある晴れた日に碧空を背景

にして、ざわ／＼と揉みたてられ、葉の一つ／＼がどつか遠い處へ飛んで行き度くて堪らないといふ様に見える時である。然し大體に於て私はこの木を好かない。そこで白楊^{やま}の森に足を停めないで、私は樺の木の森へやつて来て、或る木の下に居所を定めた。その枝は地面に近く垂れ下つて、自然に雨避け^{あまよ}となつて呉れるのである。そして暫く四邊の光景を嘆賞してゐるうち、私は彼の遊獵家共にのみ知られる心地よい穩やかな眠りに落ちた。

私はどの位眠つてゐたか判らない。が、眼を開いて見た時、森の奥の奥迄日光が充ち互り、どちらにも楽しげにざわつく木の葉を横切つて、濃い碧空の閃きが見える。雲は吹く風に拂はれて消え去り、天氣は全く好い天氣になつてゐる。空中には一種特別の乾燥した爽やかさがあり、胸の中の擴がる様な感じを與へる。そして大抵何時でも雨上りの靜かな、晴れやかな夕方^やの前觸れをするものである。私は今一度運試しをすべく立上らうとしてゐた。その時ふと私の眼がぢつと坐つてゐる人間の上に落ちた。よく見ると年若な百姓娘である。彼女は二十歩許り向うに物思はしげに頭を垂れ、兩手を膝に置いて坐つてゐる。半ば開いた片手には草花の大な束^{たば}をもつてゐるが、その束は息吐^いく度に碁盤縞^いの袴^{ハカマ}の上に軽く揺れてゐる。喉^{のど}と手首とにボタンをかけたその綺麗な白いシャツは、短い軟かな髪をとつて體に纏はつてゐる。大きな黄色な南京丸が二條、頸から胸へ垂れてゐる。彼女は却々^う美^みしかった。可愛ら

しい灰色がかつた濃いブロードの髪の毛は、丁寧に櫛を入れて、二つの半圓に分けられてゐる。それを引縛つた狭い眞紅のリボンは、象牙の様に白い額のところへまで下ろされてゐる。顔の他の部分はほんのりと日に焼かれて、肌目の好いものにのみ見られる様な金色になつてゐる。私は彼女の眼を見ることが出来なかつた——伏目になつてゐたから。けれども私は彼女の秀でた華やかな眉を、長い睫を見た。睫は濡れてゐた。そしてその片頬にも稍蒼冷めた唇へかけて、後から後から乾いて行く涙の條が陽をうけて光つてゐる。彼女の小さな頸は全くチャーミングであつた。稍々大きすぎ、圓すぎる鼻さへも格別苦にならない。私は別して彼女の顔の表情が氣に入つた。それはまことに單純で、優和で、まことに悲しげで、しかもその悲しさは何故とも知れない様なあどけなさに充ちてゐる。

彼女は明かに誰かを待合せてゐるのである。何者かゞ森の中にかさこそと音を立てた。彼女は直ぐに頭を持上げて、四邊を見廻した。木蔭を透して私は牝鹿の眼の様な大きな涼しい、おどくした彼女の眼がちらりと動くのを見た。しばらくの間、彼女はその微かな物音の聞えて來た場所へと、大きく見開いた眼を据ゑた儘耳を澄ましてゐた。彼女は太息を吐いて靜かに向き直つて、前よりも一層低くうつむいて花を揃へ始めた。彼女の臉は赤くなり、彼女の唇は微かに震へた。そして新しい涙がその濃い睫の下から流れ出て、きら／＼と頬の上を

流れた。かうして可成り長い時が移つて行つた。娘は折々絶望した様に手を振り動かす許りで、身動きもせずぢつと聴耳を立てゝゐる……と、又もや森の中にかさこそと音がする。娘はびくりとした。その音は止まないで漸々はつきりして來て、だん／＼近くなつて來る。遂に思ひ切つた急ぎ足となつて聞えた。彼女は起き直つた。そしておど／＼してゐる様に見えた。彼女の一心になつてゐる眼は、そわ／＼として居り、期待の火に燃えて居つた。繁みを通して間もなく一人の男の姿が現れた。彼女はそれを見て、さつと顔を赧め、嬉しげに微笑して立上らうとしたが、急にまた萎れて蒼冷めてどぎまぎして、只そのおど／＼した憐れみを乞ふ様な眼を近附いて來る男へ上げた。その時男は彼女の傍に立停つてゐた。

私は私の隠れ場から好奇心を以て彼を見てゐた。正直に云ふと彼は私に心持の好い印象を與へなかつた。彼は打見た所で判斷すれば、年若な金持の家に使はれてゐる生意氣な侍僕か何ぞの様である。彼の打装は體裁と洒落臭い無頓著とを氣取つてゐることを示した。彼は赤銅色の短い上衣を上までボタンをかけて著てゐたが、これは正しく御主人のお古を戴いたものに違ひない。端々をライラク色に染めた淡紅色の襟飾を巻き、金のリボンを巻いた黒い天鵞絨の帽子を眉毛の上まで引冠つてゐる。ワイシャツの圓いカラーは容赦なく耳をつゝかひ、頬をこすり、糊でかためたカフスは曲つた赤い指先迄隠す位で、忘れな草の形をした土耳

其石入の金や銀の指輪を幾つか穿めてゐる。彼の赤い生々した厚かましうな顔は、私の觀察した限りに於て、大抵何時でも男には氣にくはぬ代り、生憎、ともすれば女にすかれるやうな種類の顔に屬してゐる。彼はそのお粗末な面へ鼻の先であしらふ様な、さもつまらないといったやうな表情を與へようとしてゐたらしい。彼は何時でも可成り小さいその薄鼠色の眼を細くしたり、眉を擧めたり、口の端を引き下げたり、欠伸を装うたり、餘り自然らしくもない氣の無さうな遣つ放しの風をして、意氣に捲上げた赤茶けたもみあげを撫で上げたり、厚い上唇の上に翳した黄ろい髭を引張つたり——全くのところ、彼は見てゐられないやうな氣取り方をした。彼は彼を待ち受けてゐたあの若い百姓娘を見るとから、彼の茶番を遣り出した。彼はのそり／＼と大跨に娘の傍へ寄つて來て、一寸肩を揺振り乍ら立停り、兩手を上衣の隠へ突つ込んだ。さうしてぞんざいな、氣の無さうな一瞥を娘の方に呉れ乍ら、どたりと腰を卸ろした。

『餘程待つたかい？』と彼は矢張り他を見ながら、足を振り乍ら、欠伸まじりに口を切つた。娘はすぐに答をなし得なかつた。

『え、随分——ギクトル・アレクサンドリッチさん。』と彼女はやつと聞きとれぬ位な聲で云つた。

『ふむ！』(彼はその帽子を脱つて殆ど眉のところまで這ひ下つた濃い硬い捲髪を勿體らしく撫でて、豪さうに四邊を見廻し乍ら、復たそつと帽子を被つて、その大切な頭を隠した。)『危く忘れつちまふところよ、それにこの雨と來たんだからな！』(彼は再び欠伸をした。)『用は山程ある。さう／＼は手が廻らない。その上に始終お小言だ。時に俺は明日に發つんだぜ……』

『明日』と娘は吃驚して男を見乍ら云つた。

『うむ、明日だ……おい、おい、頼むぜ！』と彼は娘が體を震はしてそつと頸を垂れたのを見て、忌ま／＼しさうな調子で附け加へた。『頼むぜアクリナ、泣かれるのは御免だ。俺は何うにも我慢が出來ねえんだからな、』(彼は低い鼻に皺を寄せた。)『泣くなら直ぐに御免蒙るぜ……何だ面白くもねえ——めそ／＼と！』

『あら、泣きやしませんよ！』とアクリナはあわてゝ懸命に涙を呑み込み乍ら叫んだ。『ちや明日どうしてもお發ちなさるの？』と彼女はしばらく黙つてゐた後で附け加へた。『何時また會はれるでせうね、ギクトル・アレクサンドリッチさん？』

『また逢ふんだよ、逢ふんだとも。來年でなけりや——その先にでもよ。家の且つくべテルブルグで役にでもつきてえ様子だ』と彼は鼻にかゝる氣のなさうな調子で云ひ續けた。『ひ

よつとしたら外國へも行くかも知れん。』

『ギクトル・アレクサンドリッチさん、貴方私の事なんぞ忘れてお了ひになるでせうね。』と
アクリナは悲しさに云つた。

『なあに、そんなことが？ 忘れるものか。だがお前も譯の解らないことを云はないで、詰らない考へなんぞ出さないで——親父の云ふことも聞くがいゝぜ……俺は大丈夫だ、忘れつこはねえ——何の忘れるもんか。』(彼は平氣さうに伸をして再び欠伸をした。)

『本當にギクトル・アレクサンドリッチさん、忘れないで下さいよ』と彼女は哀願する様な聲で云つた。『私程貴方を思ふものは無いと思ひますわ。貴方の爲めなら何でも仕たんですもの……お父^{とち}つあん^{とち}の云ふ事を聞けつて仰有るけども、ねえ貴方……どうしてあたしお父さんの云ふことが聞けるでせう？……』

『何うして聽けない？』(彼は両手で後から頭を抱へて仰向けに寝轉び乍ら、胃袋から押出した様な聲でかう云つた。)

『だつて、私ギクトル・アレクサンドリッチさん——貴方にだつてお解りでせう……』

彼女は言葉を切つた。ギクトルは鋼鐵の時計の鍵を弄つてゐた。

『アクリナ、お前馬鹿ぢやあるめえ』と彼は遂に云つた。『譯の解らんことを云ふな。俺はお

前の爲めを思つて云ふんだ——さうだらう？ なるほどお前だつて馬鹿ぢやねえ——全^{まる}つきりの百姓ぢやあるめえ。お前のお袋も元からの百姓ぢやあるめえ。だが、教育はないんだからな——だから、言はれた通りにするものよ。』

『だつてギクトル・アレクサンドリッチさん、何だか氣になるわ！』

『は、は！ 馬鹿を云つてる。何が氣になるもんか！ 何だいそれは？』と彼は娘の傍へすり寄り乍ら付け加へた。『花か？』

『えゝ』とアクリナは力なげに答へた。『私が摘んで來た蓬菊なの』と彼女は少し元氣附き乍ら云つた。『これは牛の子に食べさせると藥になるつて。それからこれは金盞花よ——瘰癧^{るんれき}に利くんですつて。御覽なさいこの綺麗なこと！ こんな可愛い花は初めて見てよ。こちらのは忘れな草、そちらのは董なの……それからこれは貴方に上げようと思つて摘んで來ましたの』と彼女は付け加へた——黄色い蓬菊の下から細い草の葉で結^{むす}へた青い矢車菊の小束を取り出し乍ら。『貴方お好きぢやないの？』

ギクトルは大儀さうに手を出して花束を取つて、氣がなさうに嗅いて見た。そして空を見上げ乍ら指先で捻りまはし始めた。アクリナは彼を見守つてゐた……彼女の悲しさうな眼の中には何物をも捧げようとするやさしい心や、云ふなりにならうとするしほらしい愛が充

ちてゐる。彼女は男を憚つて泣き度いのを泣かなかつた。そして最後の別れを告げ、名残惜しさうに男の顔を見てゐる。男はと見れば王様か何ぞの様に寝反べつて、格別の思召を以て嫌な所を我慢してつかはすと云つた様な様子で娘の拜むが儘に拜まれてゐる。本當のことをいふと私は憤然として彼の赧ら顔を睨らんでゐた。その赧ら顔には人を人とも思はない様な無頓著の假面を被つて、満足させられた虚榮心が隠れてゐる。アクリナはその刹那何とも云へない程可愛らしかつた。其魂の全體がわだかまりなく熱烈に彼の前へ暴露し出されて、憧憬と撫愛との情に充ちてゐた。然るに彼は……彼は矢車菊を草の上へ落して、上衣の横のポケットから眞鍮縁の圓眼鏡を取出して、それを眼に掛け始めた。ところで幾ら眉をしまへたり、頬や鼻を巾著の様に膨らましたりしても、眼鏡は矢張り脱れて手に落ちた。

『なあに、それは？』とアクリナは遂に不思議さうに尋ねた。

『眼鏡さ。』と彼は容體振つて答へた。

『何にするの？』

『よく見えるのよ。』

『見せて頂戴な。』

ギクトルは顔を蹙めたが、それでも眼鏡を貸し與へた。

『壊すなよ——氣を付けて。』

『大丈夫。壊すもんですか。』(娘はそれを眼にあてた。『あら、何にも見えないわ。』と彼女は無邪氣に云つた。)

『眼を閉らないで見えるもんか』と彼は機嫌の悪い先生といふ様な口調で叱つた。(娘は眼鏡をあてがつてゐた方の眼を閉ぢた。)

『そつちぢやねえ、馬鹿！ こつちの眼よ！』とギクトルは叫んだ。そして彼は娘の間違を直させもせず眼鏡を取上げて了つた。

アクリナは一寸顔を赤くして、微かに笑つて側へ向つた。

『矢張り私達の持つものぢやないのねえ。』と彼女は云つた。

『まあ、そんなものよ！』

可哀相に娘は口を噤んで深い太息を吐いた。

『ねえ、ギクトル・アレクサンドリッチさん、あなたが行つちまつたら、私何うなるんでせうね！』と彼女はだしぬけに云つた。

ギクトルは上衣の裾で眼鏡を拭いてポケットにしまひ込んだ。

『うむ、うむ』と彼は遂に云つた。『初めのうちは辛からうよ、きつと。』(彼はお情けまでに娘

の肩を軽く打つた。彼女は、そつと自分の肩から彼の手をとつて、おづ／＼キスをした。『いや、お前には全く可愛い所があるからなあ』と彼は得意さうに微笑し乍ら云つた。『だがどうにもしようがねえぢやねえか？ まあ、つもつても見ろ！ こちとらはこんな處に何時迄もゐられるもんぢやねえ。おつ／＼け冬になるんだが田舎の冬と来た日にや——ねえ——怖氣をぶつちまふからな。それから思ふと、ペテルブルグは異つたもんだ！ お前なんぞ夢にも見たことのねえ様な不思議なものばつかしよ！ 家だつても街だつても——賑かでひらけてゐることゝいつたら——全くびつくりしつちまふぜ！……』(アクリナは子供の様に心持唇を開いて一心に聞き惚れてゐた。『だが、つまらねえ』と彼は地面に寝返りを打ち乍ら云ひ足有した。『こんな事を云つて聞かしたつて、どうせお前にや分りつこはないんだから！』

『まあ、どうして、ギクトル・アレクサンドリッチさん！ 判るわ。私何でも解りますわ。』

『ほゝゝ、豪いな！』

アクリナは眼を落した。

『あなた以前はそんなこと仰有らなかつたわ、ギクトル・アレクサンドリッチさん。』と彼女は眼を上げないで云つた。

『以前は？ 以前はだつて！……へえ！』彼は憤つたかの様に云つた。

二人は黙つてゐた。

『もう行かなきやならん。』とギクトルは云つた。そして彼はすでに肱をついて起き上つてゐた。

『もう少し居て下さいな。』とアクリナは憫みを乞ふやうな聲で彼に云つた。

『何うして？……暇乞ならもう濟んだ筈だ。』

『もう少し。』とアクリナは繰返した。

ギクトルは復び横になつて口笛を吹き出した。アクリナは彼から眼を離さなかつた。私は彼女の胸が漸々と一杯になつて来るのを見た。彼女の唇が痙攣り、彼女の頬が微かに燃えて來た。

『ギクトル・アレクサンドリッチさん』と彼女は遂に、をろ／＼聲で云ひ出した。『あんまりだわ……あなたもあんまりだわ、ギクトル・アレクサンドリッチさん、本當に……』

『何があんまりだ？』と彼は眉を擧め乍ら尋ねた。そして心持頭をもち上げて女の方へ振り向けた。

『あんまりだわ、ギクトル・アレクサンドリッチさん。これが別れだといふのに、せめて一言位優しい言葉をかけて呉れても宜いぢやないの。何とか一言位云つて呉れても——これか

ら先何のたよりもなく、可哀さうな身の上なんですもの……』

『ぢや、何といやいゝんだ？』

『私がそんなこと。あなたがよく知つていらつしやる筈だわ。今かうして行つてお了ひになるといふのに、何とか一言位……何んな悪いことをして私はこんなにされるんでせう？』

『をかした奴だなあ！ 何うすれば宜いといふんだ？』

『せめて一言位ゐ。』

『何だ、矢張り一つことを云つてゐやがる。』と彼は忌ま／＼しさうに云つて立上つた。

『あら、怒らないで下さいな、ギクトル・アレクサンドリッチさん。』と娘はあわてゝ云つた——無理に涙を呑み込み乍ら。

『怒りやしないが、あんまり解らないことを云ふからな……つまり、どうして呉れといふんだ？ 一緒になれねえつてことは判つてるぢやねえか？ え、さうぢやねえか？ ぢや何うして呉れと云ふんだ、え？』(彼は一つの答を待ちまうけるかの様に、その顔を突出し、指擴げた。)

『何にも別に……何にも』と彼女は吃り乍ら答へた。そして彼女は震へる手を思ひ切つて男の方へ差出した。『でも、お別れにたつた一言。』

彼女の涙は瀧の様に落ちた。

『やれ／＼、また始まつた。』とギクトルは冷かに云つた——帽子を目深に押し下げ乍ら。

『私何うして貰はうといふのでもないけれど』と彼女はすゝり泣き乍ら、両手に顔を掩ひ乍ら續けた。『この先うちに居て何んなに辛いでせう、ねえ、どんなに辛いでせうねえ？ この先何うなるでせう？ 何んな目に會ふんでせう？ 嫌なところへお嫁に遣られて……あゝ、私は……』

『ならべろ、うんと並べろ。』とギクトルはもどかしさうに立ち乍ら口の中で呟いた。

『だから一言云つて呉れたつて、一言位ゐ……云つて呉れたつて宜いわ「アクリナ……俺も……』』

不意にむせかへつて泣き出したので、彼女の言葉は途切れて了つた。彼女は草に顔を埋めて痛ましく泣いた……彼女の體全體がぶる／＼と震へて、彼女の頸が美しく波うつた……彼女の長く押へられてゐた悲しみは、つひに瀧の如く迸り出た。ギクトルは彼女を見下ろして暫く立つてゐたが、肩を竦めてぐるりと後を向けて大股に行つて了つた。

暫く経つた……彼女は少し落著いて頭を上げ、跳ね起きて四邊を見廻して、手を握りしめた。彼女は男の跡を追かけようとした。けれども其足が利かなかつた——彼女はばつたり

膝をついた……私は彼女の傍へ駈けつけないでゐられなかつた。しかし彼女が私を見附けるや否や、人間業でない様な努力をして、彼女は微かな叫聲を上げ乍ら立上り、木の蔭に姿を隠した——地面に散らばつた花を残して置いて。

私は暫く立つてゐたが、矢車菊の束を拾ひ上げて森から野原へ出て行つた。太陽は青白く澄んだ空に低く落ちかゝつてゐた。その光線も青白く冷くなつてゐる様に見える。それは照り輝くのでなく、一縷きの水の様な光となつて充ち亘つてゐる。もう日没に半時とはないのだが、夕焼らしい様子も殆どない。劇しい風が黄色に乾からびた切株を渡つて眞向から吹き附けて来る。それに煽り立てられた小さな乾反葉は、道を横切り、林の端に沿うて飛んでゆく。壁を立てた様に野に向つてゐる林のその側は、すつかりふるひ動かされて、また小さい光に明るくされて、燃え立つ程でない迄もはつきりとしてゐる。赤らんだ木にも、草の葉にも周りの藁にも秋の蜘蛛の數知れぬ糸がチラ／＼と揺らめいてゐる。私は立停つた……私は物悲しい様な心持になつた。萎み行く自然の晴れやかな然し冷い微笑の下に、来るべき冬の物凄しい恐怖が私に迫つて来る様に思はれた。頭の上に高く小心な一羽の鴉がその翼ではげしく鋭く風を切り乍ら飛んだ。鴉は頸をねじ向けてはすかひに私を見て、鼓翼をした。そして急にカアン／＼と鳴き乍ら森の彼方に消え失せた。鳩の巨きな群が麥打場の方から勢よく飛

び立つた。そして圓柱の様に渦を巻き上げながら、忙しげに野面へ飛び散つた。確かに秋である——誰かゞ禿山の向うからその空馬車を音高く響かせ乍らやつて来る……

私は家路に向つた。けれども可哀さうなアクリナの面影が私の心から消え去つたのは餘程後のことである。そして彼女の矢車菊はずつと前に萎んだ儘、今尙私の手に保存されてゐる。

40
215
600

シチグリ地方のハムレット

會て私の試みた遠足の一つに於て、私はアレクサンドル・ミハリッチ・ジーン——といふ獵好きの富裕な地主の家から客に招かれた。彼の所領は當時私のゐた小さな村から四哩ばかり離れてゐた。私はフロックコートを——これ丈は誰でも旅行に出るとき獵をしに出る時にすら持つて出るが好いと私は忠告する——著て、アレクサンドル・ミハリッチの家へ出かけた。食事は六時と極められてゐた。私は五時に著いたが、既に軍服を著た人々や、通例の服を著た、又その他の様々な服を著た人々が、大勢集つてゐた。主人は鄭重に私を迎へたが直ぐに又勝手元の方へ急いで去つた。彼は或る高貴の人を待設けてゐたので、彼位ゐの獨立した社會上の地位と富とを有つた人間に全く不似合な程、それはくしてゐた。アレクサンドル・ミハリッチは未だ結婚をしてゐなかつた。そして女といふものを念頭に置かなかつた。彼の家は獨身者の集りの中心點であつた。彼は素晴らしい暮し方をしてゐる。彼は先祖傳來の邸宅を取り擴げ立派な裝飾をつけ加へ、年々モスクワから取寄せる酒丈けでも一萬五千ルーブリを費し、そして人々からは最高の敬意を拂はれてゐる。アレクサンドル・ミハリッチは幾年か

前にその役を退いた。そして官吏としての何等の名譽を得ようなぞといふ様な野心を持つてゐなかつた。それならば何故何時もの風にも似げなく高貴の方をお客にしたり、又その爲め早朝から立つたり坐つたりする程、氣を揉んだりしてゐるのか？ それは曖昧のうちに葬られてゐる——私の友人の或辯護士が親切な人から賄賂を贈られた場合、それを取るか取らないかと聞かれた時、何時も答へる言葉の様に。

私は主人から別れて部屋々々を通して歩き始めた。殆んど凡てのお客が見知らない人々である。二十人許りの人々が既に歌留多のテーブルを圍んでゐた。これらの歌留多に熱心な人の中に、貴族的なしかし乍ら可成り持ち崩した様な風采の二人の軍人と、高い襟飾をきちんとしめて、染めた口髭の垂れ下つた決然とした性格、並びに嚴格な保守的の威嚴を有つた人々にのみ見出される様な二三の文官とがゐた。

これらの保守的な人々は、勿體ぶつて歌留多を拾ひ、頭を振向けもせず近寄つて來る總ての人々を尻目に見やつた。なほ小さな太鼓腹の、肥えた汗ばんだ小さな手と、据ゑつけた様な足を有つた五六人の地方の小役人もゐた。これらのお役人等は小聲で話をして、愛想よく八方へ微笑を配り乍ら、襯衣シヤツの胸元近く歌留多を持つてゐる。そして切札を投げる時にもテーブルに叩きつける様なことはなく、寧ろ緑のテーブル掛の上へ、しなやかに撒き、勝

札を集めるにも物柔かく、行儀よく、音を立てないように氣を配つた。其他の連中は長椅子に腰をかけてゐるのもあり、戸口にかたまつてゐるのもあり、窓際に立つてゐるのもあつた。見たところ女らしい様子の、しかしもう若くもない一人の紳士は、誰もが氣に留めるのではないのに、一人で極り悪さうにもじくして、胸の時計の印形をいぢり廻してゐた。又外の紳士の連中は燕尾服に碁盤縞のスボン——裁縫組合の頭をしてゐるフィルスクリュウヒンの仕立である——を穿き、油ぎつた禿頭を無遠慮に振り立てながら、如何にも面白さうに話してゐた。近眼の、ブロンドの髪をした、頭の頂邊から足の爪先まで黒い物づくめにした二十歳ばかりの内氣らしい青年は、何か皮肉らしい微笑を漏らしてゐた……しかし私が退屈になり出してゐた時不意に一人の若い男がやつて來た。ヴォイニチンといつて未だ學位をとらない學生で、何だかはつきりした事はいへないが……兎角一つの仕事をもつて、アंकサンドル・ミハリッチの家に住んでゐるのである。彼は射的の名人である、又犬を馴らすことにも長じてゐた。私はモスクワにゐた時分から知つてゐた。彼は試験毎に、『身振狂言を演じた』それらの若い連中の一人であつた。言ひ換へれば教授の質問に一言の答へもしなかつた。かういふ連中は『有髯學生』とも呼ばれてゐた。(勿論これはずつと昔の話である。)一寸その時分のことを話して見るならば、先づヴォイニチンが呼ばれたとする。頭から足の爪先まで熱い汗で

ぐつしよりになりながら、身動きもせずしやんと坐つてゐたヴォイニチンは、徐ろに的もなく四邊を見廻して立上り、學生の制服に大急ぎでボタンをかけて、試験官のテーブルの所までやつて出る。『さあ、紙をお取りなさい』と教授は愉快げに云ふ。ヴォイニチンは手を延べて震へる指先で、重ねた紙を捻つて見る。今日の副試験官は他の學科の教授をしてゐる甚だ怒つぽい老紳士であつたが、今この不運な有髯學生に對し突然の不快を感じて、『そんなに捻るんぢやありません』と怒鳴りつける。ヴォイニチンは彼の運命に諦めをつけて、一枚の紙を取つて其番號を見せて、窓の所へ行つて腰を下ろす。其間に先に出た學生が質問に答へてゐるのである。窓の所へ來てヴォイニチンは只折々筋肉一つ動かさず前同様のろくくと見廻す丈けで、ずつと紙を見續けてゐる。ところで前に出た學生はやつと答を済まして、『宜しい！ 歸つて宜しい。』とか乃至は『宜しい、却々よく出來た！』とか、其成績に應じてそれ／＼に挨拶されて釋放される。聽てヴォイニチンが呼ばれる。『ヴォイニチンは立上つて、しつかりした足どりでテーブルへ近附く。『問題を讀んで！』といはれる。ヴォイニチンは兩手にその紙をもつて鼻先まで差上げ、のろ／＼と讀んで又のろ／＼と手を下げる。『ぢや今度は其答を！』と同じ教授が後ろへ反り返りながら腕組をしながらものうげに云ふ。そこに墓場の様な沈黙が支配する。『何故黙つてゐる？』ヴォイニチンは啞になつてゐる。副試験官は、いら／＼としだす。

『さあ何とか云つた！』ヴォイニチンは死んだものゝ様にぢつとしてゐる。彼の仲間は、皆な彼の濃い髪の毛を短く刈込んだ動かない頭を後ろからどうなる事かと見詰めてゐる。副試験官の眼は殆んどその頭から飛び出しさうである。彼はヴォイニチンが癪に觸つて堪らないのだ。『はて、こいつあ不思議だね全く』と他の試験官が云ふ。『どうして君は啞かなんぞの様に黙つてゐるんだ？ ねえ、それが解らないのか？ 解らなければ解らないと云ふが宜い。』他の問題をやらして下さい。』と運の悪い青年は重い口をやつと利く。教授連は互に顔を見合せ。『ぢや一つとんなさい。』と主席の試験官が手を振り乍ら答へる。ヴォイニチンは再び紙をとつて、再び窓際へ行つて、再びテーブルの所へ引返して来て、そして再び墓の如く黙然としてゐる。副試験官は生き乍ら彼の肉をも挫きかねない様な勢である。とう／＼彼は送り出されて零點をつけられる。『これで兎に角其男も歸ることだけは出来よう』と諸君は思ふであらう。ところが却々どうして！ 彼は自分の席へ復つて、試験の済む迄ぢつと坐り込んだ儘でゐる。そして外へ出る時に叫んで云ふ、『拷問にかけられた！ 酷い目に會つた！』かくてその日一日彼は絶え間なく頭を掻きかゞつて、痛ましく自分の不幸な運命を呪ひ乍らモスクワ中をぶらつき廻る。勿論彼は書物なんぞに手を觸れない。そして次の日もまた同じ事が繰り返される。

さてこれが今私の處へやつて来たヴォイニチンである。我々はモスクワの話や、獵の話をした。

『どうです』と彼は突然私へ囁いた。『此邊での一番氣の利いた男へ御紹介をしませうか？』

『え、どうか何分共。』

ヴォイニチンは額に房々と髪の毛の被さつた口髭のあるそして肉桂色のフロックコートに縞の襟飾をつけた或小さな男へ私を連れて行つた。彼の黄ろつばい絶えず變つて行く顔立は、確かに怜悧と皮肉とに充ち／＼してゐる。彼の唇は始終冷笑する様なカーヴを作つてゐる。厚かましげな表情をもつて締めつけた様な小さな黒い眼は、不揃な睫の下から覗いてゐる。彼の傍には鷹揚な優しげな甘味のある——丁度砂糖と蜂蜜との混ぜ物の様な——かた眼の田舎紳士が立つてゐる。彼はあの小男の警句を待ち受けて笑つて居り、面白さに溶けて了ひさうな様子であつた。ヴォイニチンはその才人へ私を紹介した。彼の名はピョートル・ペトロギッチ・ルビヒンといふ。我々は慇懃に初対面の挨拶を交した。

『私の親友をお引合せいたしたいのですが。』とルビヒンは突然鋭い聲で云つた——例の砂糖の様な紳士の腕をつかまへ乍ら。

『まあ、キリラ・セリファニッチ君そんなにしないでもいゝさ』と彼は附け加へた。『何も君を

とつて食はうといふ譯ぢやなし。僕はこの方を君へ紹介するんだ」と彼は續けた、——當惑顏のキララ・セリファニッチが外科醫の手術でも受けてゐたかの様なしとやかなお辭儀をした間に、『これは甚だ立派な紳士です。五十位まではまことに壯健な男でしたが、不圖眼を治療しようといふ氣になり、その爲めとう／＼片つ方を失くしてしまひました。その後この男は自分の所の百姓共を治療してやりましたが、何れも同じ結果を収めたのであります……勿論百姓共は同じ敬意をもつて酬いてゐるのであります……』

『何を云つてゐるんだ！』とキララ・セリファニッチは口の中で云つてそして笑つた。

『はつきり云ひ給へ。え、はつきりと／＼！』とルビヒンは續けた。『ねえ君、皆は君を裁判官に選ぶかも知れないぜ。や、眞實に屹度選ぶと思ふね。さうなつたところで勿論祕書官が君に代つて考へて呉れるさ。だが人の考をしやべる丈けにしたところで、兎に角しやべるのは自分でしやべらないぢやいけないだらう。假りに知事でもやつて來て、『どうしてこの裁判官は吃るのか？』と尋ねるとする。すると祕書官共が、『中風にかゝつて居りまして』と答へたと思ひ給へ。『ぢや血をとつてやるがい／＼』と知事はいふね。さうなつちや君の地位に對して餘り氣の利いた話でもなからうぢやないか。』

砂糖の様な紳士は全く腹を抱へて笑つてゐる。

『どうです、あんなに笑つて』とルビヒンはキララ・セリファニッチの高まる胸を人惡さうに見遣り乍ら續ける。『なに、そりや笑つたつて構ひませんがね』と彼は私の方へ振向き乍ら附け加へた。『この男は食へるには困りませんし、體はよし、子供は無し、百姓も借錢なんかしませんし——何しろあいつらの療治^{れちち}までしてやるんですからな——それからこの男の細君は大馬鹿なんです。』(キララ・セリファニッチは聞いてゐなかつたかの様にとつぽを向いて了つた。がなほく／＼と笑ひ續けてゐる。『私だつても妻が測量師と駈落をしたんですが、矢張り笑ひます。』(彼は齒を出して笑つた。『貴方は御存知ぢやなかつたのですか？ さうですか！ 何でも或る天氣の好い日にあいつは私に一通の置手紙をして男とつゝ走つたのです。』「親しきピョトル・ペトロギッチさん」とあるんです。「容して下さい。熱情に驅られて後先の考もなく、妾は愛する人と一緒に去らうとして居ります」……そしてあの測量師はあの爪を切らないでゐるところと、細いズボンを穿いてゐるところとで奴の氣に入つた譯なんです。驚いたといふんですか？ 手紙の中にはこんなことも書いてあります。「いゝえ、この人はちつとも偽りのない人なんです」……いやはや飛んだことを！ 私共の様な不作者はついでどうもべら／＼と本當のことを云つちまひますからな。しかしまあ少しあつちへも行つて見ませう……未來の裁判官の傍に立つてゐるのもなんですから』……

彼は私の腕を抱へた。そして我々は窓の方へ行つた。

『私はこの土地で頓智者といふ評判をとりました』と彼は話のうちに私へ言つた。『勿論當にやなりません。實際は私は只のひねくれもので、思つたことをすばくといふ丈けなんです。ですから、すらくと樂に話が出来るんです。何もさう勿體振つて大事をとるにもあたらなんですからね。私は誰の考だつて身を入れて聞いたりなんぞしやしません。どうせ何にもなることぢやないんですからね。私は人が悪いといふんですが——それが何でせう？ 人を悪くするには兎に角頓智なんざ要りませんからね。そりや人を悪くしてるのがどんなに面白いものかとてもお解りにはなりませんよ……どうです、まあ、あの主人を！ そら！ 何をあんなにうろく飛びまはつてるのでせう？ あゝしてにこくしたり、汗をかいたり、六ヶ敷い顔をしながら時計と睨みつくらしをして、我々のお腹の空いてるのはとんとお構ひなしだ！ いやはや何とも！ ほんとうにおん殿様だ！ やあく、また駈け出した——どうです、まるで飛んでるやうぢやありませんか！』かういつてルビヒンは鋭く笑つた。

『只残念なことには婦人が一人もゐない』と彼は深い太息を吐いてから再び始めた。『全く獨身者の寄合でつまりませんな。あれ、あれ！』と彼は突然叫んだ。『コゼルスキー公爵が來ました——そらあの髯のある黄ろい手袋を穿めた脊の高い人です。直ぐに外國へ行つてゐた人

だといふことが解ります……そしてあの人は何時でも、かういふ具合に遅くなつてから來ます。なあに、御本尊は駄馬の様な大野呂間なんですがね。そしてその話振りの横柄なこと、いつたら！ 女房や娘共が、さんざお腹を空かして待つてゐた揚句、丁寧に御挨拶を申上げて、一寸笑顔をお向けになる位が關の山なんで……それから折々は洒落なんぞ云ひますが、ほんの一寸の間丈けです。そしてまあ、あの人の洒落といつたら！ 何のことはない、なまくら刀で舟の大綱を叩き切るやうなものですな。私はあの人のお氣に召さないんです……が、兎に角御挨拶に行つて來ませう。』

それからルビヒンは公爵に會ひに行つた。

『私の特別に敵の様な奴がゐます』と彼は直ぐに引き返して來て云ふ。『そら、あの、顔の日にやけた髪の毛のごわくした肥つた男がゐるでせう。そら、向うに帽子を鷹掴みにして壁について、そりく歩きながら狼のやうに八方を睨め廻してゐる奴があるでせう。私は千留もする馬を四百留^{ムイブリ}であいつに賣つてしまひました。あの畜生め屹度私を馬鹿な奴だと輕蔑してゐるんせう。しかしあんな譯のわからん奴つてもものはあるものぢやありません。別して新茶を飲む前か、でなければ正餐^{ディンナー}の後でも「今日は！」といつて御覽なさい。「うむ？」とこれです。や、長官も來てゐる』とルビヒンは續けた。『文官の方の退職の貧乏長官なのです。あ

の人には甘菜砂糖の様な娘があり、瘰癧るみれきの様な製造場があります……や失禮、これは間違ひでした……しかしお解りでせう。やあ！ 建築屋さんが来てゐる！ 獨逸人で口髭を生はやしてゐます。そして仕事のことなんぞちつとも解らない——性來つまれつきの凡ぼんくらなんですな……尤も仕事のことなんぞ解らなくつたつて、賄賂の取り方と、社會の柱になる様な人のお髯の塵を拂つてその柱にしがみついてゐる事とさへすりやいゝんですからね！』

ルビヒンは再びクス／＼と笑つた……しかしこの時、突然さはめきの浪が家中を打ち越えた。例の高貴の方がお著きになつたのである。主人は眞先に玄關へ駈け出した。彼につゞいて、彼の家に厄介になつてゐる數人の者と、熱心なお客とが駈け出した……今までの騒々しい話聲は樂しげな聲を潛めたさゝやき——春、蜜蜂が巢の中で、が／＼と唸つてゐる様な——に變つた。只八ヶ間敷い山蜂のルビヒンと、立派な雄蜂のコゼルスキーとはその聲をひそめなかつた……それから見てゐると遂に女王蜂が——その高貴の方が入つて来る。心は春を迎へる爲めに踊り上り、坐つてゐる體かたは椅子から立つた。ルビヒンから馬を買つた紳士すらも願を胸につけた。その豪い人は眞似の出来ない様な容體振つた様子をしてゐた。お辭儀をするのもりの様に、ずつと頭を後ろに反らし乍ら、一言々々『えゝ』といふ前置きをつけて鼻にかゝる様な聲で満足に思ふ旨の挨拶をした。夫それから彼は眼にあまるといふ様な顔をし乍

ら、コゼルスキー公爵の平民的な髯を見上げて、例の製造場と娘とをもつた貧乏長官には右手の人さし指丈ゆびだけを差出した。二三分經たつ間の高貴の人は、彼が晚餐に遅れなかつたのを甚だ嬉しく思ふといふとを二度迄云つた。夫それから會衆全體が豪い人達を先立てゝ食堂へ進んだ。

まづ高貴の人が一番の上座に、文官の長官と州の都督との間に坐らせられたのは云ふ迄もない事である。この都督のしつかりした品のある顔立は、糊のこはい胸あてや、大きなチヨッキヤ、佛蘭西の嗅煙草を詰めた圓い煙草入などとよく似合つてゐた。主人は忙しげに駈けまはつてお客に御馳走を強ひ、高貴の人の後ろを通り過ぎる度毎に微笑した。そして部屋の小隅で學校の子供か何んぞの様に忙しく、スープを啜つたり、パンを嚙つたりした。料理人は口に花束をさした一ヤードにも餘る様な大きな肴をもつて來た。被布はつぷを著た不愛想な下僕共は鹿爪らしい顔をして、凡ての紳士等にマラガをすゝめたりマデイラをすゝめたりした。そして大抵の紳士等は、とりわけ年の行つた紳士等は、義務として厭々乍らも飲むんだといふ様な顔をしながら、一杯々々と飲んでゐたが、おしまひにはシャンペンの口を抜いて祝盃を舉げ出した。こんなことは、く／＼しく書かなくとも、讀者諸君の知り過ぎるほど知つて居られるところであらう。しかしとりわけ注意すべきものとして私に印象されたのは、一同を悦んで傾聽せしめたところの、あの豪い人自身の話した話である。誰であつたか——近代文學

に親しんでゐるあの貧乏長官であつたと思ふ——一般に婦人といふものゝ勢力、とりわけ若い人々に對して及ぼすところの勢力について話した。『さうだ〜』と高貴の人が調子を合はした。『それは本當だ。だが若い者は嚴重にして、嚴重に監督して置かなければならん。でないと兎角女さへ見ると夢中になつて了ふ。』(子供らしい悦びの微笑がすべてのお客の顔の上を吹き渡つた。或る紳士の眼には謝恩の光といった様なものさへ見えた。『何しろ若い者は馬鹿だからな。』この高貴の人は言葉に力を入れる爲めで、もあらう、折々妙なところへアクセントをつけた。)

『私の倅のイワンなんぞも』と彼は話をすゝめた。『あの馬鹿もやつと二十歳になるが——いきなり私の處へやつて来て「お父さん結婚して下さい」といふんです。私は馬鹿者めが！としかりつけた、それよりもまづ兵隊に行つて来いと云つてやりました……いや、がっかりしましてな——めそ〜やるといふやうな仕末で……だが私から見れば……何ともはや馬鹿げきつてゐて。』(『馬鹿げきつてゐて』といふ言葉は彼の唇から出るよりも、胃袋から出る様に思はれた。彼は言葉を切つて豪さうに隣の長官をちらりと見遣つた。そして誰が豫期したよりもその眉を吊り上げた。文官の長官は心持よげに少し許り頭を傾げて、高貴の人の方へ向つた眼を忙しげに瞬きした。』)ところで貴方はどう思ひますな？』と高貴の人は再び云

ひ出した。『今では倅も手紙を寄越して、自分が馬鹿になつてゐた時分に氣をつけて下さつたのを有難いと云つて居る……だから矢張りあゝしてやるべきですな。』

勿論すべての客はこの話手とすつかり同意した。そしてそれから引き出した悦びと教訓とに景氣づけられたやうに見えた。……食事の後で集り全體が立上つて、がや〜と騒がしく——しかし乍ら行儀良く客間へ移つた。そして暫らくの間、氣隨氣儘を許されたかのやうに……彼等は歌留多に向つた。

私は兎も角もしてその晩を過ごした。そして明日の朝五時に馬車の用意をして置くようにと馭者に云ひ附けて置いて、私の部屋へ引き取つた。ところで私は此日或る面白い人物と知合ひになるべく運命づけられてゐた。

その家に泊り込むお客が大勢だつたので、誰も各々に自分の寢室をもつことが出来なかつた。私がアレクサンドル・ミハリッチの料理番に案内された小さな緑がかつた濕つぽい部屋の内には、已に今一人のお客がすつかり著物を脱いでゐた。私を見ると彼は早速布團の下へもぐり込んで、鼻迄隠して、一寸の間柔かな鳥の毛の寢床に、むく〜動いてゐた。そして古綿の夜帽ナイトキャップの圓い飾縁の下から、ちろ〜覗きながら、ちつとしてゐた。私は今一つの寢臺へ上り(この部屋にはたつた二つ丈けあつたのだ。)著物を脱いで濕つぽい敷布の上に横になつた。隣

の男は床の上に寝返りを打つた……私は彼にお休みなさいと云つた。

半時間許り経つた。私はどんなにして見ても寝附かれなかつた。當度もないぼんやりした考が水車の水受の様に後から／＼果しなく珠數繋ぎになつて執拗に單調に押寄せて來た。

『まだお休みになつてゐない様ですね？』と私の隣人が云つた。

『え、御覽の通りで』と私は答へた。『貴方もお眠くないんですか？』

『私は何時だつて眠いことはありません。』

『どうしてです？』

『いや！ 眠るには眠ますが——どうして眠るんだか解りません。私は床へ入ります。そして床に入つてゐるとそのうち眠つてしまふんです。』

『どうしてまたお眠くないのに床へお入りなんですか？』

『でも仕様がないちやありませんか。』

私は隣人の言葉に答へなかつた。

『不思議ですね』と彼は暫らく黙つてゐた後で又話し出した。『こゝには一寸も蚤がゐませんね。こゝに蚤がゐないなんて不思議ぢやありませんか？』

『ゐないのをお困りの様ですね。』と私は云つた。

『や、困りもしませんが、私は何でも辻褃の合つてることが好きなんです。』

『こいつは大分妙なことを云ふな！』と私は思つた。

私の隣人は再び黙つてゐた。

『どうです、私と一つ賭をしませんか？』と彼は可成り聲高に再び云つた。

『何で賭をするんです？』

私は何だかこの男が面白くなり出した。

『何で賭をする？ さうですね。貴方は屹度私を馬鹿だと思つてゐらつしやるでせう。』

『飛んでもない。』と私は驚いて云つた。

『物の解らない奴、田舎の土百姓だと……ね……さうだとおつしやい……』

『私はこれまでお目のかゝつたこともなかつたんですから』と私は答へた。『どうして貴方はそんな事をおつしやる？』

『なあに、貴方のお聲で解りますよ。貴方は随分無頓著さうに御返事をなさるんですからね……しかし貴方がお考へになるのとはまるつきり違つて……』

『失禮ですが……』

『いや、まあ私の云ふ事をお聞き下さい。第一に私は貴方位には佛蘭西語が話せる。獨逸語

ならもつと巧くでも話せます。第二には三年も外国に行つてゐました——ベルリン丈けにも八ヶ月居ました。私はヘーゲルも研究しました。ゲーテなんぞすつかり頭ん中へ入れて居ります。その上私は長い間獨逸の大學教授の娘と愛し合つて、それから國へ歸つてから肺病の婦人と結婚しました。頭は禿げてゐましたが、却々豪い女でした。かう申し上げて來ると貴方がたとあんまり毛色が變つてゐる譯でもないでせう。私は貴方がお考へになる様な心の中の野蠻人ぢやないですよ……私だつて随分考があります。さう馬鹿な眞似もしませんよ。』

私は頭をあげて更らに新しい注意深さをもつて、この妙な男を眺めた。けれどもランプのほの暗い明りでは殆んど彼の顔附をはつきりと見ることが出来なかつた。

『そら、貴方は私を見てるでせう』と彼は夜帽ナイトキャップを眞直に直し乍ら續けた。『そして屹度不思議がつてるでせう、どうして今日あいつが目につかなかつたらう？』と考へながら。そりや目につかなかつた筈ですよ。私は何にも云はないでゐましたもの。他の人の後ろへ隠れて戸口の邊に小さくなつてゐて、誰にも口を利かないでゐましたもの。それから料理番が盆をもつて通る時なんぞ、其脇が私の肩のところまで來たので……ぢや何故そんな眞似をしたかつて云ひますと、それには二つの理由がある、第一には、私は貧乏です。第二には、私が自分を謙遜くたるやうになつたのです……どうです、眞實に私が見附かりませんでしたか、え私が？』

『全くどうも……』

『そら御覽なさい』と彼は私を遮つた。『ちやんと解つてゐますよ。』

彼は身を起して腕を組んだ。帽子の長い影が壁から天井へ伸びた。

『それから包ますおつしやつて下さい』と彼は突然、横目にちらりと私を見ながら附け加へた。『貴方は屹度私を見て妙な奴だと、所謂素人だと思つたでせう、いや、奇人以上の奴と思つたでせう。ことに依ると私が奇人を装つてゐると思つたでせう！』

『さつきも云ふ通り私はこれ迄貴方を知らなかつたんですから……』

彼は一寸の間眼を閉ぢた。

『どうしてかう思ひがけなく貴方と、全く知りもしない方と、お話しを شدしたものでせう？——全く不思議ですわね！』(彼は太息を吐いた。『私共二人の間に生れ乍らつながりがあるといふ譯ではなし！ 貴方も私も世上の人間で、いはゞ自分勝手な人間です。どちらも一向に關係がないぢやありませんか、ね、さうでせう？ ところが、どちらも眠くない……だからお喋りをするのに不思議はないでせう？ 私はお喋りがしたくなつてゐるんですが、こんな事は滅多にないんです。私は一體はにかみやなんですが、田舎者だからとか、身分がないからとか、貧乏だからとかいふんぢやありません。只恐ろしく見榮坊に出來てるものですか

らな。尤も折々具合が好いと——しかし其場合をどういふ場合といふ譯にも行かず、豫測することも出来ませんが——私のはにかみは丁度今の様にすつかり失くなつてしまふんです。今なら大喇嘛と顔を突き合はしてゐて嗅煙草をねだる位の事は結構やります。だが貴方はお休みにならなくちやいけないでせうね？」

『いゝえ、決して』と私は急いで答へた。『かうしてお話をしてゐるのは大變面白いんです。』
『さうですか、面白いとおつしやるんで……それならば愈々結構です……ところで今も云ふ通り皆なが私を奇人だと云ふんです。世間話の間にひよつと私の名前でも出れば、必ずかういふんです。それ以上は私の運命に就て誰も頓著して呉れません……皆なは奇人と云へば私が閉口するかと思つてゐるんです……や、若し皆なが知つてゐたなら……私は變つた所がないばつかしに斯うなつたんです——かうして今お話をしてゐる様に、ひよつと氣が向いて話をしだすといふ様なことはありませんが、そんな事は三文にもならない。一番安つばい下らない變りやうですよ。』

彼は私の方へ向き直つてその手を振つた。

『ねえ貴方！』と彼は叫んだ。『私はいふ説を有つてゐるんです——至上の生活は一般に只奇人にとつてのみ生活する價値がある。生存の權利をもつてゐるのは彼等丈けである。Mon

verre n'est pas grand, mais je bois dans mon verre. (我が盃は大ならず。されど我は我が盃をもつてのまむ。)と誰か云ひました。どうです』と彼は低い聲で附け加へた。『私の佛蘭西語の發音は旨いものでせう？ 幾ら高貴な頭腦をもつてゐて、凡ゆる物を理解し、來るべき運命を知り、時代と歩調を合せて行く事が出來たとしても、其人自身の獨得の物を何にも有つてゐないとしたら何の役に立つでせう！ それこそ此世の中のがらくたを藏つて置く藏をも一つ建て増したやうなもので、それが誰の役に立つでせう？ いや、それよりか寧ろ自分一流の馬鹿々々しさを有つてゐる者の方が増しです！ 一體人間は自分の匂、自分の個性ある匂といふものを有つてゐなければならぬ、それが眼目です！ 所で其匂がどんな匂でなければいけないといふ様な窮屈な事を云ふんぢやありません……何の！ 私が變つた人といふのは實際なく色んなのがあるんです。何方を御覽になつても變つた人はゐるものです。生きた人間は皆な變つてゐます。所で私丈けが變つた人間でなしにゐられますか！』
『ですが』と彼はしばらく黙つてゐた後で又話し續けた。『青年時代には私もどんな期待を有つてゐたと思ひます？ 自分自身の個性といふものを、どんなに高く見てゐたでせう——外國へ出かける前に、いや國へ歸つてからも最初の内は！ で外國に行つてゐる間、私は始終目や耳を開けてゐました——私共の様に何にも解らない辭に解る様に思ひ、結局何にも解らな

いといふことが解るといふ様な手合によくあることですが！』

『奇人だ、奇人だ！』と彼は答める様な調子で頭を振り乍ら言葉忙しく云つた……『皆な私を奇人だといふんです……實際の話が私なんぞが奇人だつた日には、世の中に奇人でないものはなくなつてしまふんですがね。私は誰か他の或人の鑄型にはめて生みつけられたんぢやないかと思ふ位です……いや、全く！ 私はまた私の研究した種々の作家の模倣をして生きてる様にも思へるんです。私は額に汗を出して生活してゐる。そして私は勉強もしました、戀もしました、結婚もしました——實のところは、宛も自分自身の意志からでない様に、一種の義務を果すともいふ様に、でなければ一種の運命を甘受するとも云ふやうに！』

彼は頭から夜帽ナイトキャップを脱ぎ取つて床の上に投げ附けた。

『貴方は私の身の上話を聞いて下さいますか？』と彼は出し抜けに尋ねた。『身の上話といふよりも私の生涯に起つた二三の出来事を聞いて下さいますか！』

『是非どうぞ。』

『いや、それよりも私がどうして結婚したかそれをお話しなされた方がいゝでせう。ねえ、結婚は重大なものでせう、人物全體を試験する試金石の様なものでせう。これにかけると鏡が物を反映する様になるんですから……が、かう言つちや餘り平凡になりますな……一寸失禮し

て嗅煙草を一服やります。』

彼は枕の下から煙草入を引き出し、それを開けて、開けた煙草入を振り廻し乍ら再び話し出した。

『まあ假りに貴方が私の身になつたとして御覧なさい……抑も一體、その、どういふものだから判断して見て下さい。ヘーゲルの百科全書から、私はどんな利益を引き出すことが出来るか？ ねえあの百科全書と露西亞人の生活との間には、どんな共通點があるんでせう？

そしてあれが我々の生活にどうして適用されるでせう——あれ許りではない、あの百科全書ばかりでなく、一體に獨逸の哲學といふものが……更に進んで云へば科學其のものが！』

彼は床の上に飛び上つて、腹立たしげに齒ぎしりをし乍ら、獨語のやうに呟いた。

『いや、それだ、それだ！……それならば何しにお前は外國などをほつき歩つたか？ 何故お前は國に止まつてゐて、周圍にお前を取り巻いてゐる生活を研究しなかつたか？ さうしたならお前もその生活の必要とするところを、行くべきところを見出し、所謂お前の天職といふものをはつきりと理解することが出来たかも知れない……だが實際』と彼は又もや、びく／＼もので自分自身を是認しようとするかの様に、調子を變へ乍ら續けた。『いかなる賢哲もまだ筆にしてゐない様な事柄を、どこへ行つて研究すべきであるか？ 私は實のところ

彼女から——露西亞人の生活からだ——教はり度いと思つた。けれども彼女は可哀相に啞である。人は彼女をその有るが儘にとらなければならぬ。しかしそれは私の力に及ばない。私は説明をつけて貰はねばならぬ。私は結論を示して貰はなければならぬ。こゝに一つの結論もある。我が賢明なるモスクワの人々に聞け——彼等は耳を傾けるに足るべき夜ナイチンゲール 鶯のものではないか！ さうだ彼等が人間の話をする様に話さないで、クルスクの夜鶯の如く囁つてばかりゐるといふのが嘆かましい……そこで私は考へに考へた——「科學は實に」と私は考へた。「何處に於ても同一である。そして眞理は同一である」——かう思つて私は神の名に於て外國へ、異教徒の間へ行つた……さうして得るところのものは何であつたか？ 私は若しさと自惚とにのぼせ切つてゐた。私は時の來ないのに肥り度いとは思はなかつた——それが健康なからであるとは云ふけれども——素より自然が肉をつけて呉れないならば、決して肥る譯にも行かないのだが！』

『しかし何でしたね』と彼は一寸考へた後で付け加へた。『私はどうして結婚したかそれをお話しする約束でしたね——まあお聞き下さい。第一に私は私の妻が最早生きてゐないといふことを申し上げなければなりません。第二に……第二に私は私の若い時分の話を少し許りしなければなりません。でないとなが何やらお解りになりますから……しかしお眠み

にならないでもいゝんですか？』

『いゝえ、眠くはありません。』

『それなら結構。お聞き下さい……カンタグリューヒンさんが隣の部屋であの酷いひどいいびきをかいてゐることは！ 私は少し許りの財産を有つた両親の息子でした——私が両親といふのは云ひ傳へに依ると、私にも母と同じ様に父があつたといふことです。私は覚えてゐませんが、父は随分偏狭な男だつたさうです。何んでも鼻の大きな、そばかすのある、赤い毛の人で、鼻の片側で許り嗅煙草をやつてる人だつたとか云ひます。其肖像は何時も母の寢室に懸つてゐましたが、耳許まで黒いカラーをたゝて、赤い正服を著たところは大變恐ろしい人でした。私はよくあの前へ連れて行つて打たれたものです。そしてさういふ場合何時でも母は父の肖像を指し乍ら「お父さんがお出でつたら、もつと酷いひどい目に逢はされるんだよ」と云ひ聞かせました。それがどんなに私を激勵したか、御察し下さるでせう。私には男の同胞も女の同胞もありませんでした——いや本當を云へば一人の同胞があつて、首のイギリス病でぶら／＼してゐましたが、程なく亡なくなりました……一體どうしてイギリス病なんぞがクルスク州のシュチグリ地方にまで這入り込んで來たんでせうか、不思議ですがね。しかしこれは餘談です。母は山家育ちの女の身一つに、一生懸命私の教育を引受けて、私の生れ落ちた

大事の日から十六の年までといふもの、引續き面倒を見てくれました……貴方はお聞きになつてゐて下さいますか？』

『聞いてゐますとも、さあどうぞ。』

『さうですか。それで私が十六の時、母は佛蘭西語の先生を止めさせました。ニエ人のギリシヤ殖民地生れのフリポヴィッチといふ獨逸人でした。そして私をモスクワへやつて、大學へ入れました。母が伯父の手に私を残して置いて、神様の手へ自分の魂を預けて了つたのは間もなくのことです。伯父はシチグリ地方許りでなくその他にも名の通つた辯護士で、コルトン・バヴルと云ひました。後見人によくあることですが、コルトン・バヴル辯護士は私の財産を鍰錢びんせん一文残さず捲上げて了ひました……しかしこんな事も餘談です。私は大學へ入りましたが——母に對して有難く思はねばなりません——可成りよく準備が出来てゐました。けれども獨創の缺乏はその時分にも明かでした。私の少年時代は他の子供等とちつとも變つてゐなかつた。私は同じ様にぐづぐづと不活潑に大きくなつた——丁度鳥の毛の布圍を被つて育つたかの様に。が又一方ではこれと共に、随分早くから詩を誦おんじやうして、夢を見る様な心持でぼんやりしてゐる様になりました……どんな夢をと？——そりやまあ美しいものとか……何とかに極つてゐます。大學へ入つてからも同じでした。私は早速「俱樂部」へ入り

ました。その時分は今とは大分違つてゐましたが……貴方は御存じないでせうね、私の云ふこの「俱樂部」がどんなものか？ どうかでシラーがこんなことをいつてゐましたね——

Gefährlich ist's den Leu zu wecken

Und schrecklich ist des Tigers Zahn,

Doch das schrecklichste der Schrecken

Das ist der Mensch in seinem Wahn !

(獅子の眠りを覺ますは危し

虎の齒は更に恐ろし。

しかはあれどもいと恐ろしきは

身のほど知らぬ人にこそあれ！)

シラーはきつと斯う云ふつもりでなく、

Das ist ein circle in der Stadt Moskwa !

(モスクワの俱樂部にこそあれ！)

と云ふつもりだつたでせう。』

『しかしその俱樂部の何がそんなに恐ろしいんですか？』と私が訊ねた。

私の隣人は帽子を引揃んで鼻の上まで引下ろした。

『何がそんなに恐ろしい？』と彼は叫んだ。『何がって他でもない、この倶楽部は凡ての獨立した點を破壊するんです。この倶楽部は社會や婦人や、生活を押しつけて恐ろしいものにしてしまひます。この倶楽部は……や、一寸お待ちなさい、一體倶楽部つてどんなものかお話しませう！この倶楽部つて外から見ると眞面目らしく、理にかなつて活動してゐる様に見えるはれ乍ら、のらりくらりと寄り合つてゐるわけなんです。この倶楽部は話の代りに討論をやる用もない議論の練習をする、靜かに有益な仕事をする邪魔になる、著作者生活を渴望させる實際あらゆる生氣と、純潔な魂の力とを奪ひ取つてしまふんです。倶楽部は——なあに兄弟だとか、親友だとか云ひ乍ら俗悪と下劣とを極めてゐるんです！胸襟を開くとか同情を寄せるとか云ひ乍ら、誤解と屁理窟との連続に過ぎない。倶楽部では友人の權利によつて何時なんどきでもその仲間の内心深く汚れた指を突つ込むことが出来るといふので——誰の心にも純潔な汚水に染まない只の一點すらもない。この倶楽部では淺薄な空っぽな小器用な話手や、未熟な賢人振つた奴等の前に跪いたり、何の詩才もないと「小ましやくれた」ことを並べたてる丈けのへボ詩人を崇め奉つたりする。この倶楽部では僅か十七位の小僧つ子がペラ／＼と知つたか振りに女だの戀だのと喋り立てる。その癖女の前へ出ると妙に澄し込ん

だり、書取の中にもある様なことを口にしたりする——どうせ碌なことを話すのでもないが。この倶楽部は何のことはない、よた話の練習所ですな。そしてお互に刑事巡查か何ぞの様に探偵し合つてゐる……あゝ倶楽部、倶楽部！爾は倶楽部（譯者註——原語には環といふ意味があるのである）ではなくて、多くの行儀正しき若者の身を持ち崩さしたところの魔法の指輪である！』

『失禮ですが、貴方の話は少々誇張に過ぎやしませんか。』と私は口を挟んだ。

隣の男は黙つて私を見た。

『さあ、或はさうかも知れませんが。たゞ私に残つて居る楽しみといつたら一つしかない、そしてそれは誇張です——兎に角そんな鹽梅で私は四年間モスクワに過ごしました。あの四年間がどんなに速く過ぎ去つて了つたかはお話も出来ません。あれを想ひ出すのは全く苦しい厭なことなんです。朝起きたかと思へばその日が暮れて了ふ——全で小さな橋にのつて坂を下る様なもので……四邊を見廻す隙もなく谷底へ滑り落ちてしまふ。するともう夜になつてゐる。そしてもう眠むさうな下僕が上衣を著せる。身仕度をして友人の所へ出かけて行く。煙草を喫んだり薄茶を飲んだり、獨逸の哲學だとか、精神の不朽の光明である戀愛だとか、その他の様々な八ヶ間しい問題を論じる。しかしそんな時分にも私は獨創的な獨立した人間に

會ひました。或人は自分といふものを韜晦して隠れようとするけれども仍且つ本來の性質が顯はれる。ところが私の様なやくざものと來たら、やはらかな蠟みた様なもので、どんな形にでも捏でつちられ次第です！ さうかうする内に私は二十一歳となりました。私は遺産を相続することになりました。もつと正確にいへば後見人が私にやつてもいゝと思つた丈だけの遺産の部分を相続しました。私はワシリー・クドリヤシェフといふ解放され家ヘウスケラウ 奴ヌへ私の財産を預けて置いて、遠く柏林へ出かけました。で、私は既に申上げた通り三ヶ年といふものを外國に送りました、ところで！ そこでも、外國にゐても私は依然として獨創のない人間でした。第一私は歐羅巴について、歐羅巴の生活について、眞實に何の學ぶところもなかつたのです。私は本場で獨逸人の教授の講義を聴き、獨逸語の書物を讀んだ、これが他と異なる凡ての點なのです。私は坊さんの様な寂しい生活をしました。私は退職した陸軍の中尉と懇意になりましたが、私と同じ様に知識欲に苦しめられた併し乍ら何時も血のめぐりの遅い、口の廻らない男でした。私はベンザやその他の片田舎から出て來た氣の利かない家族のもの達と知合になつたり、カフェーへ這入つたり、新聞を讀んだり、晩になると芝居へ出かけたりました。本國の者とは餘り交際せず話をするのも厭で誰をも私の家へは寄せつけなかつた。只二三人の猶太生れの厚あつかましい奴ヌ丈だけは、始終押しかけて來て、何ぞの癖くせには金を貸

して呉れと云ふのでした——露西亞人は瞞だまし易いといふ譯で。その内不思議なことから私は或る教授の家へ出入する様になりました。といふのは私が或講義を聴く爲めに名前を控へて置いて下さいと頼みに行つた時、彼は思ひ掛けなくその家の晚餐ばんさんに私を呼んで呉れたのです。この教授には二人の娘がありました。三十位の小柄な活潑な女で——鼻の高い髪の毛の綺麗に捲き縮れた、薄蒼い眼の、白い爪をした赤い毛の女でした。一人はリンヘンといひ、今一人はミンヘンといひました。私は教授の家へ行き出しました。實をいふと教授は鈍物ではないけれどもどつかぼんやりした様なところのある人でした。講壇に立つては立派に筋道を立て、講義をしますが、家では舌のまはらない様な口の利き様をして、何時も眼鏡を額先に上げるのが癖でした——しかし何といつても學問のある人でした。さて氣がついて見ると私はリンヘンに戀をしてゐたのです、そして至半年の間この心持が続いてゐました。尤も私がその娘と話をすることは滅多になく——まあ顔を見てゐる方が多かつた譯なので。しかしよよくいろくの面白い個所を朗讀して聞かせたり、こつそり、手を握つたり、夕方なんぞ月を觀ながら、でなくともたゞぼんやりと空を見上げながら。娘の傍で夢を見てゐたりしたものです。それからまた娘はまことに旨い珈琲ウマを拵へて呉れました！ 考へて見ると——女に對してこれ以上のことが望み得られるものでせうか？ たゞ一つのこと私が私の心に懸りまし

た。何とも云へない幸福のその瞬間に私は何時も胸を押し付けられる様な、脊中から冷たい水をかけられる様な氣持がしてゐました。とう／＼私はかうした幸福に堪へ切れなくなつて逃げ出しました。それから後全二年といふものは外國に居ました。伊太利へ行つて羅馬の「變容」の前に、フロレンスの「ヴィナス」の前に立つて、不意に狂亂が私を襲うたかの様な悦びを感じました。晩には詩を書き、日記をつけ出しました。いつて見ればこゝでも私は當り前の人と同じ様なことをしたのです。こんなことで變つてるといふなら變つてるといはれるのは誠に譯のないことですからね！一體私は繪畫の趣味も彫刻の趣味もないんです……その癖はつきりさうだと云へばいゝのに……却てさうは云へないんです！私は案内者を頼んで壁畫なんぞを觀に行かなければならなかつたのです……』

彼は再び眼を垂れ、再び夜帽ナイトキャップを引張つた。

『さて私はとう／＼國へ歸りました』と彼は疲れた様な聲で話を續けた。『私はモスクワへ行つた。モスクワでは、私の上に驚くべき變化が起つた。外國に居る間は私は殆んど口を利かないで居ましたが、今や急に油がのつて話をしだす。同時に自分といふものを餘つ程えらい者に思ひ出して來ました。この土地の親切氣のある人々からはすつかり天才の様に見られてゐました。婦人達は私の長談議に同感の耳を傾けました、が私は何時までも榮譽の頂上に止

まることは出来ませんでした。或朝私の上に悪い評判が出て來ました(誰が云ひ出したものか解らないが、多分女の腐つた様な奴の仕事に相違ありますまい——モスクワには随分こんな奴が多いんですからな)。この悪い評判が苺の様に芽をふいて見る／＼蔓を伸ばし出しました。私は閉口してそれを抜け出さう、その畏おそを破つて出ようと思いましたが——利目が無い……遂に私はそこを立去りました。つまりこゝでも私は馬鹿者の馬鹿者たる所を發揮した譯なんです。私は恰度癩疹かたの治るのをでも待つやうに、嵐の吹き過ぎるのをおとなしく待つて居ればよかつたのです。さうすれば例の親切氣のある人達が再び腕を擴げて私を迎へて呉れ、例の婦人達が再び私の話に聞惚れるやうになつたでせう……しかしいけないことには私が獨創的な人間でなかつたのです。まあお察し下さい、私は氣が咎めて何事にも躊躇するやうになりました。休みなく喋るのが、昨日はアルバートで、今日はトゥループで、明日はシヴゼリー・ヴラズキーで、しかも同じことをたゞ喋つてばかりゐるのが少々恥しくなつて來たのです……しかしですね、それでも世間の人が聞きたいといふなら？ まあ、その道に本當の成功を收めるといふ様な人を御覽なさい。彼等は何の役にたつなんかといふことは、尋ねやしない。寧ろ無心の魚が水の中にゐるやうな量見でゐます。だから或者は二十年一日の如く、しかも同じ様なことを喋り續けて居ります……それは一に彼等の自信と自負とによるもの

であります！それは私にも自負心はありました——實のところ、只今でもすつかり死んでしまつた譯ではない……然しいけなかつたのは——繰り返して申しますが、私が獨創的な人間でなかつたのです——私は中途半端で止めてしまつたのです。自然はもつと澤山の自惚を私に呉れるか、でなければ全然呉れない方がよかつたのです。兎に角最初私はこの變化を非常に困難に感じました。のみならず私が外國に居たことも、私の資産をすつかり失くしてしまいました。さればといつてジェリーの様にぐにやくした年の行かない商人の娘などと結婚する氣にもなれません。それで私は自分の田舎へ引込んで了ひました。私の思ふのに『隣人は再び横目でちらりと私を見乍ら附け加へた。』田舎生活の最初の印象、例へば自然の美がどうか、寂寥のやさしい趣きとか、何とかいふ様なものはぬきにしても宜いでせうな。』

『えゝ宜うござんすとも。』私は口を挟んだ。

『それに』と彼は續けた。『そんなことは下らないですから。少くとも私の場合なんぞでは私は田舎へ歸つてからは、鍵につながれた小犬の様にふさぎ込んだものです——勿論家への歸路に、初めて春の懐しい樺林を通つた時など、頭には様々の思ひが湧き返り、胸には漠然とした甘い期待が脈打つてゐたのです。けれどもこんな漠然とした期待は貴方も御承知の通り決して當るものでない、寧ろ反對に至^まで思ひもかけない様な途方もないことになるもので

す——家畜が病氣になるとか、地代が滞るとか、競賣だとか何だとか彼だとか云ふ様なことで。私は番頭に手傳はせて毎日々々整理をしました。此支配人のヤコフは以前の監督の代りに來たのですが、時の經つに連れて大泥棒となつて了ひました、尤も前の奴より甚い泥棒といふのでもありませんが。その上あいつのタールを塗つた長靴の匂がすつかり私の生活を厭なものにしてしまひました。或日ふと私は近所に知合の一家があつたことを想ひ出しました。それは退職した大佐の未亡人とその二人の娘とでありましたが、私は馬車の用意をさせてその家へ出かけてまゐりました。その日は何時までも私にとつて記念しなければならぬ日です。六ヶ月の後、私はこの退職大佐の二番娘と結婚しました！……』

話手は頭を垂れて空に手を上げた。

『しかし』と彼は熱心に話を進めた。『私は私の亡くなつた妻に對して不利益なことを申し上げるに忍びない！ 神様がそれをお止めになります！ 妻はこの上もなく寛大な優しい女でしたどんな犠牲をでも拂はうといふ情愛の深い女でした。尤も打明けて申すと、若しあれに死なれるといふ様な不幸がなかつたならば、今日貴方に對してこんな具合にお話することは多分出來なかつたでせう。今でも私の家の穀倉にはあの梁が残つてゐますが、私は幾度かあれで首を縊らうとしたのです！』

『梨によつては』と彼はしばらく休んだ後で再び云ひ出した。『本當の味が出るまでしばらく穴倉の中にねかして置かなければいけない』と云ふことです。私の妻もかういつた様な性質のものに出来てゐた様です。今こそ私はあれを正當に批判することが出来ます。例へば結婚の前にあれと過ごした夜の想ひ出なども最早何等の苦々しさを感ぜさせず、寧ろ私を涙に誘ふほどのものになつて居ります。あの一家は金持ではありませんでした。家は誠に古風な、そして木造で、しかし居心地の好い家でした。草の延び放題に延びた中庭と、手入れのしてない庭園との間の丘に立つてゐました。丘の裾を流れる川は厚く茂つた葉がくれに見えてゐました。家から庭園に続く廣い平場の前には薔薇の花に蔽はれた長い花床が榮えてゐました。花床の兩端には二本のアカシヤが伸び、前の持主によつて螺旋形に伸びる様に慣らされてゐました。少し離れては手も入れず伸びるが儘に伸ばされた黒苺の藪の真中に一つの東屋が立つてゐました。内側はうまく裝飾されてゐましたが、外側は見るも哀れなほど古臭く壊れかゝつてゐました。平場から客間へ行く間には硝子戸が立つてゐました。さて客間へ這入つて目につくものはと云へば、隅々に据ゑ附けたオランダ瓦の煖爐、右手の方に据ゑ附けた、きいきい聲のピアノ、その上に積み上げた樂譜、色の褪めた青い切地に白つぼい形のついたのを被せた安樂椅子、一臺の圓いテーブル、磁器と硝子の二つの棚、カザリン時代の骨董物などであ

りました。壁には麻色の髪をした娘が胸に鳩を抱いて空を見上げてゐるあの有名な繪が掲げてあり、テーブルの上には新しい薔薇の花を挿した花瓶がのつてゐました。どうです私の話は随分詳しいでせう。あの客間で、あの平場で、私の戀の悲喜劇は演じられたのです。大佐夫人その人は意地の悪い老婦人で、其聲は何時も憎々しげにしゃがれて居り——随分小うるさい口やかましい女でした。娘の一人ヴェラはどの點から見ても田舎の普通の若い娘と異つた所を有つてゐませんでした。も一人のソフィヤといふのです、私と戀になつたのは。この二人の姉妹は共通の寢室として別に一つの小さな部屋をも有つてゐました。その部屋には二つのさつぱりした小さな木造の寢臺があり、黄ろく古ぼけたアルバムがあり、木犀草があり、あまりうまくもない鉛筆で書いた友達の肖像畫(その中に非常に元氣の好い顔をした更に元氣のいゝ署名をした一人の紳士があります。それも若い時分には素敵な希望を抱いてゐたのです。矢張り我々同様何者にもなれないで了ひました)があり、又ゲーテ、シラーの胸像や、獨逸語の書物や、ひからびた花環や、その他記念物として保存されてゐる色々のものがありました。しかし私はその部屋へ滅多に入ることもなく、又入るのが厭でした。そこへ入ると何だか窒息する様な氣がしたのです。そして又妙な話ですが、私はソフィヤの方に脊を向けて坐つてゐるとき一番あの娘を好きでした。や、もつと好きだつたのは夕方平場の上に立つ

でソフィヤのことを考へたり、夢想したりしてゐた時であつたでせう。そんな時分私は入目を眺め、樹木を眺め、すでに暗闇の中に入りながらなほ蔷薇色の空にくつきりと浮び出てる細い木の葉を眺めるのが常でした。客間ではソフィヤがピアノの前に坐つて絶えず繰返して氣に入りの熱烈な哀切なベートウエンからの一節を弾いてゐます。意地の悪い老夫人は安樂椅子にかけたまゝ香氣に躰をかいてゐます。蒼白い光が洪水の様に溢れてゐる食堂ではヴェラがかひくしくお茶の仕度をしてゐます。湯沸は何か嬉しいことでもある様にシュッシュッと楽しい音を立てゝゐます。クラクネルは心持よくぼり／＼と折れ、スプーンはコップに當つてカチャ／＼と鳴ります。終日むごたらしく鳴き續けてゐたカナリヤは、にはかにおとなしくなつて、只折々何かを求める様にチュウ／＼と鳴きます。透る様な軽い雲からは通り雨の瀧がはら／＼と落ちて來ます……私はぢつと坐り込んで、靜かに耳を傾け、四邊を眺めます。私の心は擴がつて行く様に思はれ、戀をしてゐるのだなといふ様なことが思はれます。さてかういふ夕方方の不思議な力に動かされて、私は或日その娘を貰ひ度いと老夫人に願ひました。そして二月の後私は結婚しました。私はあの女を愛した様に思つてゐました……勿論今日となつて見れば大體解りさうなものです。しかしどうしたものか今日なほ私はソフィヤを愛してゐたかどうか解りません。あれは利發な黙つた心の温い優しい奴で

した。然しどういふ譯なのか神様より外には解るものもありませんが、田舎に餘り長く住んでゐたからか、それとも何か他に理由があつてか、兎に角あの女の胸の奥底には(若し胸に奥底といふ様なものがあるならば)一つの祕密な傷を有つてゐました。もつと詳しく云へば何者も癒すことの出來ない、あの女も私も名を附けることの出來ない様な小さな口を開いた傷を有つてゐました。その傷のあるといふことは勿論私は結婚してから後初めて推察したのです。これに就て私がどんなに煩悶しましたか……しかしどうすることも出來ませんでした！私は子供の時分一羽の小さい鳥を飼つて居りましたが、或時猫が飛び附いて爪をたてました。命はとりとめてよく看護をしてもやりましたが、しかし可哀相にそれつきり本當に治りはしませんでした。氣抜けがした様になつて瘦せ細つて歌はなくなりました……結局或晩鼠が籠の口から飛び込んで鳥の嘴を噛み切りました。そして到頭最期を遂げてしまひました。どんな猫が私の妻に爪をたてたかは解りませんが、兎に角あの女も恰度私の不幸な小鳥の様に氣拔がして、瘦せ細つて參りました。時々あの女はその苦しみから抜け出して日光と自由との中に、外の晴れ／＼とした空氣を吸はうと努めたらしいです。努めるには努めて見ても、又元の自分に復つて小さくなつたらしいのです。それでもあれは私を愛してゐました。幾度か私に向つて申しました、この上何にも望むところはないと——まあ、しかしその間に

もあれの目からは漸々と光が薄れて行きました。私はあの女の過去に何かあつたのかも知れないと思ひ、種々穿鑿せんさくもして見ました。けれども何にも出て来ませんでした。いやこの點は貴方の御判断に任せませう。獨創のある奇人風の人間ならば、その肩を聳かして一つ二つ太息をしたでせう。そして後は自分自身の生活を營むことにとりかゝつたでせう。ところが私は奇人でも何でもありませんから、梁や繩のことなんぞ考へ出しました。私の妻は全くの老嬢風で——ベートウエンだとか、夕方の散歩だとか、木犀草ももいさごだとか友達との文通だとか、アルバムだとか何だとか彼だとか云つて——他のどんな生活にも、別して一家の主婦たる生活へ心向けることが出来ませんでした。が、夕方ぼんやりと鬱ぎ込んで溜息を吐いたり、「曉の夢な破りそ」と歌つたりするなどは結婚した女に向かない様に思はれますね。

そんな風で兎も角三年の間は幸福に過ごしました。四年目にソフィヤはその初産で亡くなりました。そして妙な話ですが、私はあの女が私に子供を産んで呉れさうにない——この世界に新しい住民を加へさうにないまへかたと前方から思つておりました。私はあれを葬つた時のことを忘れないでゐます。それは春のことでした。私共の教會堂は小さな古い建物で、ついたては眞黒くなり、壁は剥げ落ち煉瓦の床は處々すれ窪んでおりました。そこには大きな古風な聖畫が合唱席の兩側に懸つておりました。柩はこゝへ擔ぎ込まれて聖門の前の中程に置かれ、その

上を色の褪めた柩衣ひつぎかけで蔽はれ、その周りに二つの燭臺が置かれました。それから式が始まります。小さな鬚毛を頭の後ろに垂れた、緑色の布切れを低く腰に纏つた、老ぼれの役僧は經机の前に悲しげな聲でもぐぐとやつておりました。黄色な花の模様を置いたライラク色の袍衣かほりを著た親切相な、眼の悪い、同じ様に年寄りの導師は、自分の分と役僧の分と二人前のミサをあげました。すつかり開け放した窓の外には新しい若葉がさら／＼と動いて囁き交し、草の匂が彼方の墓場から流れて来る。蠟燭の赤い炎は春の日の輝かしい光に逢つて、青白く見えます。雀は教會堂の上に囀つて居り、始終圓屋根の下を飛び交ふ燕の鳴き聲も聞えます。金色な日光の中には、熱心に死人の爲めに祈る數人の百姓の鶯色の頭が幾度か上つたり下つたりしてゐます。そして細い青みがかつた流れをなして煙が香爐の穴から立昇ります。私は妻の死顔を睨にらと見ました。(註——露西亞では墓の中へ埋めてしまふまで棺に蓋をしないで置くのだ。)……あゝ！死さへも——死そのものも——あの女を自由にしなかつた、あの女の傷を癒やさなかつた。棺に入り乍らも矢張り、寛くわんがない様に同じく思ひ煩つたおづ／＼とした屈託した様子をしてゐる……私の胸は痛ましさいたましさに充たされました。あれは優しい愛すべき女でした。然し死んだのはあの女自身にとつて仕合だつたのです！

話手の方は赤くなり、その眼は曇つて來た。

『やつと私が』と彼は再び話し出した。『妻の亡くなつた後、私を押包んでゐた深い銷沈から浮き上つて來た時、所謂事業といふ奴に身を捧げようと決心しました。私は州の首府へ出かけて行つてお役人になりました。けれどもお役所の大きな部屋の中では私の頭が痛くなり、私の視力も弱り出しました。そこへ又いろいろ他の事件なども加つて來ましたので……私は役所を退きました。それからモスクワへ行き度いと思ひましたが、第一に金が無し、第二に……已にお話した通り私は諦めをつけて居りました。この諦めは突然に來た様でもあり、又突然に來たのでもない様です。精神上ではずつと前から自分自身といふものに諦めをつけて居たけれども、私の頭がまだくびきに繋がれることを欲しなかつたのです。私は私のおだやかな感情や謙遜へんくたつた考を、田舎の生活と幸福との影響であると思つてゐました！……一方では、初めのうち、私の學問や私の外國住ひや、その他いろいろ教育を受けてゐるといふことなどに驚かされた近所の人々凡てが、若い者といはず年寄といはず只に私に馴れ切つてしまつた丈けでなく、私を鼻であしらひ出し、私の云ふことに耳を假さず、話をするのにも最早餘計な敬語なんぞ使はなくなつて參りました。あゝさうです、お話をすることを忘れてゐました。結婚の後の初の年に私は文學界へのり出して見たいと思ひました。或雜誌へ一つの原稿をさへ送りました——私の記憶に間違がなければ一篇の物語とでもいふ様なものでした。と

ころがしばらくするとその編輯者から丁寧な手紙が參りました。いろいろ外のことも書いてあるうちにその人が云ふには、私は貴方に知識のあるといふことを否定し得ない、けれども貴方は何等の技倆がないと云はざるを得ない、そして技倆丈けが文學に必要なものである、とありました。も一つお話ししておきたいのは、私はモスクワから來た或若い男が——これも極く人の好い青年なのです——知事の家で、私を時勢に遅れた頭の古い淺薄な男だと云つたといふことを聞きました。しかし私の頑迷な盲目は矢張り續きました。私は自分から自分の顔に平手打を喰はすのが嫌だつたのですな。ところが到頭或朝私の眼は開かれました。それはかういふ具合にです。この地方の巡査部長が私の處へやつて來ました。私の地内の崩れかゝつた橋に注意を促しました。私はそれを修繕すべき一文の金も有たないのです。干物を肴にウオッカを一杯やつた後この丁寧な警官は父親の様な態度で私の不注意を責め乍ら、私の地位に同情して何かがらくたを使つて百姓共に橋を繕はしたらよからうとすゝめました。彼は煙草に火をつけて來るべき選舉に就て話を始めました。當時この州の都督たるべき名譽ある候補者となつてゐたのは、オルバッサノフといつて騒々しい淺薄なお負けに賄賂などをとる男でした。その上彼は財産から云つても門閥もんぼつからいつても大した男ではありませんでした。私は何氣なく彼に關して私の意見を述べました。私はまだしも自分の方がオルバ

ツサノフ氏より上だと申しました。巡查部長は私の顔を見て穏やかに私の肩を叩き乍ら笑ひ乍ら云ひました。「いや、ワシリイ・ワシリエギツチさん、貴方にしろ私にしろそんな風に人の批評をしちやなりませんよ——我々がどれだけの人間かといふことを考へて見れば。ねえ矢張り靴屋はどこまでも靴屋で通しますさ」「ぢや改めて伺ひ度い」と私はむつとして聞き返しました。「私とオルバツサノフ氏との間にどんな違があります？」巡查部長は口からパイプをとつて眼を圓くして出し抜けに笑ひ出した。「こいつ面白い」と彼は遂に頬つべたに涙まで流し乍ら云つた。「随分冗談を仰しやるんですね！……いや貴方も却々面白い人だ！」さうして彼は折々臆でもつて私の脇腹をこづき乍ら歸る迄止め度なく笑つて笑ひ通した。彼は到頭行つてしまひました。これでもう十分でした。これが最後の一滴でした。私の盃はもう一杯になつて了ひました。私は幾度か部屋の中を歩き廻つた、鏡の前に突つ立つた、途方に暮れた私の顔を久しく眺めた、ゆる／＼と舌を出して頭を振り乍ら苦笑をしました。今まで光を掩うてゐた曇は私の眼から落ちました。私ははつきりと、鏡にうつした私自身の顔よりもはつきりと自分と云ふものを見ました。あゝ私はどんなに淺薄な下らない價値のない獨創のない人間だつたのでせう！」

彼は言葉を切つた。

『ヴォルテールの悲劇の中にこんなのがありましたな』と彼は疲れた様な調子で話し續けた。『或男が不幸の極限に達したことを喜ぶといふのです。私の運命に悲劇的なところはちつともありませんけれど、それでも何かしらそれに近い様なものを經驗したとは思ひます。私は冷たい失望の苦い悦びを知りました。私は床に横はり乍ら朝の間中、靜かに私の生れた時と人を呪咀するのがどんなに甘味のある事であるかを感じました。私は一時に諦めをつける譯に行きませんでした。實際それは貴方御自身の身の上に引き較べて考へて見て下さい。私は田舎に居て一文なしの厭な身の上になりました。自分の土地を始末することも出来ずお役人に成ることも出来ず、文學界にのり出すことも出来ず、何一つ私は出来ない。私は近所の者ともつきあひたくなし、書物も嫌ひになる。捲毛を振り立て、熱病の様に「人生」といふ言葉を繰返す胸の悪くなる様な病的にセンチメンタルな若い婦人達も、私が駄法螺やお喋りを止めて以來といふもの全然私の興味を惹かない。さりとて私は全くの孤獨にも耐へ切れない……私は始めました——一體何を始めたと思ひます？——私はぶら／＼と近所の人達を訪ね廻ることを始めたのです。自卑の底に沈み切つたかの様に我からあらゆる種類の輕視を身に受ける者となりました。もう食卓で給仕をして呉れる者もなくなりました。横柄な冷やかな態度で迎へられ、遂には全然頓著されなくなりました。私は世間話の仲間に入られて貰へ

五二六
なくなりました。私はモスクワに居た時分私の足の塵をも舐め、私の外套の襟にキスもしかねない程私を有難がつてゐた間拔な話手に、食堂の隅つこから何時も態々賛成を表してやりました……こんな事をして皮肉の苦い満足を感じてゐたと信ずることさへも出来ませんでした……いや、まつたくのところ孤獨の中に入つてゐては、どんな種類の皮肉が味はへるものでせう？ だまあこんな具合にして幾年か生活し続けてゐました、そして今でも矢張りこんな具合にしてやつてゐるのです。』

『こりあどうも酷い』と次の部屋からカンダグリッヒンの眠むさうな聲が聞えた。『なんて馬鹿だらう？——夜中喋りつゞけるなんて。』

話手は早速夜具の下へもぐり込んで、おどく外を覗きながら私に警戒する様に指を上げて見せた。

『叱つ、叱つ——叱つ』と彼は嚇いた。そして宛らカンダグリッヒンの聲がした方へお詫びのお辭儀でもしたかのように、彼は恭しく云つた。『はいくどうも済みません……あの男も眠ていゝんです。眠かしてやらなきやなりません』と彼は再び小聲で話し續けた。『あの男も元氣を恢復しなければなりません——ねえ、明日の食事を同じ味で食べる爲めにでも。我我はあの男の邪魔をする権利はありません。それに私は申し上げ度いと思つた丈けのことは

皆な申し上げた様に思ひます。貴方も吃度お睡いでせう、お寝みなさい。』

彼は出し抜けに向うへむいて枕に頭を埋めた。

『せめて貴方の』と私は尋ねた。『お名前丈けでも伺ひ度いと……』

彼は直ぐに頭を上げた。

『いや、それ丈けはどうか！』と彼は私の言葉を遮つた。『私の名前許りは私にも誰にも尋ねて下さるな。只運命に呪はれたワシリ！ワシリヰヰチといふ、知らない男として御記憶に止めて置いて下さい。それに私は獨創のない人間として一個獨得の名前を持つ丈けの價値がありませんから……それでも何にか名前を附けたいとおつしやるならば、かういつて下さい……シチグリ地方のハムレットと云つて下さい。どの地方にでもこんなハムレットはさらにあります。只他のハムレットには貴方がお會ひにならなかつた丈けのことでせう……ちやお休みなさい。』

彼は再び鳥の羽の寢床にもぐり込んだ。次の朝人が来て私を起した時、彼は最早部屋にゐなかつた。彼は夜の明ける前に去つてゐたのである。

チェルトップ・ハノフとネドビュスキン

夏の或暑い日に、私は馬車に乗つて獵から歸るところであつた。イェルモライは私の傍に坐つて居眠りをしたり、鼻の邊を掻いたりしてゐた。同じ様に眠つてゐる犬は命のないものか、なんぞの様に我々の足許にゆすられてゐた。馭者は鞭でもつて馬にたかる虻を拂ひ續けてゐた。白っぽい埃は軽い雲の様に馬車の後から揚つた。路は轍の跡が一杯についてゐる。そして車は小枝に引つかゝり出した。イェルモライは急に立上つて四邊を見廻した……『やあ！この邊には松鷄らうてうがゐるに違ひない。出て見ませう。』と彼は云つた。我々は馬車を止めて茂みの中へ入つて行つた。私の犬は一群の鳥を追ひ出した。私は一發放して玉を込めかへようとしてゐた。すると出し抜けにがさくといふ音が私の後ろに高く聞えて。馬に乗つた一人の男が両手で茂みを押し分け乍ら私の方へやつて來た。『え……一寸お尋ねしますが』と彼は横柄な調子で云ひ出した。『何の権利があつて貴方は——え——こゝでお撃ちになりませんか？』この見知らない男は早口に引つたくる様に、鼻にかゝる様な聲で云つた。私は彼の顔を見た。生れてこの方、これに似た様な何物も見ることがない。親愛なる讀者諸君よ、試みに想像して御覽なさい——麻色の髪をした脊の低い男で、少し仰向いた赤い鼻と、長い赤い口髭とを有つてゐる。頂上に眞紅の布切きりのついた、尖つた波斯帽が、前のきはまですつと額を蔽うてゐる。彼の著物は汚らしい黄色な高架索風の上衣で、胸には黒い天鷲絨のケース入のポケットがついてゐる。總ての縫目には色の變つた銀の組紐が飾られてゐる。肩には角笛が吊されてゐる。腰帯には短劍が吊されてゐる。骨張つた鼻の曲つた栗毛の馬は乗手の重さによろ／＼とよろめいてゐる。二匹の瘦せた鰐脚のセッター種種の犬は丁度馬の足許で駈け廻つてゐる。その顔といひ、眼附といひ、聲といひ、凡ての動作といひ、その男の全體が無法な鬪太さと、奔放不羈な自尊心とを表してゐる。彼の薄青い硝子の様な眼は酔つ拂ひの様にとろりとしてゐる。彼はぐつと反り身になつて、頬を膨らまして、鼻息を荒くして、身體中を震はせた——まる全で七面鳥のやうに威嚴を作らうとしたかの如く。彼はその問を繰返した。

『こゝで撃つてはいけないといふことを知らなかつたものですから。』と私は答へた。

『こゝは貴方』と彼は續けた。『私の地内です。』

『それでは早速出て行きませう。』

『ところで失禮ですが』と彼は言葉を續けた。『貴方は若しや貴族の方ではいらつしやいませ

んか？』

私は自分の名を名乗った。

『それならばどうぞ獵をなすつて下さい。私も貴族です。そして貴族の方にお役に立つのは非常に愉快であります……私の名はパンテレエ・チュルトップ・ハノフと申します。』彼はお辭儀をして大聲に呼び立て乍ら馬の頸に一鞭くれた。馬は頭を振つて後脚でつゝたつて、尻込みをして、そして犬の前脚を踏みつけた。犬は刺し通す様な悲鳴を上げた。チュルトップ・ハノフは煮えくり返る様に腹を立て、口から泡を出し乍ら拳骨で以て馬の耳の間をなぐりつけ、電よりも速く飛び下りて犬の前脚を見て、傷口に唾をはきかけ、鳴き聲をとめる爲めにその脇腹を一つ蹴った。それから馬の前髪をつかまへながらちかま鐙に足を置いた。馬は頭を伸ばし、尾を立て乍ら茂みの方へぢり／＼と退つた。彼はそれを追つかけ乍ら片足で飛上つた。遂に鞍へ乗つて狂人の様に鞭を浴せかけ、角笛を鳴らして、一足飛びに駈け出して行つた。私がチュルトップ・ハノフの思ひ掛けなき出現から落著きを恢復する隙もなく、又突然、殆んど何等の音をも立てず、四十許りの頑丈な男が小さな黒い馬に乗つて茂みから出て來た。彼は立止つて緑の皮帽子を脱いだ。そして弱々しい優しくした聲で、私が栗毛の馬に乗つた男を見なかつたかどうかを尋ねた。私はその男を見たと言へた。

『その人はどちらへ行きましたでせう？』彼は帽子を脱つたまゝで、同じ調子でつゞけた。

『あつちの方へ。』

『いやどうも有難うございました。』

彼は唇でキスをする様な音をさせ、兩脚で馬の腹を蹴り乍ら示された方角へと／＼とやつて行つた。私は彼の尖つた帽子が枝の後ろに隠れる迄彼の後を見送つた。この二度目の男は前のは様子がすつかり異つてゐる。彼のまりの様に圓々と肥え太つた顔は内氣な人の好い柔らかな性質を表してゐる。同じ様に圓く肥つた青い血管が縞をなしてゐる彼の鼻も、彼が酒色の徒たることを語つてゐる。頭の前の方には毛筋一本もなく、後ろの方に薄い紫色の毛が房の様にくつついてゐる。切れの長い小さな眼には、愛嬌のある瞬きが見せられ、赤い潤ひのある唇には甘い微笑が浮べられる。彼は立襟の眞鍮のボタンの、随分著古した、けれどもさつぱりした上衣を着てゐる。彼の布のズボンは高くくゞし上げられ、その太つたふくらはぎが長靴の黄ろい上端の上に見えてゐる。

『あれは誰だい？』と私はイェルモライに尋ねた。

『あれですか？ ティホン・イヴニツチ・ネドピュスキンです。チュルトップ・ハノフの家に居ります。』

『何をしてゐる、貧乏なかい？』

『金持ちやありません。だがチェルトップハノフだつて矢張り文無しですがね。』

『ぢや何だつて一緒に居るんだい？』

『そりや仲が良いもんですからね。どつちも片つ方丈けで居たことはありません……いやほんとうですよ——馬が蹄を立てれば蟹が鉄を出すといふ譯で……』

我々は茂みの外へ出た。すると二匹の獵犬が我々の直ぐ近くで吠え出した。そして大きな野兎がもう可成り伸びてゐた麥の中へ駆け込んだ。様々の犬が彼を追うて茂みから飛び出した。犬の跡からチェルトップハノフ自身も飛び出した。彼は呼びかけもせず犬をけしかけもせず、又掛聲をもしない。彼は息を切らしてハア／＼と云つてゐた。途切れ／＼の音聲が折々大きく開いた口から漏れる。彼は頭から飛び出しさうな眼をして飛びかゝつて行つて、氣の毒な馬に猛烈な鞭を呉れる。犬共は最少して野兎に追ひ附かうとする……野兎は一寸の間踏躡つて勢よく引返して、イェルモライの側を茂みの方へ矢の様に駆け抜けた……犬共は又もや追つかける。『出たぞ！ 出たぞ！』と疲れ切つた馬上の人が吃り／＼、やつと云ふ『おゝい出たぞ！』イェルモライは撃つた……傷いた野兎は滑かな枯草の上にもんどり打つて宙に跳ね上る。そして犬の齒に懸つてヒイ／＼と哀つばい聲を上げる。獵犬共がぐるりを取く。

チェルトップハノフは矢の様に馬から飛び下りて、短劍を引つ摺んで大股に犬共の間へ入り込み喰ひ裂かれた野兎を奪ひ取る。面中をしかめながら柄も通れと喉元に突刺した……突き刺してそれから『おい／＼』と大聲を上げ出した。ティホン・イヴニッチは茂みの端に現はれた。

『おゝい！ おゝい！ おゝい！』とチェルトップハノフが再び大聲を上げた。『おゝい！ おゝい！』と彼の仲間が靜かに繰返した。

『ですが君、夏の獵はするもんぢやありませんね。』と私は踏みにつられた麥を指し乍ら、チェルトップハノフへ言つた。

『なあに私の畑ですから。』とチェルトップハノフは喘ぎ／＼答へた。彼は兎の脚を切放して犬に投げてやり、その兎を鞍にぶら下げた。

『獵の規則からいへば、君には一發借りた譯ですな』と彼はイェルモライの方に向いて云つた。

『いや貴方には』彼は例の引たくる様な聲で云足した。『お禮を申さなければなりません。』

彼は馬に跨がつた。

『失禮ですが……御姓名を失念しましたので。』

私は再び私の名を名乗つた。

『お近づきになりましたして仕合です。折もありましたならば是非どうぞお立寄りを願ひ度いも

のです……だがティホン・イヴニッチ、フオムカはどうしたらう？」と、彼は焦れ氣味でつゞけた。「鬼を追つて來なかつたんだね。」

『馬がへたばつちまつたんで。』とティホン・イヴニッチは微笑し乍ら答へた。

『へたばつた！ オルパッサンがへたばつちまつた？ ちよっ！……あいつ何處に居るんだ？』

『あの向うの森の後に。』

チュルトップハノフは馬の鼻面に鞭を呉れて、一目散に駈け出した。ティホン・イヴニッチは二度私に——一度は自分の爲めに、一度は仲間の爲めに——お辭儀した。そして再び茂みへ早足に馬を乗り入れた。

この二人の人物は鋭く私の好奇心を呼覺した。抑もかくも異つた二人の人間を何ものがさきがたい友情の紐に結び附けたであらう？ 私は色々と空鑿しだした。次に述べるのが私の得た所のものである。

パンテレ・エ・エレミッチ・チュルトップハノフは近所界限から危険な氣狂ひ染みた男で恐ろしく高慢ちきな喧嘩好きな人物であると評判されてゐた。ほんの一寸の間軍隊へ入つたが、その長官共と『もんちやく』を起して役を退いた——普通何の地位でもないと思はれる位の

少尉の儘で。彼の家筋は中々古く曾ては富裕なものであつた。先祖等は山家風に豪奢な暮らしをしてゐた。即ち彼等は招く招かぬに論なく凡てのものを歡迎して、閉口する迄御馳走してお客の馭者共にも馬にやる様にといふのでどんく燕麥をやり、音楽者や、歌うたひや、道化師や、犬なども抱へて置いた。お祭の日には酒やビールを百姓共にふるまひ、冬になれば自分の馬に丈夫な古風な馬車を牽かしてモスクワへ出た。時とすると自分の家に出來たもの丈けで一文なしに數ヶ月間を暮らして行つた。この獵地がパンテレ・エ・エレミッチの父の手に入つた時分には大分情けない状態になつてゐた。彼は又彼で随分だらしなく暮して行つたので、彼の死んだ時一人息子のパンテレエの手に残されたのは男三十五人女七十六人のついで、それも抵當に入つたベズソノヴォの小村と、コロプロドヅの荒野にある二十八エーカー半の役にも立たぬ土地と丈けであつた。この地面についてゐる家奴（ハウスサーフ）のことは、父の遺言狀の内にも見出されなかつた。實を云ふと、この亡くなつた父は随分妙な身代の潰し方をした。『遣りくり上手』が失敗のもとだつた。彼の考に依れば、貴族は商人や町人や彼の所謂さういつた種類の『泥棒共』と係り合つてはいけない。彼は自分の地内にありとあらゆる商賣の店を開かした。『體裁がよくつて値が安い』と彼はいふのが癖だつた。『これが遣り繰りト手といふものよ！』彼はこんな不運な考を一生捨てなかつた。實にこれが彼の破滅に原因となつ

たのである。けれどもどんな悦びをそれが彼に與へたことよ！ 彼は一寸した出來心をでも満足させずには置けなかつた。色んな氣紛れのあつたうちにも、彼は曾て自分の好み通りに非常に大きな自家用の馬車を拵へたが、村中總出で手傳つて、持馬のこらず引き出さして駈けて見たけれども、動き出すや否や直ぐ坂になつてゐる處で引つくり返つて粉々に壞れてしまつた。エレメエルキッチ（パンテレエの父の名はエレメエルキッチといつた）は丘の中腹に一つの記念碑を建てさしたが、そんなことをしても一向氣恥しいとも思はなかつた。彼は又建築家の手を借らないで、教會堂を建て、見ようといふ——勿論自分一人で——結構なことを思ひ附いた。彼は煉瓦を造るといふので、森を一つすつかり燃やして、縣會議事堂の様な途方もない大きな土臺を築いて四方の壁を拵へて、最後に圓天井を張り出した。すると圓天井が崩れ落ちた。彼はやり直しをした——圓天井は再び崩れた。彼は三度やり直した——圓天井は三度崩れ落ちた。人の好いエレメエルキッチも少々考へ出した。何か碌でもないものがゐるんだと彼は考へた……何か妖婆の様なもの（が）が邪魔をしてゐるに違ひない……といふので、彼は早速村中の婆さん達残らずを引つぱたくようにふれを出した。村の者は婆さん達をひつぱりたい。けれどもそんなにしても圓天井はあがらなかつた。その内彼は新しい設計で百姓家を建て直し始めた。これも皆な例の『遣り繰り上手』から割り出した仕事である。

彼は三軒のうちの三角形にとつて真中に一本の柱をおつ立て、それに彩色をした烏籠と旗とをくゝりつけた。毎日々々彼は何か新しい氣紛れを思ひ附いた。或時は牛蒡のスープを拵へ又或時は下僕共に帽子を拵へてやるといふので馬の尻尾を切つた。又或時は麻の代りにいんぐさ蓴草を使はうとしたり、豚に茸を食はさうとしたり……彼は曾て「モスクワ新報」でハルコフの地主の一人フリヤクフルビオルスキーといふ男の書いた『農夫の幸福に對する道德の意義』といふ論説を読んだ。そして次の日彼はこの地内の百姓残らずにこのハルコフの地主の論説を早速誦する様にといふふれを出した。百姓共はその論説を読んだ。主人は彼等が何ごとを書いてあるのか分つたかと尋ねた。差配役は屹度分つたでせうと答へた。丁度その頃彼は秩序を保つためと、經濟上の利益になるといふ考とで、その百姓共残らずに番號をつけられ、各々がその番號を襟に縫ひつけられる様にといひ附けた。御主人に出逢つた場合各々が『何番でございます？』と名乗りを上げねばならなかつた。すると御主人は優しく、『あゝさうかよし／＼』と答へることになつてゐた。

ところでこんな秩序もたち、遣り繰りも巧かつたに係らず、我がエレメエルキッチはだんだんと苦しい地位に落ち込んで行つた。最初のうちは自分の村を抵當に入れたが、やがてそれは賣られて了つた。先祖傳來の家や村も遣りかけの教會堂と共に到頭政府の手で競賣に

附せられた。併し仕合とそれはエレメエルキッチの存生中のことでなく、彼が死んでから二週間経つてからであつた——彼は到底かうした打撃に耐へられなかつたであらう——彼は自分の家で自分の寢床に、親戚故舊に取巻かれて、かゝりのお醫者にかゝりながら死ぬことが出来た。しかし乍ら氣の毒なパンテレエには、ベズゾノヴォの外の何物も残されなかつた。

パンテレエは彼が未だ軍隊にゐた間に前に述べた『もんちやく』の眞最中に父の病氣を聞いた。彼はやつと十九になつたばかりであつた。極く幼少な時分から彼は父の家を離れた事がなく、甚だお人好しの少々足りないおつかさんのバッシリッサ・バッシリエヅナの手で、うんと我儘に甘やかされて大きくなつた。彼女は自分の手一つで息子の教育を引受けた。エレメエルキッチはその經濟上の紛擾に没頭してゐたので、外の事などを考へる隙がなかつた。尤も只一度彼はその息子がアルファベットの一字を發音し損ねたといふので、自ら手を下して罰したことがある。しかし乍らエレメエルキッチはその日甚しい打撃を受けてゐたのである。即ち彼の一番大切な犬が木にぶつつけて殺されてゐたのである。バッシリッサ・バッシリエヅナがパンテレエの教育に關してなしたる努力は頼りにやきもきましたといふより以上に出なかつた。彼女は額に汗を流して一人の家庭教師を頼んだのが、ビルコッフといふアルサス生れの退職軍人で、彼女は死ぬ日までこの人の前に木の葉の様に震へてゐたものである。『若しあの

人が』と彼女は考へた。『私達を見放したら——もうそれつきりだ！ さうなつたらどうしよう！ どうして他の先生を見附けられよう？ 本當にどんなに骨を折つて私がこの人を他家のうちからとつて來たことか！』さてビルコッフは素速い男で自分が二つなきものに思はれてゐることを早速見て取つた。彼は魚が水を飲む様に酒を飲んで、朝から晩まで寢通した。パンテレエはその『學業』を仕上げてから軍隊へ入つた。バッシリッサ・バッシリエヅナは最早この世にゐなかつた。彼女はその重大な事件の六ヶ月前に、物に襲はれて亡くなつた。彼女は熊に乗つた白衣の姿を夢に見たのである。エレメエルキッチも程なくつれ合ひの後を追つた。

父の病氣と聞くや否や、パンテレエは大急ぎで駆けつけたが遂に死目に會はなかつた。この孝行息子が全く思ひがけなく財産家の世繼から只の貧乏人に變つてゐるのを見出した時、その驚きはどんなであつたか！ かういふ甚しい轉變に逢つて平氣でゐられるものは幾人もない。パンテレエもそれ以來六ヶしい人間になり、人間嫌ひになつた。甘やかされて怒りつぽく育つてゐたとは云へ、正直な寛大な人の好い男であつたのが、高慢ちきになり、喧嘩好きになつた。彼は近所の人々とのつきあひを止めた——彼は金持の所へ尋ねて行くのには、氣位が高過ぎ、又貧乏人は輕蔑してゐたからである——そして誰に對してもその筋のお役人な

どに對してすらも恐ろしく尊大に振舞つた。『俺は立派な家柄から出てゐるんだ。』と口癖に彼は云ふ。或時などは帽子を被つた儘で部屋へ入つて来たといふので、警部を射撃しようとした。勿論お役人はお役人の方で復讐した。そして機會ある毎にその勢力を思ひ知らせようとした。それでも矢張り彼等はどちらかと云へばパンテレエを怖れてゐた。何しろあゝいふ無法な男で二言目には直ぐナイフで決闘しよう云ひ出すからである。一寸した口答にでもチュルトップハノフの眼はぎらつき出し、その聲はいきり立つて来る……『あゝ、えゝ——えゝ——えゝ』と彼が吃り出して来る。『畜生め！』……かうなるともう何者も彼を止めることが出来ない。その上彼は汚點のない性格で、聊かの後暗いやうな事にも手を出さなかつた。勿論誰一人として彼を訪ねて来ない……それでも彼は人が善く、彼一流の偉大な心をすら有つてゐた。不正だとか抑壓だとか云ふやうなことは、見知らぬ人の上に加へられるのも我慢が出来なかつた。彼はその百姓共の爲めとなれば巖の様に突立つた。『何だ？』と彼は自分で自分の頭を猛烈に打叩きながら言ふ。『俺の百姓共に手出しをする、俺の？ 俺はチュルトップハノフではないか？ 若しこの俺が……』

ティホン・イヴニッチ・ネドピュスキンは、パンテレエ・エレミッチの様に自分の系圖を誇ることが出来なかつた。彼の父は小地主階級の出で四十年の勤めをした後でやつと貴族の身分になれた。父のネドピュスキン氏は個人的の憎しみに近い様なしつこさをもつて不幸に追ひ苦しめられるそれらの人々であつた。生れ落ちるとから最後の息を引きとるまで至六十年間といふもの、この氣の毒な人は資力の乏しい人々に付きものゝ、あらゆる困難や、災厄や、窮迫と闘つてゐた。彼は氷の下の魚の様に奮闘した——何時も十分なる食物も睡眠もとることなしに、そしてびく／＼して、くよく／＼して、精根の盡きる程に自分を摺り減らして、一錢一厘のことにも屈託して、純粹の『無邪氣で』勤めに服して、最後には自分の爲め子供等の爲めに得たいと思つた一塊りのひからびたパンすらも、易々と手に入れることも出来ず、屋根裏か穴藏の中に死んでしまつた。運命は野兎を追ふ様に彼を追ひ立てたのである。

彼は人の好い正直な男であつた——もとより十コベックから二留位ニイッの賄賂をとるには取つただけれども。ネドピュスキンには瘦せた肺病らしい女房があつた。子供等もあるには有つたが、仕合はせと彼等はティホン並びに『町家の美人』と綽名のついた娘のミトロドラとを除き、いづれも早く亡くなつてしまつた。その娘は種々の痛ましく且つ滑稽な事件に遇つた後、非職の辯護士と結婚した。ネドピュスキン氏は死ぬ前に息子のティホンの爲に或るお役所の雇書記といふ地位を拵へてやつた。けれどもティホンは父が死んだのち間もなくその職を辭した。彼等の絶え間なき心配や、胸を裂く様な寒さと飢とに對する藻掻きや、母の氣

を使ひ過ぎた銷沈や、父の絶望的な努力や、宿屋の女主人や店の主人の口汚き催促や——彼等の生活の果しなき日々の苦しみが、ティホンの心に誇大して物を怖れる傾向を養ひ育てた。彼は上役の姿をちらと見た許りでも、捕へられた鳥の如く震へ上つて気が遠くなると云ふ程であつた。そんな具合で役所を退いたのである。自然といふ奴はその無頓著からか、或はその皮肉からか、人々の上に彼等の資力や、社會上地位と全く一致しない様なあらゆる種類の能力と傾向とを植ゑ附ける。即ち自然はその特別の心使ひと愛とを以つて、貧乏な書記の息子なるティホンを、敏感な懶惰な、ものやはらかな、感動し易い人間に作り上げた——匂ひや味ひの非常にデリケートな感覺をつよくされて、専ら享樂に適當した人間に作り上げた……自然はかういふ具合に作り上げ、しかも念入りに仕上げをして、それからその仕上げのかゝつた人間を酔つばいキャベツと、腐つた魚とでやつて行かさうとしたのである！ さて見よ！ その人間は兎も角もやつて行つて『生涯』といふものを始めた。それから一場の滑稽が持ち上つた。あんなにもむごたらしく父のネドピュスキンを苦しめた運命は、その息子にも取りついた。運命は彼等を好きであつたとしても思はなければなるまい。ところで運命は別の生き方でティホンをとり扱つた。運命はティホンを苦しめなかつた。運命はティホンを弄んだ。運命は彼を驅つて自暴自棄に驅ることもせず、飢渴といふ見苦しい苦しみを紙めさせもしなかつた。其代り露西亞中を一方の端から他の端へ、一つのそれからそれへと卑しい滑稽な地位を移り歩かせた。運命は或時は彼を口八ケましい短氣な女主人の家に家令を勤めさせ、又或時は金持のけちくした商人の家に氣の利かない食客とならせ、それから頭の髪をイギリス風に刈つたぎよろく眼の紳士に祕書役を勤めさせ、それから或る愛犬家の處に料理番ともたいこもち幫間ともつかない様な役に就かした……一口に云へば運命は可哀相なティホンを驅つて寄生生活といふ苦い毒盃を一滴々々澱まで飲み盡させたのである。彼はその男盛りを懶け者の主人の面白くもない毒舌や悪巫山戯まじの的になつて過ごした。多勢のお客等がティホンを愚弄してその巫山戯氣を満足させた後、『もう行つてもいい』といはれて、只一人自分の部屋へ歸つて來た時、如何に屢々彼がその恥辱を以て面を赤らめ、絶望の冷たい涙を目に浮べ乍ら誓つたことぞ——こつそりと脱け出して町へ行つて運試しをしよう、番頭か何かの一寸した地位なりとも見出さう、でなければいつそ町中に飢ゑ死をしようといふことを！ 併し第一、神は性格の強さといふものを彼に與へなかつた。第二に彼の臆病が彼を邪魔をした。第三に如何にして彼は自分みづかから地位を見附けよう？ 誰に彼が頼めよう？ 『とても自分の手に這入りさうにない』と不幸な男は床の上に疲れ切つて寝返りをうち乍ら呟いた。『とても自分の手に這入りさうにない！』さて次の日、彼は再び同じ淺ましい生活を始める。その上自然はあれ程

五三三

氣を付けて呉れたにも係らず、道化者の商賣になくて適はない様な才分や資格をまるつきり授けてくれなかつたので、彼の地位は一層みじめなものであつた。例を擧げて見れば、彼は熊の皮の上衣を裏返しに著て、へとくになるまで踊ることが出来なかつた。又耳の傍でびしびしと鞭の鳴るのを聞き乍ら、輕口を云つたり、道化染みた眞似をしたりすることが出来なかつた。素裸すつぱだかにされて氷點以下二十度の寒さへ出された時は、風邪かぜもひいた。彼の胃の腑はらはインキや其他の汚いものと混つたブランドーを消化する事が出来ず、又細く刻んで酢すをかけた毒茸などを消化することも出来なかつた。その後ティホンがどうなつたか解らなかつたであらう——若しも彼の最後の保護者なる大分儲けた請負師といふのが、上機嫌こまかのときその遺言狀に次の様なことを書き入れようと思ひ附かなかつたならば——

『又ジョゾー（即ちティホン）ネドピュスキンへは、永久の所有として私の正當に獲得したるベズゼレンディエフカの村、並びにその附屬物一切を、彼と彼の子孫とへ殘して置く。』

それから數日経つてこの保護者は鰈鮫のスープを鱈腹飲んだのち、卒中の發作でやられてしまつた。大變な騒ぎが起つた。お役人がやつて来て、財産に封印をした。

親類の伯父がやつて来た。遺言狀が開かれて讀まれた。さうして人々はネドピュスキンを、

呼んだ。ネドピュスキンはやつて来た。この連中の大部分はティホン・イヴニッチの彼の保護者の家に於ける役目の性質を知つてゐた。彼は耳を聳するやうな叫び聲と、反語的な祝辭とで挨拶された。『地主様だ。新しい地主様だぞ！』と。他の遺産相続人等は叫んだ。『なる程、こりあ全く』と頓智かいまやくと諧謔かいまやくとで名の聞えた一人が口を挟んだ。『成る程、こりあ全くさうだ……こいつは本當に……正真正銘の……歴然れつきとした相続人だね！』一同はどつと笑ひ出した。暫くの間ネドピュスキンは自分の幸運を信ずることが出来なかつた。人々は彼に遺言狀を示した。彼は顔を赤くし、眼を閉ぢ、絶望した様な身振ひをもつてはらくと涙を流した。連中のくすくす笑ひは、ガヤ／＼といふ怒鳴聲に變つた。ベズゼレンディエフカの村は只二十二人の農奴家奴から成り立つてゐたので、何人もその損失を深く惜しみはしなかつた。それならばどうしてそれを面白事にしないであろうか？ ペテルブルグ生れの相続人の一人で、希臘式の鼻と、威嚴のある顔立とをしたロスティスラフ・アダミツ・シュトッベルといふ重要な地位を占めてゐる男は、遂にネドピュスキンの傍へ寄り、横柄に彼を見下した。『私の見る限りでは』と彼は輕蔑した様な澄した様子で云つた。『貴方は故人フヨドル・フヨドリッチの氣晴らしにお盡しになつて戴くといふので、此の家にいらしつたでせうな？』ペテルブルグ生れのその紳士は、堪らないほど上品振つた氣取つた六ヶしい文句でもつてかく云つた。ネドピュス

キンは氣が立つて居り、せき込んでゐたので此の知らない紳士の言葉なんぞ耳に入らなかつた。けれども他の人々は皆一時におとなしくした。頓才先生は甚だ大目に見た様な微笑をする。シュトッペル氏は手を擦つて前の問を繰り返した。ネドピュスキンは呆れた様に眼を擧げ口を開いた。ロスティスラフ・アダミッチはあてつけがましく顔を擧げた。

『お目出度い、ねえ君、お目出度いよ』と彼は續けた。『そりや君、そんな具合にして毎日のパンにありつかうとは誰だつて思ふまいよ。だが *de gustibus non est disputandum*、でつまり各々の好き／＼だらうぢやないか……ねえ？』

誰か後ろの方で早口な併し行儀正しい言葉で賛同の意を表したものがあつた。

『一體君には』とシュトッペル氏は連中全體の笑聲に、ぐつと調子づいて云ひつゞけた。『どんな特別の腕があつてこんな好い運が向いて來たんだね？ いや、はにかむには及ばないよ、われわれは皆んな云はゞ *en famille*（一家族）なんだから。ねえ諸君、こゝにゐるのはみんな *en famille* ぢやないですか？』

ロスティスラフ・アダミッチがこの問を向けた親類の男は、相憎とフランス語を知らなかつた。それ故彼は微かな賞賛の喉聲を出すに止めて置いた。併し今一人の親類で額に黄ろい斑点のある若者は、急いで『さうです、さうです。』と調子を合せた。

『多分』とシュトッペル氏は再び云ひ出した。『君は足を上へ揚げて手でもつて歩くことも出来るせうね？』

ネドピュスキンは苦しげに四邊を見廻した。どの顔もどの顔も嘲るやうな笑ひを見せ、どの眼もどの眼も可笑しさに涙ぐんでゐた。

『それから多分君は鶏の様に、ときをつくる事が出来るでせうね？』

聲高な大笑が四方から起つたが、程なく又奇體に引きしめられて、しんとした。

『それから君は鼻の上で……』

『止せ！』と聲高な荒い聲が突然ロスティスラフ・アダミッチを遮つた。『君はこの弱い者虐めをして恥ぢないのか！』

誰も彼も四邊を見た。戸口にチュルトッブ・ハノフが立つてゐる。死んだ請負師に遠縁ながら親戚といふので彼もまた親類會議に招待を受けてゐた。遺言狀を讀む間中彼は何時もの通り傲然として他の連中から遠ざかつてゐたのである。

『止せ！』と彼は反り身になりながら繰り返した。

シュトッペル氏は急いで振り返つて見た。そしてみすばらしい身なりの、格別なものでもなささうな人間を見たので、小聲で傍の男に尋ねた。（用心は何時でもすべきものである）――

『あれは誰ですか？』

『チェルトップハノフといふ男で——格別大した奴ぢやありません。』と隣の男が彼の耳に囁いた。

ロステイスラフ・アダミッチは、極く横柄な様子をした。

『そんな餘計な指圖をする君は誰ですか？』と彼は輕蔑する様に眼瞼を垂れながら、鼻にかゝる聲で云つた。

『誰ですか承りたい！一體何處の魚だか？』

チェルトップハノフは火のついた火藥のやうに爆發した。怒りに息づまつた。

『ス——ス——ス！』と彼は憑きものゝした人間の様にやつてゐたが、やがて、忽ち雷の様に怒鳴り出した。『俺が誰だと？俺が誰だと？俺はパンテレエ・チェルトップハノフの血統正しい昔からの貴族だ。俺の先祖はツァールに仕へた。さういふ貴様こそ何者だ？』

ロステイスラフ・アダミッチは眞蒼になつて、たぢく／＼と後退りをした。彼はこんな猛烈な抵抗を豫期してゐなかつたのである。

『私は——私は——全くの魚で！』

チェルトップハノフは眞直ぐに突進んだ。シュトッベルは泡を食つて傍に逃げ出した。他の者

等は此のいきり立つた貴族の前へ飛び出して來た。

『決闘だ、直ぐに決闘だ、ハンケチだけの距離で！』猛り立つたパンテレエが叫んだ。『でなければ俺にあやま——れさうだあの男にも……』

『あやまつた方が宜い！』とシュトッベルの周りにゐる親類達は氣が氣でないので呟いた。『ああいふ狂人だから、いきなり君の喉をかつ切らないとも限らない！』

『濟まなかつた、濟まなかつた！知らなかつたものだから』とシュトッベルが吃り／＼云つた。『知らなかつたものだから……』

『それからあの男にもあやまれ！』と蟲の納まらないパンテレエがわめき立てた。

『君にも濟まなかつた。』とロステイスラフ・アダミッチは癩にでもかゝつたかの様に震へてゐたネドピュスキンの方へ向いて附け加へた。

チェルトップハノフは落著いた。彼はティフォン・イヴニッチの所へ行き、その手を取つてきつと四邊を見廻はしたが、誰一人彼に眼を合はせる者が無い。彼は深い沈黙の中を凱歌をあげながら部屋の外へ出た——法律上正當に認められるベズゼレンティエフカ村の新しき地主と共に。

其日以来彼等はずひにまた離れなかつた。(ベツゼレンティエフカの村はベズゾノヴォオから

たつた七哩しかない。ネドピュスキンの限りなき感謝の念は、やがて最も熱烈な尊敬になつて行つた。弱い、やさしい、そして幾分瑕瑾のないでもないティホンは、物を恐れない、非難すべきところのないパンテレエの前に、はいつくばはないで居なかつた。『容易な事ぢやない』と彼は折々自分獨りで考へた。『知事さまと話をしたり、まともにその面を見たりするのは！』

彼はパンテレエのえらいのに驚嘆し、力を極めて彼を賞揚し、彼を伶俐で學問のある、非凡な人と思つてゐた。なるほど、チュルトツプハノフの教育は御粗末な物乍ら、尙ほ且つティホンの教育に比べれば、立派な物と云へるに違ひない。チュルトツプハノフは實際、露西亞語で書いた物をあまり澤山讀んで居らず、佛蘭西語をもよくは知らなかつた——會つて或る露西亞人の家庭教師が、*Vous parlez français Monsieur ?* と問ふたのに對して、*Je ne comprend* と答へ、一寸考へたあとで *oui* を付け加へたほどである。が、とにかく、彼はヴォルテルと云ふ人が生存してゐたことや、大さう才氣のある作者であつたことや、普魯西のフリードリッヒ大王が偉大なる軍司令官として知られてゐたことを知つてゐた。露西亞の文學者の中では彼はデルジャギンを尊敬した。しかし好きなのはマルリンスキイで、その一番善い犬にアムマラット・ベックと云ふ名をつけた……

この二人に始めて會つた後三四日して、私はパンテレエ・エレミツチに會ふためベズゾフの村へ出掛けた。彼の小さな家は、ずつと遠くの方からも見えた。それは村から半哩を距てた樹木のない處に、『山手』と呼ばれるところに、鷹が畑に下りたやうに立つてゐる。チュルトツプハノフの家といつては大きさの違つた四つの古い倒れかつた建物があるばかり——即ち主家に、既に、納屋に、湯殿とこれだけである。どの建物もそれ／＼に離れて立つてゐる。周囲の垣根も門も見えない。私の馭者は填りふさがつて殆んど見えなくなつた井戸の側で、當惑して馬をとどめた。納屋に近く、瘦せた毛を梳らない小犬がいく匹か、死んだ馬を食ひ裂いてゐた。恐らくはオルパッサンであつたらう。その犬の中の一つは、血のたれる鼻を擧げて、せわしなげに吠え立て、またもや露になつた肋骨に嚙りついた。馬の近くには十七歳ばかりの、膨れた、黄色つぼい面をした、コサックのやうな衣服を著た跣足の少年が立つてゐた。彼は自分の預つた犬を、責任のありげな様子をしながら見やつて、折々一番慾張りの奴に一鞭づつくれた。

『主人は御在宅かね！』と私は訖いた。

『どうだか！』と若者は答へた。『ノックして見たらいい。』

私は馬車から跳び出して、主家の階段の方へ行つた。

五四二

チルトップハノフ氏の住居はまことに不愉快な體裁を見せてゐる。梁は雨風に晒されて黒くなり、乾割れ、煙突は崩れ落ち、家の隅々は濕氣の爲めに色が變り、斜めに傾き、小さな埃だらけの青つぼい窓は、だらしくうちかさした屋根の中から何とも云へないメランユリックな様子をして覗いてゐる。年をとつた放浪者などの中によくかうした眼附で物を見るのである。私は戸を叩いた。誰も答へない。しかしとう／＼誰かの唸しい聲が聞える――

『エー、ビー、シー、おい馬鹿！』と唸れた聲が云つてゐる。『エー、ビー、シー、ディー……さうぢやない！ デー、イー、イー、イー……そら馬鹿！』

私は二度目を叩いた。

同じ聲が叫んだ。『お入り、どなた？』……

私は小さな何にもない玄關へ入つた。そして開け放した戸を押して、チルトップハノフその人を見た。脂染みた東洋風の寛衣を着て、寛いズボンをはいて、赤い頭巾を冠つて椅子にかけてゐた。彼は片手に小さいむく犬の顔を抱へながら、片手で丁度犬の鼻先へパンの片を差し出してゐる。

『や！』と彼は席を立たずに威厳をつくるひながら云つた。『よくいらつしやいました。どう

ぞお掛け下さい。今ヴェンゾールの奴にかゝつてゐますので……ティホン・イヴニッチ』と彼は聲を高め乍ら付け加へた。『おい、來ないか？ お客様だよ。』

『只今、只今』とティホン・イヴニッチは次の部屋から答へた。『マーシャさん、私の襟飾を出して下さい。』

チルトップハノフは、再びヴェンゾールの方へ向つて、パンの片を鼻の上へのせた。私は四邊を見廻した。長さの揃はない十三本の甚く乾反つた広いテーブルと、摺れ窪んだ四つの蘭で編んだ椅子との外部屋の中には、如何なる種類の家具もない。幾年か昔、白く塗られた青い星形の模様をおいた壁も、方々が剥げかゝつてゐる。窓と窓の間には大きな赤い木の框に入つた鏡が、曇つた上に罅割れてゐる。部屋の隅にはパイプ掛と鐵砲とが立てゝある。天井からは大きな蜘蛛の網がぶら下つてゐる。

『エー、ビー、シー、ディー』とチルトップハノフは悠り繰返したが、そのうち不意に猛烈に怒鳴りつけた。『イー！ イー！ イー！……何といふ間拔な畜生だ！……』

然し可哀相にむく犬は、只震へる許りで口を開けやうとしなない。彼は氣づかはずに尻尾を振り乍ら、面に皺を寄せ乍ら、仕方がないといふ様な様子で眼をしばたゞき、さうして『いかにも貴方様の御意通りで！』とでもいふ様に見える。

五四三

『さあ、食つた！ さあやるんだ！』と根詰めには主人は繰返した。

『ちどみ上つてるんでせう。』と私は口を入れた。

『ぢや、おつ拂つちまひませう！』

彼は一蹴り蹴り上げた。犬は可哀相にそつと起き上つて、鼻のパン片を振り落して、恰度爪立したやうに、甚くしよげかへり乍ら、玄關の方へ行つてしまつた。まことに無理もない話である——初めて訪ねて来たお客の前であんな目に合はせるのだから！

次の部屋へ通ふ戸口が静かにきしつた。そしてネドピュスキン氏が愛想よく、お辭儀をし微笑をしながら這入つて来た。

私は立上つてお辭儀をした。

『どうぞその儘になすつて、どうぞその儘に。』と彼は舌つたるく言つた。

我々は腰を下ろした。チュルトッブハノフは次の部屋へ行つた。

『貴方はもうしばらくこの邊に御滞在ですか？』とネドピュスキンは小聲で云ひ出した——
 慎み深く手の中へ咳拂ひをしながら、恭しくといふ心から唇の前に指を覆ふ様にしながら。

『先日やつて来たのです。』

『左様でございますか。』

我々はしばらくの間黙つてゐた。

『今日はまことに結構なお天気で』とネドピュスキンは再び始めた。そして私が何かこの天氣に責任でもあつたかのやうに有難さうに私を見た。『作の方は素晴らしくよささうで御座いますな。』

私は同感だといふ様に點頭うなづいた。我々は再び黙つてゐた。

『パンテレエ・エレミッチさんが昨日兎を二匹お捕りになりましたな』とネドピュスキンは復びやつとの思ひでやり出した——正しく會話をひきたせようと願つてゐるのである。『いや全く大きな奴で御座いましたよ。』

『チュルトッブハノフさんは好い犬をお持ちですか？』

『まことに素晴らしいのを！』とネドピュスキンは悦んで返辭をした。『どうしてもこの邊では一番の犬でございます。』(彼はずつと私の方へ乗り出して来た。『所でパンテレエ・エレミッチさんはよつほど豪い人でございます！ 何でも欲しいとさへお思ひになれば、只やうといふ考へをさへお出しになれば——直ぐにそれがその通りになるのです。まあ、何でもゼンマイ仕掛の様に行くんですな。パンテレエ・エレミッチさんは何と云つたつて……』

チュルトッブハノフが部屋へ這入つて来た。ネドピュスキンは、つこりして話を止めた。そ

して『あれを御覧になればお判りでせう』といった様に目で知らせた。我々は獵の話をしだした。

『私の犬をお目にかけてませうか？』とチュルトップハノフは私に尋ねた。そして返辭を待たずカルプを呼んだ。

一人の頑丈な若者が這入つて來た。緑の長い南京木綿の上衣を著、青いカラーを著け、紋章の這入つたボタンをはめてゐる。

『フォームカにさう云へ』とチュルトップハノフはぶつきらぼうに云つた。『アンマラットとサイガとを連れて來いつて、ちゃんとして置いてな、わかつたか？』

カルプは無作法に笑顔を作つて、譯のわからないことをいつて出て行つた。フォームカは、髪を撫でつけ、ボタンをしつかり拵めて、長靴を穿いて、犬を連れてやつて來た。禮儀から私はあの馬鹿な畜生共（一體にこの種類の犬は念入りの馬鹿である）を褒めそやした。チュルトップハノフはアンマラットの鼻の孔へ眞正面に唾を吐つかけた。けれどもそれはその犬にいさゝかの満足をも與へなかつたらしい。ネドピュスキンもアンマラットを後ろから撫でた。我々は再び無駄話を始めた。話をしてゐるうちに、チュルトップハノフはすつかり打解けて來た。そして最早威嚴をつくるふこともなく、鼻息を荒くすることもなかつた。彼の面は表情

が一變した。彼は私を見、ネドピュスキンの顔を見た……

『おい！』と彼は出し抜けに大聲を出した。『どうして彼女は一人でひつこんでるんだ？ マーシャ！ おい、マーシャこゝへ來い！』

何者かゞ次の部屋で動いたが何の答へもない。

『マーシャ！』とチュルトップハノフは優しく繰返した。『こつちへお出で。なかに、恥しがることはないよ。』

扉は靜かに開かれた。そして私は二十歳位の脊の高いすらりとした娘の姿を見た。淺黒いジブシイ式の顔で、黄褐色の眼で、髪は漆のやうに黒い。その大なき白い齒が圓く赤い唇の間に輝いた。彼女は白い衣服を著て、青いシヨールを金のブローチで喉のまはりにしつかりと止めて、その種族特有の肌目の細かな、しなやかに美しい腕を半ば隠してゐる。彼女は野の獸か何ぞの様な、おづくとした拙さで二足許り踏み出したが、びたりと立止つて下を向いた。『さあ、紹介しましょう』とパンテレエ・エレミッチが云つた。『妻ではありませんが、妻同様に見ていたどききたいのです。』

マーシャは一寸顔を赧らめてうろたへた様に微笑した。私は丁寧に辭儀をした。私は彼女を非常にチャーミングだと思つた。華やかな鷹の様な鼻に心持廣い透いて見える様な小鼻や

秀でた眉の勢の好い刷毛づかひや、青白い稍々肉の落ちた頬や——彼女の顔のあらゆる形が我が強いパッションと向う見ずな遣つ放しとを表はしてゐる。其髪を束ねた下から細い輝く髪の毛の二並びがしつかりした頸筋を生え下つてゐる——その力と健康とを思はせて。

彼女は窓際へ行つて腰を下ろした。私は彼女の迷惑を増させ度くなかつた。そこでチェルトップハノフと話をしだした。マーシヤは、そつと頸を振向けて、盗むやうに恥しげに素早く眼瞼の下から私の方を覗いて見出した。彼女の眼眸は蛇の舌かなんぞの様に閃いた。ネドピュスキンは其傍に腰をかけて、何かを其耳に囁いた。彼女は再び微笑した。彼女が微笑した時、彼女の鼻に心持皺がより、彼女の上唇が痙攣つて、猫か獅子かのやうな表情をその顔に與へた……

『は、あ、これは「手を觸るべからず」といふ方の代物だな。』と私は考へた——私の方でも彼女のたわやかな體附や、ふくらんだ胸や、はき／＼とした角の鋭い動作などを盗み視しながら。

『マーシヤ』とチェルトップハノフは尋ねた。『お客様に何かもてなしをしなきやなるまいぢやないか？』

『ジャムがありました。』と彼女は答へた。

『ぢやそのジャムをもつといで。それからウツカも序に。それからマーシヤ』と彼は彼女の後ろから大聲で呼ばはつた。『ギターも持つて来て呉れ。』

『ギターなんぞ何になさるんです？ 妾は歌なんか唄ひませんよ。』

『どうして？』

『歌ひたくないんですもの。』

『馬鹿な。やりたくなる時にはやり度くなる癖に……』

『え、何ですつて？』とマーシヤは直ぐに眉を寄せ乍ら尋ねた。

『頼まれ、ばやり度くなる癖にさ。』とチェルトップハノフは幾らかあわて氣味に云つた。

『まあ、あんなことを！』

彼女は出て行つた。が間もなくジャムとウツカとを持つて引返して来て、再び窓の傍に坐つた。額には一筋まだ残つてゐる。二つの眉は山蜂の觸角の様に、立つたり臥たりしてゐる……讀者諸君、諸君はあの山峰がどんなに意地の悪さうな顔をしてゐるか見たことがありますか？『こいつは一あれやつてくるな。』と私は思つた。會話はだれて來た。ネドピュスキンは全く口を噤んで強ひて笑顔を作つてゐる。チェルトップハノフは眞赤になつて息をはずませながら眼を見開いてゐる。私は暇乞をしようかと思つてゐた……するとマーシヤは立上つて

窓を開け放して、頭を突出して、そして大聲で通りすがりの百姓女に『アクションヤ!』と呼びかけた。百姓女はびくりとして、振り向かうとしたが滑つて堆肥の上にとざりと倒れた。マーシャは振り返つて面白さうに笑つた。チュルトップハノフも笑つた。ネドピュスキンは喜んで甲高い聲をした。こんな事で我々一同は再び元氣づいた。嵐は電光の一閃で過ぎ去つた……空気が再び晴れやかになつた。それから半時間許りといふもの誰もが自分自身を辨へなかつた。我々は全て子供の様にお喋りをしたり巫山戯たりした。マーシャは中でも一番はしやいでゐた。チュルトップハノフは寸時も彼女から眼を離し得なかつた。彼女の顔はより蒼白くなり、彼女の小鼻は大きくなり、彼女の眼は燃え立つと共に黒ずんで來た。それは野獸の遊び戯れてゐるやうであつた。ネドピュスキンは、家鴨の雌を追つかける雄の様にその短い太つた小さな脚で、跛を引き乍らマーシャの後を追つかけた。ベンゾールすらも玄關の方の隠れ場から這出して來て、一寸の間戸口に立つて我々の方を見てゐたが、不意に跳り上つて吠え出した。マーシャは次の部屋へ飛込んだ、ギターを引抱へて來て、肩からショールをかなり捨て、そくさと坐つて、頭を上げてジブシーの歌を歌ひ出した。彼女の聲は硝子の鈴を打つた時の様に震動し乍ら鳴り出した。それは炎々と燃え上つて、それから燃え落ちた……それは楽しさと痛ましさとで心を充たした……チュルトップハノフは踊り出した。ネドピュス

キンは足踏をしたり、拍子をととり乍らぶらぶらと振り動かしたりした。マーシャは火にくべた樺の木の皮の様に體中が震へてゐた。彼女の華やかな指先はギターの上を小鳥の様に飛び交ひ、彼女の淺黒い喉は二列になつた琥珀の首飾の下で靜かに高まつた。すると忽ち彼女は歌ひ止めて、ぐつたりした様に腰を下ろしたが、なほ無意識の様にギターを掻き鳴らしつゝけた。チュルトップハノフは矢張り立つてゐて、肩を動かしたり、一つ所でぐるぐると舞をしたりしてゐる。ネドピュスキンは支那人形の様に頭を振つてゐる。聽てマーシャは、再び體をしやんとさして頭を高く持上げながら、新しい狂熱をもつて歌ひ出した。するとチュルトップハノフは再び體を地びたに這ひつくばるほど屈めたり、天井まで飛び上つたりして、『もつと早く……』と叫び乍ら獨樂の様に廻り出した。

『もつと早く、もつと早く、もつと早く』とネドピュスキンは早口に聲を合はせた。

私とその晩ベズゾノヴァを辭し去つたのは、大分晩くなつてからのことだつた……

チェルトップハノフの最期

一

私が尋ねて行つてから二年の後、パンテレエ・エレミッチの苦しみ——彼の本當の苦しみが始まつた。失望や、災難や、不運やはあれより前にも経験してゐた。しかし乍ら以前はそれらのものに何の注意をも拂はなかつた。それらのものを切り抜けて來た。今度彼の上に落ちかゝつた第一の打撃は、彼にとつて最も堪へ難いものであつた。マーシヤが彼を捨てたのである。

あれほど居心地よげに見えた彼の家を捨てようといふ氣を、彼女に起させたのは何であるかよく解らない。チェルトップハノフは最期の日まで、ヤッフといふ近くの槍騎隊ウーラフの非職大尉がマーシヤの逃げ出した原因であると信じ續けてゐた。パンテレエ・エレミッチにはせれば、あの非職大尉は絶えずその髭を捲き縮らせたり、矢鱈に香油を塗りつけたり、いやに思はせ振りの微笑をしたりすることだけで彼女の氣に入つたのであるといふ。しかし乍らこれについてはマーシヤの血管の中を流れてゐた放浪的なジブシーの血が、より多くの關係をもつ

てゐると推定しなければならぬ。それは兎に角、或晴れやかな夏の夕方に、マーシヤは少し許りのがらくたものを小さな一包みに引纏めて、チェルトップハノフの家を脱け出した。

この事のある前三日間といふもの、彼女は部屋の片隅に踏躓つまずつて、傷負てがひの狐かなんぞの様に壁にくつついてゐた。そして誰にも口を利かなかつた。彼女は只眼をくるくると動かし、眉をびく／＼させ、微かに齒を喰ひ絞つて、自分の體を包み隠さうとでもする様に腕を動かした。かうした氣分は前にも彼女を襲うたけれども、長く續かなかつた。チェルトップハノフはこれを知つてゐるので、自分でも餘り思ひ煩はず、彼女をも煩はさなかつた。ところが彼は、獵師言葉で云へば最後の二匹の獵犬が『去つた』ところの犬小屋から歸つて來て、一人の若い下女に會つた。するとその下女が震へ聲で彼に告げ知らせるところによれば、マリヤ・アキニフィエフナが宜しく云つて呉れ、彼女はもう二度と彼に會ふことはなからうと云つたといふのである。チェルトップハノフはその場でよろ／＼とよろけながら、噎しどがれた唸り聲を立てた後、いきなりピストルを引摺んで逃亡者の後を追つかけた。

彼は自分の家から一哩半許りを距てた、樺の林に近い近所の田舎町へ通ふ往來で追ひ附いた。太陽は地平線上に沈まうとしてゐる。そしてあらゆるものが、かつと華やかな眞紅の光に包まれてゐる——木も草も地面ちべたも凡て一様に。

『ヤッフの野郎へ！ ヤッフの野郎へ！』とチュルトップハノフはマーシヤの影を見附けるや否や、唸めき立てた。『ヤッフの處へいきやがるんだな！』と彼はマーシヤの傍へ駈けつけ乍ら、殆んど一足毎につまづきながら繰返した。

マーシヤは立止つて振返つて彼と向ひ合つた。彼女は光を脊にして立つたので、黒い木材で彫刻されたかの様に全體が眞黒く見えた。只彼女の兩方の白眼許りが銀の巴旦杏の様に浮き出してゐる。しかし眼そのもの——瞳——は前よりも一層黒く見える。

彼女は包を投げ出してその腕を組んだ。

『ヤッフの處へ行くんだな畜生め！』とチュルトップハノフは繰返した。そして彼女の肩を引摺まうとした。けれども彼女と眼を見合せては極り悪くなり、落著かない様子でその儘立つてゐた。

『パンテレエ・エレミツチさん、私はヤッフさんの處へ行くんぢやありません』とマーシヤは柔かな落著いた調子で答へた。『只此上あなたと一緒ににはゐられないといふ丈けなのです。』

『一緒に居られない？ 何故居られない？ 何か俺がお前の氣に障る様な事でもしたといふのか？』

マーシヤは頭を振つた。『何にも別に氣に障る様な事なんぞありはしませんわ、パンテレ

エ・エレミツチさん。只ね、あなたの處に居ると氣が重くつてしようがないんです……これ迄の御恩はほんとうに有難く思ひます。けども私は居られないんです——どうしても！』

チュルトップハノフは驚き呆れた。彼は強かに自分の腿をひつばいた、驚きの餘りに跳びはねた。

『どうしたことだ？ 今迄私と一緒に暮らしてゐて、何の不足も苦勞もなしに居たものが、出し抜けに——氣が重くなる！そして私を振り捨てる！出て行く、そしてハンカチーフを被つて行つてしまふ。今迄奥様の様にあらゆる尊敬を受けて來たのに！』

『そんなことはちつともして貰ひたかないわ。』とマーシヤは遮つた。

『して貰ひ度くない？ 宿無しのジブシーから奥様になるのを、それをして貰ひ度くない！ どうしてして貰ひ度くない、この下司な奴隷奴が！そんなことを俺が眞實にすると思ふか？ それには謀みがあるんだ——謀みが！』

彼は復び顔を擧め出した。

『何も謀みなんぞ考へてゐやしません。これ迄だつてそんなことはありません』とマーシヤははつきりした聲できつぱりと云つた。『先刻も云つた通り氣が重くつてしようがないんですもの。』

『マーシヤ！』とチュルトップハノフは拳で自分の胸を一つ撲りつけ乍ら叫んだ。『おい止せ。黙れ、貴様は俺を甚い目に逢はせる……もう澤山だ！ だがな！ ティシヤが何といふか位は考へて見ろ。せめてあいつを可哀相だと位思つてやつたつて萬更ら罰は當るまい！』

『ティフォン・イゾニッチさんへは宜しく。そしてかう仰有つて下さいな……』

チュルトップハノフは手を握り占めた。『いや、馬鹿を云ふな——行くんぢやない！ あのヤッフの野郎に待ち呆けを食はしてやる！』

『ヤッフさんは。』とマーシヤが云ひ出した……

『様子の好いヤッフさんは！』とチュルトップハノフが口眞似をした。『あいつは卑劣な奴だ、下司種の野良犬だ——全くさうだ——それに猿の様な面附をしてゐやがる！』

全半時間位チュルトップハノフはマーシヤと云ひ争つてゐた。彼はマーシヤの傍へずつと寄つたり、又離れたたり、拳を固めて振上げたり、女の前に頭を下げたり、泣いたり、怒鳴つたりした。

……『駄目です、貴方と一緒ににはもう居られません』とマーシヤは繰返した。『私は氣が重くつて堪らないんです……辛氣臭くつて。』

だん／＼と彼女の顔は無頓著な殆ど眠たさうな様子になつて來たので、チュルトップハノ

フは阿片劑でも飲まされたのではないかと問ひ尋ねた程である。

『退屈なんです。』と彼女は十遍位も繰返して云つた。

『ぢや、俺が殺してやつたら？』と彼は不意に叫んだ。そしてポケットから短銃を引出した。

マーシヤは微笑した。その顔は輝いた。

『え、殺して下さいな、パンテレエ・エレミッチさん、存分に。でも歸ることだけは厭わすわ。』

『どうしても歸るのは厭か？』とチュルトップハノフは引金を上げた。

『歸るのは厭ですわ。生きてる間はどうかしたつて歸り度くないわ。私の云ふ事は確かよ。』

チュルトップハノフは忽ちピストルを女の手に投げ渡して、地面の上にべたりと坐つた。

『ぢや、俺を殺して呉れ！ お前がゐなけりや生きてゐたつてつまらない。俺はお前に厭がられる様になつて來た——俺はまた世の中の物が何も彼も皆な厭になつた！』

マーシヤは身を屈めて包を取上げて、ピストルを草の上へ筒口がチュルトップハノフをよける様に置いて、そして彼の傍へ寄つて行つた。

『まああなた、どうしてあなたはそんなにまで思ひ詰めるんです？ 私共ジブシーの娘がどんなものだからか、何を御存じないんですか？ これが性質なんですもの。あなたもあきらめ

てお了ひなさらなくちやいけませんよ。退屈といふ奴が中へ這入つて来て、引分けて、どこか判らない遠い／＼所へ魂を誘つて行く様になると、どうしてぢつとして居られませう？ あなたのマーシヤを忘れないでゐて下さい。あなたには最う二度とこんな可愛い奴は出来ません。私だつて貴方を忘れやしないわ。だけど二人の生活はもうおしまひになつたんだもの！』

『マーシヤ、俺はお前を愛した。』とチュルトップハノフは自分の顔を埋めてゐた指の中へ呟いた……

『私だつてあなたを愛してゐましたわ、可愛いパンテレエ・エレミツチさん。』

『俺は今もお前を愛してゐる、狂人の様に夢中になつてお前を愛してゐる——だからお前が今、正氣で何の譯もなくかうして私を見捨て、置いて、世界中を流浪して廻らうといふのを考へれば——さうだ、俺にはかう思はれる、若し俺がこんな文無しぶんなしの素寒貧野郎でなかつたらお前も俺を投げ出しはしないだらうと！』

これらの言葉を聞いてマーシヤは只笑つた。

『この人は、私が金のことなんぞ何とも思つてないと始終しじゆう云つてゐた癖に。』と彼女は云つた。そして、チュルトップハノフの肩をいやといふ程小突いた。

彼は跳び上る様にして突立つた。

『ぢや、せめて少し許り金を持つてつて呉れ——こんなに一文なしでどうして行けるんだ？ だがそんな事よりも俺を殺して呉れ！ 平たく云ふが一思ひにやつつけて呉れ！』

マーシヤは再び頭を振つた。『あなたを殺せつて？ 私はシベリヤくんだりまで遣つて貰ふんですかあなた？』

チュルトップハノフはぶる／＼と體を慄はした。『ぢや、只それ丈けで——懲役が怖ろしいといふんだな。』

彼は再び草の上にごろりと寝た。

マーシヤは黙つてその傍に立つてゐた。『あなたには氣の毒な』と彼女は太息を吐きながら云つた。『あなたは本當に好い方よ……だけどどうにもしようがないの。さよなら！』

彼女はくるりと側へ向いて二足許り歩き出した。その時分夜はすでに來て、薄暗い影が四邊を立ち籠めてゐた。チュルトップハノフはいきなり跳び上つて、後ろからマーシヤの兩脇を捉へた。

『かうしてお前は、毒蛇め、ヤッフの所へ行つちまふんだな！』

『さよなら！』とマーシヤは鋭く意味深く繰返して、思ひ切つてすん／＼と歩き出した。

チュルトッブハノフは彼女の後ろを見てゐたがピストルの置いてあつた場所へ駆けつけ、それを引攔むや否や、狙を定めてぶつ放した……けれども彼が引金に觸つた前に腕は痙攣つてゐたので、弾丸はマーシヤの頭の上をかすめて飛んだ。彼女は足を止めもせず、肩越しに彼を見返つた。そして彼をからかふかの様に歩くと、とき體を揺り乍らずんぐと行つた。

彼は顔を隠した——そしてすたくと駆け出した。

けれども五十歩と走らないうちに、彼は化石でもしたかの様にびたりと立止つた。聞き馴れすぎた聲が彼の耳へ漂ふて來た。マーシヤが歌を歌つてゐたのである。『若い時分のことだつた。』と彼女は歌つた。一節々々が夕方の空氣の中を悲しげに、又熱烈にさまよつてゐるやうに思はれる。チュルトッブハノフは凝乎と耳を澄ました。その聲は遠くなり遠くなつて行く。ふつつり消えたと思ふとまたやつと聞える位に、しかし乍ら同じ様な情熱の籠つた調子で流れて來る。

『俺を馬鹿にしてゐるんだ』とチュルトッブハノフは思つた。が直ぐに思ひ返して『いや、なあに私に永久の別れを告げてゐるんだ。』と呻くやうに云つた——さうしてはらくと涙を流した。

次の日彼はヤッフ氏の宿所に現はれた。ヤッフ氏は世間的の人で、田舎の淋しさが嫌ひな所から『若い婦人達の近くにゐる爲め』(彼の言葉を借りて云へば)近所の田舎町に住んでゐた。チュルトッブハノフはヤッフを見出さなかつた。ヤッフは給仕人に聞けば、前の晩にモスクワへ向けて出立したとのことである。

『ぢや、それに違ひない!』とチュルトッブハノフは物狂はしく叫んだ。『互に謀し合はせてゐたんだ。あいつ一緒に逃げやがつたんだ……だが、まあ見てやがれ!』

彼は給仕人の止めるにも拘らず、若い騎兵大尉の部屋へ押込んだ。部屋には安樂椅子の上の處に、槍騎兵の正服を著けた主人公の肖像がかゝつてゐる。『うん、こゝにゐやがる、尾長猿めが!』とチュルトッブハノフは怒鳴つた。彼は安樂椅子へ跳び上つて拳を振上げて張り詰めたカンブスに大きな穴をあけた。

『やくざ主人にさう云つてやれ』と彼は給仕人の方へ振向いた。『あいつの汚らしい顔附のゐない間に、貴族のチュルトッブハノフ様が此繪に穴をおあけになつたつてな。若しまた腹癒せがしたいなら、チュルトッブハノフ様のお宿は知つてる筈だつて! それも厭なら俺の方からやつて來るつてな! あの悪黨猿め、海の底へ潜つたつて引捉へずに置くものか!』

かう言ひ乍らチュルトッブハノフは安樂椅子から跳び下りて、堂々と引揚げた。

しかし騎兵大尉のヤッフは彼に腹癒せをしようとしなかつた——實際のところ彼は何處へ行つてもヤッフに會はなかつた——そしてチュルトツプハノフも敵を捜し出さうと思はなかつたし、悪い評判も立たないでしまつた。マーシヤはその後間もなくすつかり行方が判らなくなつて了つた。チュルトツプハノフは酒をやり出した。しばらくしてまた『あらため』た。しかし乍ら聽て第二の打撃が彼を襲うた。

二

それは彼の親友ティフォン・イヴニッチ・ネドビュスキンの死んだ事である。彼の健康は死ぬ二年前位から悪くなり出した。彼は喘息に苦しみ出した。そして始終ぐたりぐたりと寝込んで許り居つて、眼が覺めても直ぐに正氣になれなかつた。村の醫者は『ひきつけの様なもの』の結果であると云つた。マーシヤの家出に先だつ三日間、即ちマーシヤの氣が重かつたあの三日間、ネドビュスキンは自分の所在地のベズゼレンディエフカの方へ行つてゐた。彼は酷い風邪をひいて寝てゐたのである。マーシヤの遣り方はそれ故一層彼にとつて意外であつた。それはチュルトツプハノフ自身の上によりも、彼の上に殆んどより深き印象を與へた。本來の優しさと、臆病氣とから、彼はその友人に對する精一杯の同情と、この上もなき當惑との外に何にも口に出して云はなかつた……併しそれは彼の心を滅茶々に打ち壞して了つた。『あ

の女は私の胸を搔搔つて了つた。』と彼は好きな基督編の安樂椅子に倚りかゝつて、自分の指をねぢりながら自分自身に呟いた。チュルトツプハノフがあきらめて了つた後になつても、ネドビュスキンは元氣を恢復しなかつた。さうして矢張り『心の中に空虚がある』と思つてゐた。『こゝが』と彼は胃の腑の上の胸の中程を指し乍ら折々云つた。こんな具合で彼がぐづぐづとしてゐる間に冬が來た。霜が下りる様になつて、彼の喘息も少し良くなつたが、しかし彼は今度は『ひきつけの様なもの』でなく、寧ろ真正銘擬なしのひきつけに見舞はれた。彼は直ぐに意識を失ひはしなかつた。彼は矢張りチュルトツプハノフの顔も判り、また彼の『ティシヤ、君は僕の承諾もなしに丁度マーシヤがした様に僕を見捨てるつもりか？』といふ絶望的な叫び聲も判つた。彼は又廻らない舌で『あゝ——パー——エ——エ——ギ——ギ——ギ——ギ——あなたのおつしやる——通りにします。』

しかし斯うは云つたものゝ、その日田舎醫者の來るのをも待たず亡くなつてしまつた。醫者はまだ冷たくなり切らない體を診ながらもどうにもしてやる事が出來ず、只凡ての生物の無常なることを認めて哀れを催したと云ひ、『ウツカの一杯と肴の一皿と』を請ひ求めた。兼ねてさうあらうと思はれてゐたことながら、ティフォン・イヴニッチは、その財産を、尊敬すべき保護者にして、寛大なる恩人なる、パンテレエ・エレミッチ・チュルトツプハノフへ遺した。

しかし、それはその尊敬すべき保護者にとつて大した利得にならなかつた。何故ならばそれは間もなく公賣に附せられて、一部分を墓標の彫像の費用にあてられたから。チェルトップハノフは(彼の父の狂人染みた性質が、彼にも出て来たといふことがこれで判るだらう)友人の死骸の上にその彫像を建てるのを宜しきを得たことと考へた。天使が祈禱をしてゐるところを表すべきこの彫像は、彼によつてモスクワへ註文された。ところが商人は彫刻の鑑識家なんぞ滅多に田舎にあるものではないといふところから、天使の代りに女神のフローラを彼へ薦め、彼の所へ送つて寄越した。そのフローラはカテリナ時代に設計されて、モスクワ近く●或廢園の一つを永いこと飾つてゐたのである。商人が斯うしたのは立派な理由があつた。即ちこの彫像はロココ式で肉附の良い小さな腕や、波立つた捲髪や、露は胸の周りの薔薇の花飾や、しなやかにくねつた身體附などまことに巧みに出來てゐたが、只で商人の手に入つたのである。そんな理由で今日尙ほ此神話的な女神は優美な姿勢に雙脚を持上げて、ティフォン・イヴニッチの墓の上に立つてゐる。そして如何にも氣取つた勿體振つた微笑を含み乍ら、牛や羊の群を、又我々の村の墓場を始終訪れて周りをぶらつき歩く人々を、見下ろしてゐる。

三

まめやかな友人を失くしてから、チェルトップハノフは復び酒を飲み出した。そして今度はずつと又甚かつた。何事もすつかり具合が悪くなつて行つた。彼は遊び事をしようにも金がない。乏しい財産はみんな費されて了つた。僅か許りの雇人も残らず逃げて行つた。パンテレコ・エレミッチの孤獨は申分のないものになつた。彼には一言の話をするものもない。自分の心を打開けるべき人間などは尙更ない。しかも彼の誇だけはちつとも減じなかつた。寧ろ周囲がいけなくなればなる程、彼は愈々高慢に、愈々近づき難くなつた。結局彼は人間嫌になり切つた。只一つの慰め、只一つの喜び丈けが彼に残された。ドン種の立派な灰色の馬で、彼がマレクアデルと名附けた實に素晴らしい馬である。

この馬は次の様な次第で彼の手に入つたのである。チェルトップハノフは或日近くの村を通つてゐると、或る居酒屋の前に百姓の群が大聲を上げて喚き立つてゐるのを聞いた。群集の真中に全く同じ場所で、頑丈な腕が絶えず上つたり下つたりしてゐる。

『どうしてるんだ?』と彼は持前のきつぱりした調子で小屋の入口に立つてゐた百姓の婆さんに尋ねた。婆さんは居眠りでもしてゐたかの様に、入口の柱に寄つかゝり乍ら居酒屋の方を見詰めてゐた。更紗の襦袢を著た白雲頭の腕白が糸杉の十字架を小なさ裸の胸にかけ、小

さな兩脚を擴げて坐つてゐる。そして小さな握り拳が婆さんの木の皮のスリッパの間に置かれてゐる。直ぐ傍に一羽のひよつこが微臭いライ麥のパンをつゝいてゐる。

『何で御座いますかな』と婆さんは答へた。前へ乗り出し乍ら、しなびた黄ろい手を子供の頭に置いた。『何でも若い者が猶太人を撲ぐるんだとかいふことで御座います。』

『猶太人を？ どういふ猶太人を？』

『さあ、どういふ猶太人で御座いますか。何でも猶太人がこの邊に來ましたさうで。どつから來たのか判りませんが。ワーシヤ、おつ母のところへお出でよ。シッ、シッ、畜生！』

婆さんは雛を追拂ふ。ワーシヤは婆さんの下袴につかまつた。

『ほうら御覽なさい、ぶつてゐますでせう。』

『どうしてぶつんだらう？ 何をしたといふんだね？』

『さ、どうしたといふんですか。兎に角それ丈けの事をしたんでせう。それなら打つのも當り前ですよ。何しろあの猶太人はキリスト様を磔刑にしたんですからね！』

チュルトッブハノフは大聲を揚げて、乗馬用の鞭で馬の頸に一鞭當て、群集の方へ驀地に駆け出した。そしてその中へ飛び込み乍ら、同じ鞭で右に左に滅多矢鱈に百姓共を打ち始めた――途切れ／＼の聲で怒鳴り立て乍ら、『無法な畜生共！ 無法な畜生共、お上の法律で罰す

るんだ、私事にするんぢやないぞ！

法律だ！ 法律だ！ 法律だ！

二分間と經たない中に群集は四方八方に逃げ失せた。そして居酒屋の戸口の前の地面には南京木綿の長い上衣を着て髪を振亂して、へ／＼になつた、小さな瘦せた黒い生物が見える……眞蒼な顔、巨きく見張つた眼、開いた口……それは何であるか？……死の様な恐怖か、それとも死そのものか？

『何だつてこの猶太人を殺したんだ？』とチュルトッブハノフは威脅する様にその鞭を振廻し乍ら出る丈けの聲を張り揚げて叫んだ。

群集は微かな唸り聲を揚げてそれに應じた。一人の百姓は肩の邊を擦り、今一人の百姓は腰を擦り、今一人の百姓は鼻を擦つてゐた。

『随分亂暴に鞭を振廻すなあ！』といふ聲が後ろの列に聞えた。

『何だつて猶太人を殺したんだ、洗禮を受けた異教徒共が？』とチュルトッブハノフは繰り返した。

ところがこの時地面に横たはつてゐた生物はひよつこりと跳び起きて、チュルトッブハノフの所へ走り寄つて、痙攣でも起したかの様に鞍の端をとつ捉へた。

『生きてるぞ！』といふ聲が後ろの方で聞えた。

『あいつは全で猫だな！』

『あなたしあま、どうぞお助け下さいまし！』と氣の毒な猶太人は震へ聲で云つた——その全身をチュルトップハノフの足許へ押しつけながら、『でなければ私は殺されてしまいます、どうぞあなたしあま！』

『お前があいつらに何をしたといふんだ？』とチュルトップハノフは尋ねた。

『何にもしはいたしません！ この邊の牛が幾匹か死んだといふので……それで私に疑をかけます……だが私は……』

『ま、そんなことは後でいゝ！』とチュルトップハノフは遮つた。『それよりも鞍にしつかり捉つてついて来た！ それからお前等は』と彼は群集の方へ向き乍ら附け加へた。『この俺を知つてるか？——俺は地主のパンテレエ・チュルトップハノフだ。ベズゾノヅァに住んでゐる——だから俺を相手取つて訴訟がしたければするがいゝ——それから又、なんならばこの猶太人を相手取つてもやるがいゝ！』

『何だつて訴訟なんぞ？』と胡麻鹽毘の品の良い古代の族長をその儘な百姓が丁寧に頭を下げ乍ら云つた。(彼も元より猶太人を打つことに於てはいさゝかも他人に負をとらなかつたのである。『パンテレエ・エレミツチさま、私共は貴方様をよろしく存じて居ります。良いこと

をお教へ下さいまして何とも御禮の申しやうも御座いません！』

『どうして訴訟なんぞ！』他の連中も調子を合はせた。

『だがあの猶太人の野郎は何時か又とつちめてやる！ なあに逃がすものか！ ちやんと見張つて居つてやるからな。』

チュルトップハノフは口髭を引張つて、鼻息を荒くして悠々と家へ歸つて行つた——丁度會つてティホン・ネドビュスキンを救つたと同じやうに、迫害者から救ひ出したところの其の猶太人を連れて。

四

數日経つてチュルトップハノフの家に残されてゐた一人の馬丁は、誰かゞ馬に乗つて来て彼に會ひたがつてゐるといふことを取次いだ。チュルトップハノフは入口の階段へ出て見ると、それは例の猶太人であつた。彼の乗つて来たドン種の立派な馬は、庭の真中に傲然として靜かに立つてゐる。猶太人は何も被つてゐない。帽子を小脇にかひ込み、脚を鐙の紐に掛け、鐙そのものに掛けてゐない。その長い上衣のぼろ／＼になつた裾は鞍の兩側へ垂れ下つてゐる。チュルトップハノフを見て、彼はその唇を鳴らし、兩腕を張り、脚を曲げて頭を曲げた。しかしチュルトップハノフはその挨拶を返さない計りでなく、更に甚く憤つてしまつた。彼は

見る／＼烈火の如くなつた。汚らしい猶太人がこんな立派な馬に跨るとは！……全く無禮極まる話である！

『やい、エティオピアの馬鹿者め！』と彼は叫んだ。『溝ん中へ打込まれないうちに、さつさと下りやがれ！』

猶太人は早速云はれた通りに袋の様に馬から轉げ下りた。そして片手に手綱を控へ乍ら、微笑し乍ら、お辭儀をし乍らチュルトツプハノフへ近づいた。

『何用があるんだ？』とパンテレエ・エレミッチは嚴然とした調子で問ひ尋ねる。

『あなたしあま、馬を觀ていたとき度いと思ひましてな！』と猶太人は一刻もお辭儀を止めないで云ふ。

『え……うむ……馬は好い馬だ。どつから引張つて來た？ 盗んだんぢやあるまいな？』
 『飛んだことを仰有います、あなたしあま！ 私は正直な猶太人で御座います。盗みなんぞするものですか。只あなたしあまへ差上げ度いと思つて取つて參りました——全く！ これを手に入れるにはなかく骨が折れました。だがまあ、好い馬で御座いませうがな！ ドンの國中を探したつて、こんなのは又と見附かるものぢや御座いません！ 何とあなたしあまなかく／＼良い馬で御座いませうがな！ さあ、何卒此方へお廻りになつて！ さあ……さあ

……ぐるりと廻つて側から御覽になつて下さい！ それぢや鞍を取りませう。如何で御座いますあなたしあま？』

「馬は良い馬だ。」とチュルトツプハノフは平氣を粧ひ乍ら繰返した——その胸は鍛冶屋の大槌の様に鼓動し乍らも。彼は熱情的な馬好きなので、一目見ると良い馬だといふ鑑識がついたのである。

『まあ、御覽なさいまし、あなたしあま！ 頸の邊を叩いて！ はい、はい、ひッ、ひッ、ひッ！ かういふ具合に／＼！』チュルトツプハノフは厭々さうな様子をし乍ら馬の頸に手をおいて、一つ二つ輕う叩いた。それから指を前髪から脊骨に沿うてずつと通した。そして腎臓の上のある場所へ來たとき、鑑識家の様に軽くその場所を押へた。馬は忽ち脊骨を弓なりにしてその高慢な黒い眼で訝し氣にチュルトツプハノフを見廻しながら、鼻を吹き鳴らし、後脚を動かした。

猶太人は笑つて微かにその手を打ち鳴らした。『あなたしあま、こいつは御主人様を知つて居ります、御主人様を！』

『詰らんことを云ふな』とチュルトツプハノフは迷惑さうに遮つた。『この馬をお前から買はうたつて……金は無し、呉れるつたつて俺は猶太人から物を貰ひたくない計りぢやない、全能

の神様御自身からだつて貰ひ度くないんだ！』

『私が御進物として差上げるやうな事でも申しましたかな、これはく〜！』と猶太人は叫んだ。『お買ひなすつて下さいまし、だんなしあま……僅か許りのことですから——お待ち申しても宜しうございます。』

チュルトップハノフは考へ込んだ。

『一體幾許といふんだ？』と彼は遂に齒の間から呟いた。

猶太人は肩を聳かした。

『買値で宜しうございます。三百留で。』

馬は十分、倍位な價值がある——事に依るとその値段の三倍位はするかも知れない。

チュルトップハノフは側を向いて、熱でもあるやうに欠伸をした。

『ところで金は……何時？』と彼は顔を甚く擧め乍ら、猶太人を見ないで尋ねた。

『何時でもあなたしあまの御都合次第で。』

チュルトップハノフは頭を後ろに反らして、眼を上げなかつた。『それぢや返辭にならん。はつきり云つて呉れ、ヘロデの息子！ 一體俺がお前の世話になつてゐられると思ふか？』

『いやそれぢや申します』と猶太人は急いで云ひ出した。『六ヶ月の期限で……如何でござい

ませう？』

チュルトップハノフは何の答もしなかつた。

猶太人はチュルトップハノフの顔色を讀まうとした。『如何でございませう？ あいつをお厩へ入れさせて下さいませうか？』

『鞍なんぞ不要い』とチュルトップハノフは出し抜けに口から出した。『鞍を外せ！ おい！』

『かしこまりました、はい、外しませう。』とほく〜ものの猶太人は鞍を肩に擔ぎながら、吃り〜云つた。

『ところで金は』とチュルトップハノフは念を押した……『六ヶ月中にだぜ。そして二百ルーブリでなく、二百五十ルーブリにしてやる。何にも云ふな！ いゝかい、二百五十ルーブリの拂ひだよ！』

チュルトップハノフはまだ眼を上げる氣になれなかつた。今まで彼のプライドがこれ程むごたらしく傷けられたことはない。

『さうだ、屹度進物のつもりだ』と彼は心の中に思つた。『お禮のつもりで引張つて來たんだな、この野郎は！』そして彼は猶太人をキスして遣り度い様にも思ひ、打ちのめしてやり度い様にも思つた。『あなたしあま』と猶太人は少し元氣附いて、顔一杯にお世辭笑を浮べなが

ら云ひ出した。『露西亞風に手から手へお取りを願ひます……』

『何だと後を云つて見ろ！ヘブライ人が……露西亞人の習慣を！やい！この野郎！馬を引いて行つて既に追ひ込め。さうして麥でもやつて置け。俺は後から自分で行つて世話をする。名は——マレクアデルと付けるんだ。』

チェルトップハノフは階段を上つて、行かうとして、あちらへ向いたが、急に振返つて、猶太人の所へ寄つて、温かにその手を握つた。猶太人は身を屈めて彼の手にキスしようとしたが、チェルトップハノフは復び跳び退つて、『誰にも云ふなよ！』と囁き乍ら戸口の中へ消え去つた。

五

その日からチェルトップハノフの生活に於ける主なる興味、主なる仕事、主なる楽しみはマレクアデルであつた。彼はマーシヤをすらそれ程には愛しなかつたと思ふ程にマレクアデルを愛した。彼はネドピュスキンに愛著したより以上にマレクアデルに愛著する様になつた。その馬がまた良かつた事といつたら！至で火の様で——火薬の様に爆發しさうな——露西亞の古貴族の様に堂々として！どんな事をさしても疲れを知らず、辛抱強く、從順で、飼料の費用なんぞちつともいらぬ。外になんにも無ければ脚の下の土でも喜んで噛む位である。

並足で歩く時は乳母の腕に抱かれて寝かしつけられる様である。速歩を踏む時は海の上に揺られるやうである。兩脚揃へて飛び出す時は風を追ひ越す程である！ちつとも息切れがせず、申分なく肺が丈夫だ。綱の様な臆で、躓くなどといふ様なことはその試がない！溝や垣根をまたぐ位は何でもない——それにまた何といふ精巧な奴であらう！主人の聲を聞けば彼は頭を振上げて飛んで来る。若しちつとしてゐると云ひ附けて置けば、傍を離れてしまつても動かうともしない。一寸でも振向けば『こゝに居ります』とでも云ふ様に幽な聲で嘶く。そして何物をも怖れない。漆の様な暗闇にも、吹雪の中にでも、彼はその道を見出す。どんな事があつても見す知らずの人間を傍へ寄せようとしぬ。若し寄つて来る者があれば噛み付きでもするであらう！さうして犬さへも決して近附くことを敢てしない。彼は忽ち前脚を頭の上に揚げる！と思へばそれがこの畜生の最後なのである。生れつきの誇をもつた馬には、只餘裁として鞭を振上げればいゝ——神かけて觸ることはならぬ！いや、もう此の上を云ふに及ぶまい——全くの寶物で、馬ではないのだ！

チェルトップハノフはそのマレクアデルの事を云はうとしても、どんな言葉で表白すべきかが判らなかつた。それに彼が如何許り馬を可愛がり大切にしていふたことぞ！あの馬の上衣は薄黒い磨をもつた銀の様に——古いのでなく、新しい銀の様に——輝いた。若し其上を

手で撫でて見やうものならば、それは天鷲絨の様に滑かであつた！ 彼の鞍や、鞍下や——
轡や——彼の凡ての馬飾が全くしつくりとよく箝り、よく整つて居り、よく光つて居り——
全で繪の様であつた！ チェルトップハノフは——多く云ふを要しない事だが——自分の手
で愛馬の前髪や、鬘を編んでやり、ビールで尻尾を洗つてやり、なほ其上幾度か磨粉で蹄を磨
いてやつた。時々彼はマレクアデルに乗つて出かけて行く。近所の人々に逢はうといふので
はない——彼は以前の通り彼等を避けた——寧ろその田畝を横切り、その家の傍を通り過ぎ
て……近所のあの馬鹿者共に遠くからマレクアデルを嘆賞させる爲である！ また彼はどつ
かに獵でもあるとか、富裕な地主が領地の中のかげ離れた場所で獵をするとかいふやうなこ
とを聞込んだとする。彼は早速出掛けて行く。さうして遠くの地平線上に悠々と駈けさせて、
彼の馬の速さと美しさで凡ての見る者を驚かす。それでゐて誰にも近くへ寄らせない。或
時どつかの獵好きな地主がその従者一同と共に彼を追つかけた。彼はチェルトップハノフがすん
ずんと逃げて行くのを見た。そこで全速力を出して飛ばせ乍ら、聲を限りに後から呼びかけ
た。『おい君！ おい！ その馬を何とでもいゝから換へてくれ！ 私は千留だつて惜しみ
はしない！ 妻だつて子供だつて惜しいものか！ 一文無しになつても宜い！』
チェルトップハノフは不意にマレクアデルの手綱を引締めた。獵好の紳士はそこへ乗りつけ

た、『ねえ君！』と彼は叫んだ。『幾らにします？ え、いくらに？』

『若し君がツァールだつたら』とチェルトップハノフは力をこめて云つた（しかも彼はセキスピ
アのことなんぞ聞いたこともないのである）。『君はこの馬の代りに君の領土全體を呉れると
いふかも知れないが、それでも私は御免だ！』〔譯者註——沙翁の『リチャード三世』の内に我馬と我
王國といふやうな句があるからであらう。彼はかういつてくすくす笑ひながら、マレクアデルを
手綱で引き寄せ、獨樂かなんどのやうに後脚で空中をぐるりと廻らして、さてとつとと駈け
させた！ 彼は切株の上を電光のごとく越えて行つた。そして獵好の紳士は（聞けば富裕な
公爵であつたとのことだ。）帽子を地べたに叩きつけ、その中へ顔を埋めてぶつ倒れ、半時間
ばかりも起き上らなかつた。』

チェルトップハノフは彼の馬をどうして大事がらずにゐられやう？ 彼が復び立派に近所の
人々に對して鼻を高くすることが出来たのは、最後の花を咲かせたのはこの馬のお蔭ではな
かつたか？

六

その間にも時は經つて、支拂の期日は近づいた。ところで二百五十留は愚か、チェルトッ
プハノフには五十留の金もない。どうしたものであらうか？ 期日になつてどうなること

か？『なあに』と彼は遂に決心した。『もし猶太人が容赦しなかつたら、どうしても待たれないと云つたら、俺はあいつに家でも地面でも呉れてやる。そして俺は馬に乗つて、どこへでも構はないで行つちまふ！俺はマレクアデルを渡してしまふ位なら飢ゑ死にをした方がましだ！』流石の彼も大いに當惑して、しかもへこたれてゐた。ところが斯ういふ場合運命の神は後にも先にもたつた一度、彼の上に憐愍の微笑を向けた。チュルトップハノフには名前さへも知られなかつたやうな遠い親戚の或る女が、彼の眼には莫大の額と思はれる——二千留を下らない！——金を遺言によつて彼へ遺した。さうして彼はこの金を所謂危機一髪の際に受取つた。即ち猶太人の來るべき日の前の日に受取つた。チュルトップハノフは嬉しさに殆んどどりのぼせた。しかしウオツカのこと考へもしなかつた。マレクアデルが手に入つたその日から、彼は一滴をも口にしなかつたのである。彼は厩へかけ込んで、その愛馬の顔の兩側へ小鼻の上に——そこは馬の皮膚が何時もことに柔かである——キスをした。『さあ我々は別れないでもいゝんだ！』と彼はマレクアデルの頸のよく櫛を入れた鬘の下を軽く叩きながら叫んだ。彼は家へ引き返して、二百五十留を勘定して、一つの包に封じ込んだ。それから仰向けに寝轉んで煙草を喫し乍ら、彼は残りの金をどう使つたらよからうかと考へ込んだ——どんな犬を買はうか？本當のコストロマ種を、斑點のある黄褐色の奴を、そ

れに極めた！彼はベルフィシカとさへ一寸した話をして、縫目全體に黄色な打紐を着けた新しいコサクの上衣を約束した。そして愉快な心持で寢床へ入つた。

彼は良くない夢を見た。その夢に彼はマレクアデルでなく、何でも野牛の様な奇體な獸に乗つて獵に出た。雪の様に白い眞白な狐がこちらへ向けて駈けて來た……彼は鞭を呉れようとした、犬をけしかけようとした——が乗馬鞭の代りに、しなの木の皮の一束を握つてゐた。さうして狐は彼の方へ舌を出して見せ乍ら彼の前を走り抜けた。彼はいきなり跳びかゝらうとした。彼の野牛は躓いた。彼は倒れた……そしてある警部の腕に落ち込んだ。その警部は總督の前へ彼を連れて行く。その總督はヤッフであつた……

チュルトップハノフは眼が覺めた。部屋は暗かつた。鶏は丁度二番目を鳴いてゐた……どつか遠い／＼所で馬が嘶く。チュルトップハノフは頭をもち上げた……今一度微かな／＼嘶く聲が聞える。

『あれはマレクアデルが啼いてゐるんだな！』と心の中に思つた……『あいつの啼聲だ。だがどうしてあんなに遠くで？はてな！……まさかそんなことは……』

チュルトップハノフは不意に全身に寒氣を覺えた。彼は早速床から跳ね起き、長靴と著物を手探りして身仕度をした。そして枕の下から厩の戸の鍵を引摺んで中庭へ飛び出した。

既に中庭のすつと端にあつた。一方の壁は野原の方へ向いてゐた。チュルトップハノフは直ぐには鍵を鍵穴にあてがふことが出来なかつた。彼の手が震へてゐたのだ——それからまた直ぐには鍵が廻せなかつた……彼は息を殺して身動きもせず立つた。何物かが内側で動きでもしたら！『マレク！ マレク！』と彼は低い聲で叫んだ。死の様な沈黙である！ チュルトップハノフは思はず鍵を押した。戸はギイと鳴つて開いた……戸は鍵が掛つてゐなかつたのだ。彼は敷居を越えてから今一度馬を呼び立てた。こんどはその名前を残らず『マレクアデル』と呼び立てた！ しかし彼の忠實な仲間からは何の答も来ない。たゞ鼠が一匹藁の中で、ごそくと音を立てた。するとチュルトップハノフは、マルクアデルの置かれてゐた三つの仕切の一つへ飛込んだ。彼は周りが漆の様に暗かつたけれども、構はず仕切の中へ入つて行つた……空虚だ！ チュルトップハノフの頭はぐらくやり出した。彼の頭の中には鐘ががんと鳴つてゐる様に思はれた。彼は何か云はうとしたが、只しゆつ、しゆつ、しゆつといふ様な聲が出たばかりである。それから手でもつて四方八方を手探りしながら、息もつかずに、膝頭を震はせながら、一つの仕切から次の仕切へと順々に這入つて……殆んど天井まで乾草を積上げた三番目の仕切へも這入つて見た。こちらの壁に躓づき、あちらの壁へ躓づ

き、ばつたり倒れて仰向けに轉がつたが、又起き上つて、いきなり開きかけた戸口から中庭の方へ闇雲に飛び出した……

『盗まれた！ ペルフィシカ！ ペルフィシカ！ 盗まれた！』と彼は聲を限りに吼えた。

馬丁のペルフィシカは彼の寝てゐた高土間からシャツ一枚で泡を喰つて飛び出した……酔拂ひの様に主人とたつた一人の下僕とは、庭の真中で互に打つた。彼等は狂人の様にお互の周りをぐるぐると廻つた。主人も事の譯を話す事が出来ず、下僕も何の用があるのか解らなかつた。『残念！ 残念！』とチュルトップハノフは泣聲を出した。『残念！ 残念！』と馬丁はそれについて繰返した。『提灯だ！ おい！ 提灯を點せ！ 灯だ！ 灯だ！』といふ聲がチュルトップハノフのわななくと震へる唇から漏れた。ペルフィシカは家の中へ驅込んだ。しかし提灯を點すのは、灯を點けるのは、容易でなかつた。マッチは當時露西亞で珍らしいものに見做されてゐた。臺所へ行つて見ても燃えさしの残りはとづくに消えてゐた。火打石も火打も直ぐには見附からない。見附かつては却々巧く行かなかつた。チュルトップハノフは齒ぎしりをしながら、泡を喰つたペルフィシカの手からそれを奪ひ取り、自分で火を打ち出した。火花は夥しく飛散つた、が悪體やら呻き聲やらはより夥しく飛び散つた。けれども火口には火が附かず、ついても直ぐに消えて了ふ——膨らました四つの頬と唇とを一つにし

て、一生懸命に吹きつけて見たのだけれど！ 五分間許りもしてやつと蠟燭の一片がひしやげた提灯の底で燃え附いた。そこでチュルトツプハノフはベルフィシカを連れて厩へ駆け込み、提灯を頭の上へ差上げ乍ら見廻した……

すつかり空虚つぽだ！

彼は中庭へ跳り出して、彼方此方へ残る隅なく飛び廻つて見た——何處にも馬らしいものはない！ パンテレエ・エレミツチの庭を取囲むあじろ垣はずつと前から荒れ果て、方々が傾いたり、地面に倒れたりしてゐる……厩の側は一ヤード許りの間すつかり平らになつてしまつてゐる。ベルフィシカはこの場所をチュルトツプハノフへ指して見せた。

『旦那！ 御覧なさい。晝間見た時はこんな具合ぢやございませんでした。杭が地面から抜けてるのを御覧なさい。どいつか、抜き出したものです。』

チュルトツプハノフは提灯を提げて駈け寄つて地面の上を其處此處と照らして見た……

『蹄だ、蹄だ、蹄鐵の跟だ、新しい跟だ！』と彼は早口に呟いた。『こつから引き出したんだな、こつから！』

彼は直ちに垣根を飛び越えた。そして『マレクアデル！ マレクアデル！』と叫び乍ら藪地に野原の方へ駈け出した。

ベルフィシカはまご／＼して垣根の傍に立つてゐた。提灯から出る光の輪は聽て見えなくなり、星もなく月もない夜の濃密な暗さの中に吸ひ込まれてしまつた。

微かに微かにチュルトツプハノフの絶望の叫聲が傳はつて来る……

八

彼が復び家へ歸つた時分には夜が明けてゐた。彼は殆んど人間の様に見えなかつた。彼の著物は泥に塗れ、彼の顔は残忍兇惡な表情になり、彼の眼は濁つて意地悪く見えた。噎れた聲で彼はベルフィシカを追拂ひ、一人で自分の部屋に閉ぢ籠つた。彼は疲れて我慢が仕切れなくなつてゐたけれど、寢床に入らないで、戸口の傍の椅子に腰を下ろし、その頭を押へてゐた。

『盗まれた！……盗まれた！……』

だが夜分厩が錠前を下されてゐるのにどうして泥棒はマレクアデルを盗み出したらう？ 晝間でさへ知らぬ人間を傍へ寄せ附けなかつたマレクアデルを——あれを盗む、しかも何の物音も立てない様に盗むとは？ それに庭の犬一匹も吠えなかつたとはどうしたものだ？ 尤も今はたつた二匹しか残つてゐない——二匹の小さい小犬だけ——その二匹も寒いのだ？ 飢いのかとて屹度埃の中へでもぐり込んでゐたらう——それにしても！

『マレクアデルがゐなくなつたとすれば俺はこれからどうしたものだ？』とチュルトツプハノフは考へ込んだ。『俺はもう最後の楽しみもなくして了つた。もう死ぬる時が来た。丁度金が来たところだからもう一頭買はうか？ だがあんな馬が何處へ行つて見附かるだらう？』

『パンテレエ・エレミッチさま！ パンテレエ・エレミッチさま！』とおづ／＼と呼ぶ聲が戸口に聞える。

チュルトツプハノフは突立ち上つた。

『誰だ？』と彼は自分のとは思はれない様な聲で叫んだ。

『私でございます、馬丁のペルフィシカでございます。』

『何用だ？ 見附かつたか？ 歸つて来たか？』

『いゝえ、パンテレエ・エレミッチさま。あれを賣りつけた猶太人の奴が……』

『あれがどうした？』

『あれが参りました。』

『うおう、うおう、うおう！』とチュルトツプハノフは咆吼して直ちに戸を突き開けた。『こゝへ引張つて来い！ 引摺つて来い！』

髪を振亂した亂暴な様子をした『思入』の不意に姿を現したのを見て、ペルフィシカの後に

立つてゐた猶太人はこつそり逃げ出さうとした。けれどもチュルトツプハノフは二飛ばかりで飛んで来て、虎か何ぞのやうに猶太人の首元へ飛びついた。

『あゝ！ 金をとりに来たんだな！ 金をとりに！』と彼は猶太人を締め殺す代りに自分自身を締め殺しつゝあつたかの様な嘎れた聲で叫んだ。『貴様は夜分あいつを盗んで置いて、晝間金をとりに来たんだな、え？ え、おい！』

『どうぞだんなしあま』と猶太人は呻き出さうとした。

『さあ云へ、俺の馬は何處にある？ あれをどうした？ 誰に賣つた？ さあ云へ、おい！』

猶太人は今や呻くことすらも出来なかつた。顔は見る／＼鉛色になり、恐怖の表情すらもそれから消えた。彼の手は命のないものゝ様にだらりと垂れ、その全身はチュルトツプハノフに劇しく揺ぶられるので蘆の葉かなんぞの様にゆらくと動いた。

『金は拂つてやる、一文残さず拂つてやる』とチュルトツプハノフは唸つた。『だが直ぐに云はなければ雛鳥のやうに締め殺して呉れるぞ！……』

『だともういゝ加減お締めになりました。』と馬丁のペルフィシカは遠慮し乍ら云つた。

この時初めてチュルトツプハノフは我に還つた。

彼は猶太人の首を放した。猶太人はぱたりと地面に倒れた。チュルトツプハノフは彼を引起

して腰掛にかけさせ、ウツカの一杯を咽喉へ注ぎ込んで正氣に復らした。さて正氣に復らしたところで彼と話を始めた。

話して見ると猶太人はマレクアデルが盗まれたことなんぞちつとも知らなかつたといふことが判つた。さうして實際の話が自分で『尊敬するパンテレエ・エレミツチさま』の爲めに推薦した馬を、自分から盗み出さうといふ氣になる譯はないのである。

そこでチェルトツプハノフは彼を厩へ導いた。

彼等は二人して厩の仕切や、まぐさ桶や、戸の錠前を吟味し、乾草や藁をひつくり返して見て、それから中庭へ行つた。チェルトツプハノフは垣の蹄の跟を猶太人に見せたが、出し抜けに自分の腿をはたと叩いた。

『待てよ！』と彼は叫んだ。『貴様はどこであの馬を買つた？』

『マロアルチャンデルのフルホーゼンスキーの馬市で。』と猶太人は答へた。

『誰から？』

『或るコサックから。』

『待て！ そのコサックだが、そいつは若い奴か年寄か？』

『中年で——元氣さうな男でございました。』

『それでどういふ風な奴だつた？ どんな様子をしてゐる？ 狡猾い奴ぢやなかつたか？』

『全く狡猾い奴でございました。だんなしあま。』

『それで、そいつは何と云つた？ 長いことあの馬を持つてゐたのかい？』

『大分長いこと持つてゐたと云つた様に思ひます。』

『よし、それぢやそいつが盗んだに違ひない！ なあ、さうぢやないか、おい！……お前の名は何といふ？』

猶太人は吃驚して、その小さな黒い眼をチェルトツプハノフの方へ向けた。

『私の名前でございますか？』

『うん、さうだ。何といふ名前だ？』

『モーシエル・レーバと申します。』

『よし、ぢや俺の友達のモーシエル・レーバ、聞いて呉れ——貴様は譯のわかる奴だ——マレクアデルは元の主人の外に誰に手を觸れさせやう？ お前も見通る通り、盗んだ奴は鞍をおいたり、轡を嚙ませたり、鞍下を脱がせたりしたに違ひない——乾草の上に鞍下が置いてあるよ！ まことに落著拂つてかういふことをしてゐる！ その元の主人でなかつたら、あのマレ

クアデルが踏み殺して了つた譯だ！ あいつは村中の者の眼を覺ます程な大騒ぎをし出したに相違あるまい！ なあ、貴様はさう思はないか？』

『御尤もでございます、あなたしあま……』

『ぢや、第一にそのコサックといふのを見附け出さなけりやならんといふことになる！』

『だがどうして見附かりませう、あなたしあま？ 私とてもほんの一寸會つた許りで、今頃何處にゐるか、何といふ名前かも知りませんので。困りましたな！』と猶太人は悲しげに長い捲髪を耳の上に振り乍ら附け加へた。

『レーバ！』とチュルトップハノフは不意に叫んだ。『レーバ、俺はこれだ！ 俺は正氣を失くした。氣が狂つてゐる！……お前が手を借して呉れなければ、俺あもうお終ひだ！』

『ですが私なんぞどうしたところで？……』

『まあ俺と一緒に往つて泥棒を探さうよ。』

『だがどちらへ行つたものでせう？』

『馬市や、往來側道かたみちへも、馬盜賊うまぬすめのところへも、町や村や小村へも——何處へでも、何處へでも行くんだ！ 金の心配はするな。俺は金持になつたんだからな！ 俺は一文無しになつたつて、あの可愛い、奴を取返す！ もしあいつ、コサックの敵奴かたまたま、逃げようたつて逃がすもの

か！ あいつの行く處へは何處へだつて追つかけて行く！ 地つちん中へ隠れても追つかけて行く！ 惡魔へ行きや、魔王のところまでも追つかけて行つてやる！』

『え、どうして魔王のところなんぞへ？』と猶太人は言つた。『魔王のところなんぞまで行かなくたつて間に合ひますよ。』

『レーバ！』とチュルトップハノフは言ひ續けた。『レーバ、貴様は猶太人で、貴様の信條は間違ひだが、貴様の靈は多くの基督教徒よりも立派だ！ 俺を可哀あはれだと思つてくれ！ 俺はひとりぢや駄目だ。ひとりぢや、とても遣やつて行かれない。俺はすぐに取逆とりのぼ上せてしまふ方だが、貴様にはしつかりした頭腦あたまがある——素敵に上等の頭腦だ！ 貴様達の種族はみんなさうだ。貴様は教はらなくたつて何でもやつてのける！ 貴様は大方、俺がどうして金を手に入れたか不思議に思つてるんだらう。まあ、俺の室むろへ來い——金をみんな見せてやる。貴様はそれを取つてもいい。俺の首から十字架はらうを外してもいい。たゞ、あのマレクアデルを取り返してくれ、も一度あれを取り返してくれ！』

チュルトップハノフは、まるで熱を病んでゝもぬたかのやうに身體を震はせてゐた。汗はぼたり／＼と顔を流れ下り、その流は一緒になつて髯ひげの中に消えた。彼はレーバの手を握りしめて、しきりに乞ひ求め、そして殆んどキスマでしようとした……彼は錯亂の氣味であつた。

猶太人はそれを拒んで、自分にはとてもほかへ行くことが出来ない、仕事があるからと云ふやうなことを言はうとした……けれども無駄だ！ チェルトップハノフはなんにも耳に入れようとさへしない。どうにもかうにも仕方がない。猶太人もとうとう承知した。

あくる日、チェルトップハノフはレーバと共に百姓馬車でベズゾノヴァを出立した。猶太人は何だか困つたやうな様子をしてゐた。彼は片手で欄へつかまりながら、そのやせこけた體をがたくと揺れる腰掛臺の上に躍らせ、片手には、新聞紙に包んで手形の小包を入れてある、自分の懐ろのあたりを押へてゐた。チェルトップハノフは彫像かなんぞのやうに坐り込んで、たゞ眼を四邊へくばつて深い息を吐いてゐるばかりである。腰には一挺の短劍を著けてゐる。

『俺と馬との間を割いた悪黨も、今ぢや要心してゐなくちやなるまい！』と二人が大通へ出たときに彼は呟いた。

彼の家の事を、私はペルフィシカと一人の年をとつた料理番とに任せて置いた。その料理番は、彼が可哀相だと云ふので世話をしつてやつてゐる聾の百姓婆である。

『マレクアデルに乗つて歸つて来るか』と彼は別れるとき彼等へ言つた。『でなければもうこれつきり歸つて来ない！』

『そのときやお前はすぐに俺と結婚するんだぜ！』とペルフィシカは肘で料理番の肋骨を衝きながら戯言を言つた。『案じることはないよ！ 旦那様は御歸りになりはしないからね、私は獨りつきりで死んでしまふのさ！』

九

一年経つた……まる一年。パンテレエ・エレミチからは何の消息もなかつた。料理番は死んでしまひ、ペルフィシカ自身も此家を捨て、町へ出ようと決心した。町にはその従兄弟が理髪屋に奉公してゐて、それから頻りに來いと勧められてゐたのである。すると不意に、彼の主人の歸つて來るといふ噂が擴がった。教區の僧侶はパンテレエ・エレミチ自身から一通の手紙を受取つた。それには、ベズゾノヴァへ歸るつもりだと云ふことを告げ知らせ、近い内に歸るから下男に用意さして置いて貰ひたいと云ふことを頼んである。この言葉をペルフィシカは家を少し掃除して置けといふ意味に解した。けれども彼はその消息にあまり信用を置かなかつた。ところが、彼は僧侶の本當を云つてたことを覺らせられた——數日たつて、パンテレエ・エレミチその人が、マレクアデルに乗つて、中庭に姿を現はしたとき。

ペルフィシカは主人の處へ駆け寄つて、鏡につかまりながら、主人の下りるのを手傳はうとした。然しチェルトップハノフは自分ひとりで馬から下り、勝ち誇つたやうな目で周囲を見

まはし乍ら、高い聲で叫んだ。『俺はマレクアデルを見附けようと言つたが、その通り敵の邪魔、運命そのもの、邪魔をも物とせす見附け出したのだ！』ペルフィシカは彼の手にキスすべく近寄つて來た。けれどもチュルトツプハノフはその僕の心盡に何等の注意をも拂はなかつた。マレクアデルの手綱をとつて自分の後ろに従へながら、彼は大腿に既の方へ歩いて行つた。ペルフィシカはいよ／＼熱心にその主人を見成つた。そして彼の心は沈んだ。『いや、一年の間に随分瘦せて年を取つておしまひなすつた。そしてまあ、何といふいかつい恐い顔におんななすつたらう！』人はパンテレエ・エレミッチがその目的を達したので、浮々してゐることゝ思つたかも知れぬ。なるほど彼は浮々してゐる……だが矢張りペルフィシカの心は沈んだ。彼は一種の恐怖をさへ感じた。チュルトツプハノフは馬をもとの場所へ置いて、軽くその脊中を叩いて言つた。『そら、また歸つて來たんだよ。これからは爲ることによく氣を付けてな。』その日に彼は仕事をはなれた一人の自由民を番人として備ひ入れ、自分は再び自分の室へ引き籠つて、従前のやうな生活をはじめた……

但し、丁度従前のやうにはない……だがそれに附いてはまたあとで……
歸つたあくる日、パンテレエ・エレミッチは自分の室へペルフィシカを呼び入れた。そして他に話しかけるべき人間もないので彼に話しはじめた——勿論自分の威厳を見せようとい

ふやうな様子で、持前の低音で——彼がマレクアデルを見附け出した一伍一什を。チュルトツプハノフは話をする間窓にむいてかけてゐた。そして長い煙管で一服やつてゐると、ペルフィシカは戸口に立つて、兩手を背に廻して、謹んでその主人の後頭を見つめながら、彼の話すのを聞いてゐた。それを聞いて見れば、多く無益な骨折とくだらない旅行とのち、パンテレエ・エレミッチはとう／＼猶太人のレーバをも連れず、たつたひとりでロミヨンの馬市までやつて來た。レーバは性格が弱いので我慢が仕切れなくなり、彼を棄て去つて來たのである。それから五日目に、彼が立ち去らうとしてゐたとき、も一度小馬車の列について歩いてゐると、ふと彼は欄につないだ三疋の馬の間に見た——彼はマレクアデルを見たのである！彼は一目見てさうだと思ひ、マレクアデルも彼をみとめて嘸き、繩を引つぱり、蹄で地を引掻きはじめたといふ。

『ところで、あいつはコサックが連れてゐたのぢやない』とチュルトツプハノフは、やつぱり頭を振りむけもせず、そして同じ低音で話をつづけた。『ジプシーの馬商が連れてゐたんだ。俺は勿論、早速馬を取り押へ、腕力で、も連れて行かうとしたが、ジプシーの畜生奴、火傷でもしたやうに、市場一杯にきこえるやうな大聲を張り上げ、彼が神かけて他のジプシーから買つて來たに違ひないと言ひ出した——而して、私が盗んだといふならば、その證人を出しな

さいとぬかすんだ……俺は唾をして、彼に金を拂つた。あの畜生奴！俺の心にあつたのは、可愛い、奴を見附けたと云ふこと、心の平和を回復したといふことだけだから。それから又、カラチェフニキーではある男をコサックと取りちがへてな——俺はあれが俺の馬を盗んだのだと云ふ猶太人のレーベの言葉を眞に受けたので——そいつの面をはり飛ばした。ところが、コサックだと思つたのは或る僧侶の息子であつて、俺から賠償金を取りやがつた——百二十留ばかりな。なあに、金なんぞいつでもまた拵へられる。嬉しいのは、俺がまたマレクアデルを手に入れたことだよ！俺は今ぢや幸福だ——俺は平和に暮らして行くんだ。それでお前に一言云ひ聞かして置くがな。ペルフィシカ、そんなこともまああるまいが、萬一此近くにコサックの姿を見附けたら、何も云はずに直ぐさま驅けて来て、俺に鐵砲を渡せ。さうすれや俺がいゝやうにする！』

これはパンテレエ・エレミッチがペルフィシカへ言つた言葉であつた。これは彼の舌が語つたところのものだ。しかし心では、口で言ふほどすつかり平和になりきつてゐなかつた。

あゝ！彼もその心の奥底では、彼の連れ歸つた馬が本當にマレクアデルであるとは、十分に信じ切つてゐなかつたのである！

十

面白からぬ時はパンテレエ・エレミッチの上に續いた。平和は正に彼の享樂したる最終のものだつた。なるほど彼にも幾日かの幸福な日があつた。その時分には、心の内に起りたつ疑なんぞまことに何でも無い物のやうに思はれた。彼は煩い蠅を追ふやうに、馬鹿な考を追つ拂つた。そして自分自身を笑ひさへした。しかし彼には悪い日もあつた。うるさい考は再び床下の鼠のやうにそつと忍んで来て、心の根を嚙んだり裂いたりしはじめた。そして彼は人知れぬ苦みの中に日を過ごした。彼がマレクアデルを見附け出したあの記憶すべき日には、チルトップ・ハノフは狂氣のやうな悦びのほかの何物をも感じなかつた。……が次ぎの朝、宿屋の天井の低い小舎の中で、彼がまる一晚寄り添つてゐた此馬の回復されたる悦びに鞍を置き初めたとき、彼は初めて或る内密の劇痛を覺えた……彼はたゞ首を打ち振つた、がしかし種は既に蒔かれてゐた。歸る途中（それはまる一週間ほど續いた）、疑は滅多に彼の内に起らなかつた。疑は彼がベズネヅ・ハノフへ歸るや否や、彼が正真正銘のマレクアデルのもとのゐた所へ再び歸るや否や、より強くよりはつきりしたものになつて來た。……歸り途には、彼は悠然と乗り込んで、ゆらりと歩ませながら、あちらこちらを見廻して、『時々チルトップ・ハノフの思ひ事はいつでもかなふんだな！』と云ふ考に打たれ、ひとりでにほゝゑむより外、何にも考へることなしに短い煙管をふかして行つた。けれども家へ歸つてしまつてからは、

萬事の調子がすっかり變つた。しかし彼はこれらの事をすべて胸中にひめてゐた。虛榮心だけでも彼が衷心の恐れを表白する事を妨げた。彼は今度の新しいマレクアデルが、もとのではないかも知れぬといふやうな事を、一寸でもほのめかす者があつたなら、その者を片々に引き裂いたかも知れない。彼は『うまく馬がとり返された』祝辭を、偶然顔を合はした二三の人々から受け取つた。けれども彼はさうした祝辭を求めなかつた。彼は前よりも一層人とのあらゆる接觸を避けた——よくない兆候である！ 彼は殆んど常にマレクアデルを試験にかけてゐた——若しさう云つていゝものならば。彼は野原の少し離れた或る地點まで乗り出して試して見たり、こつそり既へもどして、あとに錠をかけて、馬の頭の眞前に立ちながら、その目を見入つて、『お前か？ お前か？ う？』と囁き尋ねたり……また黙つてぢつと幾時間もぶつとほしに馬を見つめて、それから元氣づいて、『さうだ！ あいつだ！ 勿論あいつだ！』と呟き言つたり、また途方にくれた、當惑した色を顔に浮べながら出て行つたりする。チェルトップハノフは此マレクアデルとあのマレクアデルとの間の肉體上相違によつてそれほど思ひ悩まされてゐたのでない……なるほどそこには多少のさうした相違はあつたけれど、前のやつ尻尾と鬣とは少し薄く、その尾はもつと尖つて居り、その踵はより短く、その目はより輝いてゐたけれど——しかしこれらは、或はたゞの思ひなしかかも知れな

い。チェルトップハノフを一番閉口させた事は、所謂精神上の相違ともいふべきものであつた。前の馬の習慣は異つてゐた。總ての生き方が同じでなかつた。例へば前のマレクアデルは、チェルトップハノフが既へ這入る度毎に四邊を見廻して細く嘶いたものである。然るにこの馬は何事もなかつた様に乾草をばくく食りつゞけるか、でなければ頭を垂れてうとくしてゐた。兩方とも主人が鞍から飛び下りた時には、ぢつとして立つてゐるが、前の馬は呼ばれると直ぐにその聲を聽いてやつて來たけれども、今度のはぢつとしてその儘に立つてゐる。前の馬は同様に速く然し乍らより高くより大足に躍進した。今度のはよりゆつくりした歩調で、より多くぐらぐらとした速歩を踏み、折々その履でもつて『のたくつた』——即ち後脚を前脚にかけ合せた。前の馬は決してそんな見つともない事はしなかつたのに！ 今度の馬は——これが甚くチェルトップハノフを動かした——何とも云へない馬鹿氣た様子をして兩耳をびく／＼やりつゞけるが、前の馬には全くそんなことはなかつた。あいつは片つ方の耳を後へ反らして、その主人の爲めに用心でもする様に、ぢつとその儘にしてゐるのが常であつた！ 前の馬は身の周りが汚くなつたと見るや否や早速後脚で仕切の壁をこつ／＼と叩く。然るに今度のは糞が腹までつかへる様に溜つても氣に止めない。前の馬は風に向つて立たされでもすれば、深い息を吸つてぶる／＼と體を震はしたが、今度のは只鼻息を荒くする丈で

ある。前のは雨に閉口したが、今度のはそんなことは何とも思はない……これはよりお粗末な奴である——お粗末なよりお粗末な！ さうしてそのうちに淑かなところが無く、でなくて馭し難い——これはどうも否定されない！ 前の馬は可愛い奴であつたが、今度のは……

これはチュルトップハノフが折々考へたことである。そしてかうした考は彼にとつて非常につらかつた。ある時は又新しく開いた畠なんぞを全速力で駆けさせる。或は窪んだ谷間のどん底へ飛び込ませ、復び峻しい處へ乗りあげさせる。さうして彼の胸は飛び立つ様な悦びに動悸打つ。聲高い叫聲が唇の間から飛び出す。さうして彼は今自分の乗つてるのが本當の正真正銘のマレクアデルである様に、確にマレクアデルである様に極め込んでしまふ。何故と云つて他のどんな馬にこいつのやつてゐる様な藝當が出来やうぞ？

併し乍らこれでも尙時々不足や不仕合せがやつて來た。あんなに長い間マレクアデルを探し歩いた爲め、チュルトップハノフは莫大な金を使つて了つた。彼は今やコストロマ種の獵犬なんぞ夢にも思はないで、従前通り只一人で近邊を乗り廻してゐた。すると或朝ベズゾノヅから四哩計り行つた處で、チュルトップハノフは彼が一年半許り前にあんなに威張つて見せたあの公爵の獵仲間にはつたり出逢つた。さうして宛も運命の仕業であるかの如く、その日一匹の野兎が犬に追はれて生垣から飛び出した。坂を駆け下りなければならなかつた！ ぼ

う！ ほう！ 獵夫達擧つてその後を追かけた。チュルトップハノフも又それについて追つかけた。併し連中の人達と一緒にならず彼が前にやつたと同じく、二百歩許りも側によつて追つかけた。一つの大きな水の流が丘の腹を横切つて曲りくねりながら走つてゐる。それが漸々と高くなるにつれて、次第に狭くなつてチュルトップハノフの行手を遮つた。彼が今飛び越さうとしてゐるさうして十八ヶ日以前には實際飛び越したところのその點は、幅八呎深さ十四呎あつた。勝利——あんな悦ばしい方法に於て繰返される勝利——を豫想して、チュルトップハノフは雀躍し乍らその鞭を振鳴らした。獵仲間もその眼をこの勇敢な乗手に注ぎ乍ら、同じく躍進してゐた。彼の馬は鐵砲玉の様にぶん／＼と飛んで行つた。そして今水の流が丁度鼻先へ現れた——さあ、さあ、一飛だ、あの時の様に……ところがマレクアデルはびたりと停つて左の方へくると廻つた。そしてチュルトップハノフが川淵の方へ流の方へ引張りつけるにも關らず、彼は谷間に沿うてずん／＼と駆け出した。

馬はその時怖ぢけがついたのだ。自分を信じなかつたのである！

その時チュルトップハノフは恥辱と憤怒とに燃え立つて涙含んで手綱を落した。そして馬の行くに任せて丘を下へ獵仲間から遠く遠く駆けさせた。彼等の嘲りを聞くまいと、又彼等の厭な眼から成るべく早く遁れたいと願つたから！

泡だらけになつてその腹をむごたらしく打たれてマレクアデルは家へ飛び歸つた。そしてチェルトップハノフは直ぐ様自分の部屋へ閉ぢ籠つた。

『いや、あれぢやない。俺の可愛い奴ぢやない！ あいつなら、自分の頸骨を挫いても俺を裏切る様なことはなからう！』

十一

とう／＼チェルトップハノフを所謂『片づけ』てしまつたのは次の様な事情である。或日彼はマレクアデルに乗つてベズゾノヴァの屬する境區の教會堂の近くにある牧師館の後庭をぶらついてゐた。コサックの毛皮の帽子を目深に引冠つて、兩手を鞍の前輪に寛く垂れて、心の中にある漠然とした不満を抱き乍ら、ゆる／＼と歩ませた。不意に誰かが彼に呼びかけた。

彼は馬を止めて頭を上げた。そして兼て往き來をしてゐた助祭を見た。鳶色の三角帽を豚の尻尾に組んだ鳶色の髪の毛の上に冠り、黄ろつぼい南京木綿の長い上衣を著、腰から下の大部分は青い織物の片で巻いて、この僧は自分の後庭へ出て來た。そしてパンテレエ・エレミツチの姿を見附けたので彼に敬意を表し、その機會を捕へて何かの質問をするのが自分の義務であると考へた。一體何かかうした内密の動機でもなければ教會の人々などは世俗の人

間に話しかけようとするものではないのである。

然しチェルトップハノフはその助祭なんぞに何の頓著もない。彼は只助祭のお辭儀に應へた許りで、口の中に何かぶつ／＼云ひ乍ら、既に鞭を打鳴らしてゐた。その時……

『や、どうも素晴らしい馬ですな！』と助祭は急いで後をつけた。『全くこりあ御自慢なすつてもいゝ。貴方の目の早いには實際驚きますよ。全で獅子の様ですな！』

この助祭殿は自分の雄辯を鼻にかけてゐる。これは牧師殿の大いにもて餘してゐることだつた。といふのはその牧師さんが頗る口不調法でウツカなどを飲んでさへ舌の根をゆるめることが出来なかつたので。

『悪者の謀みにかゝつて一頭失くしても』と助祭は續けた。『貴方はそんなことに力を落さず、寧ろ反つて一層神様の攝理を御信仰になつて又別の手にお入れになりました。前よりちつとも劣らない、寧ろ一層立優つてゐると申しても宜い位なのを手にお入れなすつた。と云ふのも……』

『何を詰らないことを云ふんです？』とチェルトップハノフは面白くなさうに遮つた。『別の馬とは何のことです？ これは他の馬ぢやない、マレクアデルです……私は見附けて來たのです、馬鹿なことを云つちやいなさー！……』

『これは／＼！』と助祭は指で鬚を弾き乍ら、熱心の眼を輝かしてチュルトップハノフを見乍ら懈げな聲で併し力を籠めて答へた。『これはどうしたのです？ 貴方の馬は確か去年の和解祭から二週間程前に盗まれた筈で、そしてもう今は十一月の末に近いですからな。』

『うん、それがどうした？』

助祭は矢張り鬚を弾いてゐる。『どうしたと云つてあれからもう一年にももつともならず。それに貴方の馬はあの時分灰色の斑でした、恰度今のその馬の様にな。いや、實はその馬の方が濃い位ですがな。それがどうしたと云ひますとな、灰色の馬といふ奴は一年も経てばずつと色が薄くなるものです。』

チュルトップハノフはびくりとした……誰か彼の胸へ短刀を突刺しでもしたかの様に。成程灰色の馬は變つた！ こんな何でもない考が、これ迄浮ばなかつたといふのはどうしたのか？

『えゝ！ 豚の尻尾奴！ 退きやがれ！』と彼は怒りに眼を光らせ乍ら、唐突に怒鳴りつけた。さうして忽ち呆れて立つた助祭の眼から消え去つた。

今や凡てのことが終つて了つた！

今や遂に凡てのことが本當に終つて了つた。凡ての事が打壊された。最後の札が投げられ

た。凡てのことは『薄くなる！』といふ言葉の前に粉微塵になつて了つた。

灰色の馬は色が薄くなる！

『駈け出せ、駈け出せ、畜生奴！ 貴様はいくら駈け出してもこの言葉から駈け出して了ふことは出来ないんだな！』

チュルトップハノフは家へ飛んで歸つて再び閉ぢ籠つた。

十二

この下らないやくざ馬がマレクアデルでないこと、それとマレクアデルとの間には些の類似もないこと、少しでも感じのある人ならば只一眼見た丈で判つたであらうといふこと、彼が、チュルトップハノフが、まことに何でもない手で誤魔化されたといふこと——否！ 彼が知り乍ら態々自からを欺き、自からの眼を閉ぢてゐたといふこと——凡てのかうしたことに對して、彼は今や何等の疑ひをも挟まなくなつた！

チュルトップハノフは部屋の中を彼方此方と歩き廻つてゐた——檻の中の猛獸の如く、その度毎に單調に踵を返しながら。彼の虚榮心は堪へ難く傷けられた。然し乍ら彼は傷けられたる虚榮心の痛みに憫んだ許りでなく、絶望に壓倒され、憤怒に息窒らせられ、復讐に對する渴望に燃えてゐた。ところで誰に對しての憤怒か？ 誰に復讐すればいゝのか？ 猶太人に

か、ヤッフにか、マーシャにか、助祭にか、コサックの泥棒にか、近所の人達残らずにか、世界全體にか、彼自身にか？彼の脳は駄目になりつゝあつた。最後の札が投げられた！この比喩は満足させた。彼は復び最も價値のない、最も輕蔑すべき人間であり、下らないお笑草であり、賑かな道化者であり、厄介なたはけであり、助祭位の人間の愚弄の的になるべき者であつた！……あの嫌な厩の尻尾の牧師奴が、灰色の馬と愚かな地主との話をしてゐるのがあり／＼と見える様に彼は思つた……えゝ畜生！！チュルトッブハノフは空しく彼の興奮する感情を抑へようと努めた。この……馬がマレクアデルでないまでも矢張……良い馬であり、これから先幾年か役に立つかも知れないといふことを、空しく自分自身に云ひ確かめようと努めた。彼は直ちに憤然としてかうした考を退けた——宛らそのうちに、彼が已にあんなにも侮辱したと思ふところの、前のマレクアデルに對する新しい侮辱でも含まれてゐたかの様に……さうだ、全く！このやくざ馬、腐肉を彼は眼の見えぬたはけの如く、あの馬と、マレクアデルと同じレエルに置いたのである！それからこのやくざ馬がどんな役に立つかといふことに就てもだ！……宛らあれに跨がつて歩くのを、宜いことにでも思つてゐるかの様に！……どうして！……そんなことがあつたつて乗るものか！……こんな馬は韃靼人の犬の餌食にでもたゞき賣つて了ふであらう——それ位が丁度宜いんだ……さうだ、それが一番いゝんだ！

だ！

二時間ももつともチュルトッブハノフは部屋の中を往つたり來たりした。

『ベルフィシカ！』と彼は唐突に呼び立てた。『直ぐに酒屋へ駈けてつて、ウツカを一ガロン取つて來い！いゝか？一ガロンだぞ、おい！たつた今このテーブルで飲まうといふんだ！』

ウツカは程なくパンテレエエレミッチのテーブルの上に現はれた。さうして彼は飲み始めた。

十三

もし誰かゞその時のチュルトッブハノフを見たならば、もし誰かゞ彼の糞自暴に一杯又一杯と飲み干すのを目撃したならば——その人は屹度我しらす身慄をしたであらうと思ふ。夜が來て蠟燭がテーブルの上にぼんやりと點つた。チュルトッブハノフは隅から隅へ歩き廻ることを止めた。彼は顔を眞赤にして、鈍い目附をして坐り込んだ。その目を彼は或時は床の上に落し、又或時はぢつと暗い窓の上へ注いだ。彼は立上つてウツカを注いでそれを飲干して、復び腰を掛け、復びその眼を一點に注いで身動きもしない——只彼の息使ひがより速くなり彼の顔がより赤くなつた丈である。何かの決心が心の中に熟しつゝあつたかの様に見

六〇一
える。その決心を彼は自ら恥ぢ乍ら漸々と慣れて來つゝあつた。只一つの考が執念く寄せ續けてゐた。只一つの影像がいよ／＼はつきりと現れて來た。さうして大醉の燃える様な壓迫の下に怒りにいらだつた感情は残忍の感情と入り換り、復讐を想ふ微笑が彼の唇の上に現れた。『さうだ、時は來た！』と彼は事もなげな殆んど退屈した様な調子で揚言した。『愈々とりかゝらなければならん。』

彼はウオトカの最終の盃を飲干して、寢床の上から短銃を——彼がマーシヤを撃つた恰度あの短銃を——取り卸して弾丸を込めて幾發かの藥莢を——何かの用意に——ポケットに入れた。さうして既の方へ廻つて行つた。

彼が戸を開けかけた時、番人は傍へ駆け寄つた。が、彼はその番人に向つて怒鳴りつけた。『俺だぞ！ 貴様は盲か？ そこ退け！』番人は一寸側へ寄つた。『行け、行つて眠ろ！』とチュルトツプハノフは復び彼に怒鳴りつけた。『此處には貴様の番をする様なものは何にもない！ いや、大變な珍品がある、本當に番をしてやり甲斐のある様な寶物がある！』彼は既へ入つた。マレクアデル……偽のマレクアデルは敷薬の上に横はつてゐた。チュルトツプハノフは『起きろ、この畜生！』と言ひ乍ら一蹴蹴り上げた。次に彼は端綱を釘から外し、鞍下を剝いで地面に投げつけた。それから従順な馬を仕切のうちに手荒く引廻して、中庭へ引出し

中庭から野原へ引出して番人を少なからず驚かした。番人はその主人が鞍も置かない馬を引張つて夜分何處へ行かうとするのか全で譯が解らなかつたのである。番人は勿論問ひ尋ねることを怖れた。さうして只主人を目送してゐる内に、主人は遂に近くの森へ續く道の曲角で見えなくなつて了つた。

十四

チュルトツプハノフは立停ることもせず、四邊を見廻すこともせず、大股にすん／＼と歩つて行つた。マレクアデルは——お終ひまでこの名前で通すことにしよう——おとなしく彼に付き従つた。それは可成り晴れやかな夜であつた。チュルトツプハノフは、行手に黒い塊をなしてゐる森のぎざ／＼とした輪郭を見別ける事が出來た。彼は冷い夜の空氣に觸れた時、恐らく彼の飲んだウオトカの酔をさまして了つたであらう——若しもすつかり彼を支配し切つた外より強い酔さへなかつたならば。彼の頭は重く、彼の血は喉や耳で高く脈打つた。けれども彼はしつかりした歩調で進んだ。さうして彼が何處へ行きつゝあつたかを知つてゐた。

彼はマレクアデルを殺さうと決心してゐた。彼は終日それ以外の何物をも考へてゐなかつた！……今彼は決心してゐたのである！

彼はこれを爲すべく只に穩かに出かけて行つたのみならず、又確信を以て躊躇する所なく出掛けて行つた——義務の觀念から何かをしようとしてゐる人のやうに。この『仕事』も彼にとつてはまことに『何でもない』ことである様に思はれた。このごまかしものに片かたを附けることに依つて、彼は『凡ての人々』に對する義務を一度に果してしまふのだ。彼は彼の愚劣に對して彼自からを罰し、彼の本當の愛馬に償ひをし、又世間全體（チュルトップハノフはこの『世間全體』なるものを甚くひど氣に病んでゐた）に、彼が決して馬鹿に出来ないといふことを示すのである……又特に彼はごまかしものと共に、彼自からをも片附けようとしてゐるのである——今や何の爲めに彼が生き永らへねばならぬか？ かういふ考へが如何にして又何故に彼の頭の中に形をとつたか、彼にはまことに譯のない事の様に思はれた——けれどもそれを説明するのは、全然不可能でない迄も餘程困難なことである。爰所を突かれて獨りぼつちになつて、近くに一人の人間もなく、一文の金もなく、ウツカで血を燃やされて、彼は狂氣に近い状態へ來てゐた。さうして狂氣した人間の途方もない氣紛れにすらも、彼等自身の眼から見れば一種の論理があり、正義すらもあるといふことは何の疑をも容れない。兎に角チュルトップハノフは彼の正義を信じ切つてゐた。彼は躊躇しなかつた。彼は罪人といふ言葉に依つて誰が意味せられるか、何等の明白なる定義をも彼自からに與ふることなく、

その罪人に對して宣告を執行すべく取急いだ……實を云へば、彼は彼の爲さんとしてゐるものを餘り反省しなかつたのである。『さうだ、かたをつけて、かたを附けてしまはなければならん。』といふのが彼の愚かにも嚴きびしく彼自らへ繰り返してゐたところのものである。『かたをつけて了はなければならん！』

かくて罪なくして罪に問はれたるものは、彼の後におとなしく従つて行つた……がチュルトップハノフの胸には彼に對する何等の憐憫の情もなかつた。

十五

彼がその馬を連れて行く森から遠からぬ處に、若い檜の茂みに半ば蔽はれた小さな谷が擴がつてゐる。チュルトップハノフはその谷へ下りて行つた……マレクアデルは躓いて殆ど彼の上に倒れかゝらうとした。

『俺をお押し潰す氣だな、うん、この畜生！』とチュルトップハノフは叫んだ。さうして自らを護らうとするかの様に、ポケットから短銃を引出した。彼は最早猛烈な憤怒を感じない。寧ろ犯罪行爲に先だつて人を襲ふといふ特別な感覺の麻痺を覺えた。併し彼自身の聲は彼を怖れしめた——それは木深い谷間の重苦しく腐つた濕氣しめりけのうちに黒い枝の翳してゐる下に、如何にも暴々しく又奇體に響いたのである！ のみならず彼の叫聲に應じて、何だか巨きな鳥が

不意に頭の上の木の頂上で翼鼓きをした……チェルトップハノフは身慄ひをした。彼は云はゞ彼の行爲に對する證人を呼び覺ました様なものである——さうしてどんな場所で？ 人つ子一人行き逢ふべくもない様な寂寞たる場所に於て……

『畜生。何處へでも勝手に失せやがれ！』と彼は呟いて、マレクアデルの手綱を放し、ピストルの臺尻で肩の邊をいやといふ程撲りつけた。マレクアデルは素早く向き直つて谷を攀ぢ上つて……逃げて了つた。が、その蹄の音は久しく聞えてゐなかつた。今しも吹き起つた風が、凡ての物音を一つに取混ぜてしまつたのである。

チェルトップハノフもそろ／＼と谷から攀ぢ上つて、先刻の森へやつて來た。そして家路を辿つて行つた。彼は自分自身に寛がなかつた。彼が頭と胸とに感じてゐた重荷は、手足全體にも擴がつてゐた。彼は腹立たしく陰鬱な不満足な飢ゑた様な心持で歩いて行つた——誰かが彼を侮辱したかの様に、彼の獲物を搔つ攫つたかの様に、彼の食物を奪ひ去つたかの様に……

自殺を目論んで遣り遂げなかつた人はかうした感じを知つてゐるに違ひない。

不意に何物か後から首筋のところを突ついた。彼は四邊を見廻した……マレクアデルが道の真中に立つてゐる。彼は主人の後から歩いて來た。彼は自分の居ることを告げ知らせ

る爲めに鼻で以て主人に觸つたのである。

『おー！』とチェルトップハノフは叫んだ。『自分から、自分から進んで死にに來たんだな！ ぢやあ待て！』

瞬く間に彼はピストルを掴み出して、引金を引いて、筒口をマレクアデルの額へ向けて發射した……

可哀相な馬は側へ飛び退いて、後脚で突立つて、十歩許り駈け出したが、不意にぱつたり斃れて了つた。そして地面にのた打ち廻り乍ら喘いだ……

チェルトップハノフは両手に耳を塞ぎ乍ら驅け出した。彼の膝はわな／＼と震へてゐた。彼の酔も復讐も盲目的な自信も——凡てのものが立ち所に消え去つた。そこには羞恥と嫌惡の感じの外——それから今度こそ彼自身にも結末をつけたといふ間違のない意識の外、何物も残つてゐなかつた。

十六

六週間の後、馬丁のペルフィシカはベズゾノヴァを通りかゝつた警部を呼び止めるのを自身の義務と考へた。

『何の用か？』と警官は尋ねた。

『どうか貴方様、私共の家までお出を願ひ度いので』と馬丁は丁寧に御辭儀をし乍ら答へた。
『パンテレエ・エレミッチが何だか死にさうになつて居ります。それで面倒な事にならなけや
宜いがと心配でございます。』

『何？ 死ぬ？』と警部が尋ねた。

『左様でございます。最初旦那は毎日ウツカをおやりになりましたが、今ちや床に就いた
つきりで随分瘦せてお了ひなさいました。もう何にもお判りにならない様です。全で口が利
けなくなりました。』

警部は馬車から出た。

『坊さんの所へは行つてやつたらうな？ 懺悔は済んだか？ 聖餐式は済んだか？』

『いゝえ、まだでございます。』

警部は顔を擧めた。『どうしたといふんだ？ 一體どうしたといふんだ——え、おい？ お
前だつてそれ位の事は心得てゐさうなものぢやないか……お前の容易ならぬ責任になる
んだぜ！』

『いや、私も一昨日と昨日と二度まで尋いて見たのです。』とびく／＼もので馬丁は云ひ譯
をする。『パンテレエ・エレミッチさん、坊さんの所へ行つて参りませうか？』と申しますと、

『黙れ、馬鹿、それよりも自分の用でもしろ』と仰有るんです。だが今日話をしかけて見ます
と、旦那は只私を見て、髯をびく／＼とおやりになつた許りです。』

『それでこれまで澤山にウツカを飲んでゐたのかい？』と警部は尋ねた。

『まあ、澤山の方です！ ところで一つ貴方様旦那の部屋までお出を願ひ度いもので。』

『よし、案内をした！』と警部は不平らしく云つて、ペルフィシカの後について行つた。

驚くべき一つの光景が彼を待受けてゐた。濕つぽい薄暗い裏座敷の、鞍下で包んだみすぼ
らしい寢臺の上に疎い毛織の外套を枕代りにして、チュルトップハノフが寝てゐる。顔の色は
今や蒼白くといふよりも寧ろ死骸の様に黄色つぽい緑になつてゐる。眼は鉛の様な眼瞼の下
に落窪んで居り、尖つたつまみ上げた様な鼻は——未だ赤味を帯びた——蓬々と延びた頬
髭の上に見えてゐる。彼は胸に藥莢入のポケットをつけた何時も乍らのコーカシヤ風の上衣
を著て、青いサーカシヤ風のズボンを穿いて寝てゐる。頂上の眞赤なコサック帽は眉際迄額を
蔽うてゐる。チュルトップハノフは片手に獵用の鞭を持ち、片手には縫取をした苧入——マ
シヤが彼に贈つた最後の物——を持つてゐる。寢床に近いテーブルの上には空になつた酒の
壘が一本置いてあり、寢床の頭の方には水彩畫のスケッチが二枚ピンで壁に止めてある。打
見た所、一枚はギターを手にした肥つた男——恐らくはネドビュスキンを描いてゐる。今一

枚は全速力で駆けさせてゐる馬上の人物を寫してある……馬は子供等が壁や塀などに悪戯書きをする突拍子もない動物なんぞに似てゐる。けれども念入りに彩色した鼠色の馬の斑点や、乗手の胸についてゐる藥莢入のポケットや、長靴の尖つた指先や、夥しき口髭などを見れば疑ひを容れる餘地がない——此のスケッチはパンテレエ・エレミッチがマレクアデルに乗つてゐるところを描いたつもりなのである。

驚いたる警部は如何にすべきかを知らなかつた。死の沈黙が室内を支配してゐる。『何だこりやもう死んでる！』と彼は思つた。さうして聲を張上げ乍ら云つた。『パンテレエ・エレミチさん！ おい、パンテレエ・エレミッチさん！』

すると大變なことが持上つた。チュルトッブハノフの眼瞼がそろ／＼と開いて、眼が直ぐにぼんやりとなり乍ら、まづ右から左へ、次に左から右へと動いて、警部の上にびたりと止つて——彼を見た……何者かゞその鈍い白味の中に輝き、閃に似た様なものもとに復つた。蒼い唇は漸々と離れて行つて、嘎れた殆ど墓場からでも出たと思ふ様な聲が聞かれた。

『古い祖先からの貴族の家に生れたパンテレエ・エレミッチが死ぬるんだ。誰が俺の死ぬるのを止めるか？ 俺は誰に何の借もない、誰に何の貸もない……皆な打捨つて置いて呉れ！ 行け！』

鞭を持つた手がそれを上げようとした……然し駄目だつた！ 唇が復び固くくつついて眼が閉ぢられた。さうして前の如くチュルトッブハノフは空の袋の様に平たく、兩脚をすつかり著けて、彼の慰めなき床の上に横たはつた。

『死んだら知らして呉れ』と警部は部屋を出て行くとき、ベルフィシカに囁いた。『それからもう坊さん呼びにやつてもよからう。相當な儀式をしてやらなけりやいけないぞ。』

ベルフィシカはその日坊さんを頼みに行つた。さうして翌朝は警部の所へ届けに行かなかればならなかつた。パンテレエ・エレミッチはその夜のうちに死んだのである。

彼の葬式の時、二人の人が柩の後について行つた。それは馬丁のベルフィシカとモーセル・レーバとである。チュルトッブハノフの死んだといふ噂がどうかしてあの猶太人の所へ届いた。さうして彼はその恩人に對する最後の敬意を拂はずにゐなかつたのである。

生きてた遺骨

『あゝ、久しく苦しめる郷國よ、

露西亞の民の住まへる土地よ。』

エフ・チュウチェフ

フランスの諺に『乾いた漁夫と濡れた獵人とは見ても氣の毒だ』といふのがある。私は漁に對して何等の趣味をも有たぬ故、晴やかな好い天氣に漁師の心持がどんなものであるか、又天氣の悪い日に漁の澤山あつたといふ悦びが如何なる程度迄、すぶ濡れの不愉快を償ひ得るものであるかを知らない。然し獵人にとつては雨といふ奴は本當に災難である。さうしてイェルモライと私がピエプスキー地方へ松鷄ちんてうを撃ちに行つた時、私が出會つたのは丁度この災難であつた。雨は早朝からひつ切りなしに降り續けた。雨を免れるべく如何なる方法を我々が講じ残したか？ 我々は雨合羽をすつぽりと頭から被つて、雨滴を避ける爲め樹の下に立つてゐた……その雨合羽が我々の射撃を妨げるのは云ふ迄もない。水のそれを沁み透

つて來るのはこの上も無く情けない有様である。それに樹の下へは初めのうちこそ雨も落ちて來なかつたが、後には葉の上に溜つた水が急に流れ出して、枝々から我々の上にバラ／＼と降りかゝる。冷たい水がネクタイの下へ這入つて脊椎せぼねを傳つて流れ下る……これはイェルモライの云ふ通り『全く心持が悪』かつた。『いや、ピョトル・ペトロギッチさま』と彼は遂に叫んだ。『こんなぢやとてもやり切れません……今日は獵は駄目です。犬の鼻も役に立たず……鐵砲も火が附かず……いやもう、さん／＼な！』

『どうしたもんだらうな？』と私が尋ねた。

『まあ、アレクシエフカの方へ参りませう。貴方は御存知ないかも知れませんが——貴方のお母さんの御領地で同じ名の村がございます。此處から七哩許りです。今夜は彼處へ泊つてそして明日……』

『此方へ引返すといふのか？』

『いゝえ、此方へ引き返すんぢやありません……アレクシエフカの向うに好い處があります……松鷄には此處なんぞよりすつと好いんですからな！』

私は私の忠實な連に、何故彼が前以てさういふ處へ連れて行かなかつたかと突込むことをしなかつた。さうしてその日我々は私の母の村々の方へ遣つて行つた。正直に云ふと私はそ

んな村の有ることを是迄夢にも知らなかつたのである。行つて見ると、この村には一軒の小さな小屋があつた。随分古くはなつてゐたが、今迄人が這入つてゐなかつたので綺麗であつた。私はそのうちに誠に穩かな一夜を過ごした。

翌日は非常に早く眼を覺ました。日は今出た許りであつた。空には一片の雲もない。四邊の物は凡て皆二倍の輝かしさをもつて輝いてゐる——朝の新しい光と、昨日の夕立との輝かしさで。馬車の用意をさしてゐる間に、私は小さな果樹園の方へぶら／＼と出かけて行つた。その果樹園は投擲り放しになつて荒れ果てゝはゐるが、その中にあの小さい假小屋が香のいい瑞々しい茂みで取圍まれてゐるのである。あゝ外はどんなに爽快であつたらう——晴れやかな空には雲雀が囀つてをり、その鈴の様な囀聲が、銀の珠數玉の様に降つて来る！その翼には屹度、露の滴を載せて持つて行つたに違ひない。その歌は露に潤うてゐる様に思はれる。私は帽子を脱いで愉快な深い息を吸ひ込んだ……淺い谷の傾斜の上に生垣に近く蜜蜂の巢が一つ見える。一筋の狭い小路がそれへ續き、高い草や、葎草が厚い壁の間を蛇の様にうねつてゐる。その草の上にはどうして生えたものか、暗綠色な麻の尖つた莖が、よき／＼と競ひ立つてゐる。

私はこの小路について曲つた。私は蜂の巢へ來た。その傍には小さな細枝を組み合せて造つた假小屋がある。冬時分蜂の巢を入れて置くのである。私は半ば開いたその戸口を覗いて見た。そのうちは暗く靜かで乾いてゐた。其處には薄荷と香油の匂ひがしてゐた。隅の方には幾つかの四脚臺が取附けてあつて、その上に布圍に掩はれて何か小さなものがある……私はそこを立去らうとしてゐた……

『旦那様、旦那様！ ビヨトル・ペトロギッチ様！』と云ふ、微かなゆつくりした囁れた澤邊の蘆の囁きかと思はれる様な一つの聲を私は聞いた。

私は停立した。

『ビヨトル・ペトロギッチ様！ どうぞお入り下さいまし！』と先刻の聲が繰返した。それは先刻私の氣附いた隅つこの四脚臺の所から來たのである。

私は近附いて見た。さうして驚きの餘りに言葉が口に出なかつた。私の前には生きて人間が横たはつてゐたのである。所でそれはどんな種類の人間であつたか？

頭は全く萎びてしまつて、一樣に赤銅色を爲して居り——時代がついて黄ろくなつた古い聖畫の様である。鋭い鼻は齒の尖つたナイフの様で、唇は殆ど見分けがつかない——只齒と眼文けが白く光つてゐる。手拭の下からは黄ろい毛の薄い袴束か、額の上に亂れかゝつてゐる。布圍の折りたゝまれてゐる頃の所には、同じく赤銅色の小さな二つの手が動いて居り、

小枝の様な指がもじくしてゐる。私は一層注意して見た。顔はなかく醜いどころでなく、確かに美しい。然し不思議な凄いところがある。その顔が私に一層凄く見えたのは、その上に——その金属の様な頬の上に苦しげな……苦しげな微笑を見たからである。

『私がお判りになりませんか旦那様？』とその聲は復び囁いた。それは殆んど動かない唇から吐き出されたやうに思はれた。『え、御尤もで御座いますとも、どうしてお判りになりませう？ 私はルケリヤで御座います……覚えていらつしやいますかしたら、貴方のお母さまのスパスコエのお邸で舞踏の指導をいたして居りましたもので……覚えていらつしやいますか——合唱の指導者をもして居りました私を？』

『ルケリヤ！』と私は叫んだ。『お前だつたか？ さうか？』

『はい、旦那様——私があのルケリヤで。』

私は何といふべきかを知らなかつた。さうしてあの澄んだ死人の様な眼を私に向けてゐる暗い動かない顔を、氣拔した様に眺め入つた。こんなことが有り得たであらうか？ この木乃伊の様なルケリヤが——我々の家中で一番美しかつた女で——あの脊の高い肉附の好い、光澤のいゝ、歌つたり笑つたり踊つたりしてゐたあの女であるとは！ ルケリヤに對しては我のあの利發なルケリヤに對しては、若者一同がその愛を求め、私も——當時十六歳の少年

であつた私でさへ私に胸を焦してゐたものだ！

『まあルケリヤ！』と私は遂に云つた。『お前は一體何うしたといふのか？』

『え、さんと辛い目に逢ひました！——しかし若しお嫌でなかつたら、私の身の上話をお聴き下さいませ。その小さい桶へお掛けになつて——もつと近くへ、でなければ私の申すことが聞えますまいから……もう今日ではあまり聲ができませんから……でもまあ、お目にかゝつて嬉しう御座います！ 何うして貴方はこのアレクシエフカなんぞへいらつしやいましたのですか？』

ルケリヤは極めて靜かに弱々しく、然しながら斷れ目なく語つた。

『獵師のイェルモライが連れて來たのさ。だがそれよりも聞き度いのは……』

『私の身の上話ですか？ それはもうお話しいたしませうとも。今からずつと以前——六七年も前のことで御座いました。その頃私はワシリー・ポリヤコフと結婚の約束をいたした許りで御座いました——覚えていらつしやいますか、あの、髪の毛の美しく捲いた本當に立派な男で——貴方のお母さまのお給仕を勤めて居つたのですが。尤も貴方はあの時分田舎にいらつしやいませんでしたね、モスクワの方へ勉強しにいらしつてゐて。ワシリーと私とは随分愛し合つてゐました。私はどうしてもあの人のことを忘れられませんでした。さうして